

神迎御領遺跡

——国鉄井原線建設に係る発掘調査報告——

1981

広島県教育委員会
(財)広島県歴史文化財調査センター

神 辺 御 領 遺 跡

正 誤 表

頁	行	誤	正
図版目次	図版39A地点	S K 01-05, S B 07出土遺物	S K 01-05, S B 07, S K 12出土遺物
1	22	F 御 領	下 御 領
7	9	竪 穴 石 室	竪穴式石室
32	17	北 西 約 m	北 西 約 100m
38	11	減 ズ	減 ズ る
	23	後 で	後 に
40	第16図	出土要比地図	出土要比地図
49	9	などを考慮	などを考慮
	17	散見された	散見した
		49 頁全文と50 頁全文さしかえ	
51	5	器に該当する	器の一部に該当する
	15	現在し、削りも	現在し、内面へ削りも
52	3	(S D 08-5, 6)	(S D 09-5, 6)
	18	下田所式期から亀川上層式期	下田所式から亀川上層期に
	27	過 渡 的	過 渡 的
	27	上 述 の	上 述 の
53	9	(第 図44)	(第30図44)
	12	過 渡 的	過 渡 的
54	9	古墳時代末期	古墳時代前期
55	(注 3)	『神辺御領遺跡』 ——神辺農業協同組合 御野支所建設に係る	『神辺御領遺跡』 ——神辺農業協同組合 御野支所建設に係る』
55	(注 10)	弥生時代 後期 後期後半初頭と中葉以降	弥生時代中期 中期末と後期前半新組
56	(注 17)	『古代学研究』	『古代研究』
65		左 列 の 弥 生 土 器 を ト ル	



神 辺 御 領 遺 跡 遠 景



御領、井原線E地点SD 08・09出土土器

序 文

神辺町は広島県の東南端、岡山県と県境を接する位置にあたり、古代より人々の足跡を数多く残す広島県内でも有数の遺跡密集地として知られております。しかし福山市を中心とする備南地域一帯が昭和38年に備後工業整備特別地域に指定されて以来、開発の波は当地域にまで及ぶところとなり、広島県教育委員会はこれに対応すべく万全を期して対処してまいりました。

ここに刊行するに至りました報告書は国鉄井原線の建設に係る工事予定地内の遺跡についてまとめたもので、昭和42年以来幾度かの協議を経て昭和53年1月より昭和54年3月まで現地調査を実施し記録保存の措置を講じたものであります。この間、調査員各位をはじめ関係の方々には多大な労を煩わせました。その意味からも、本報告書が今後の埋蔵文化財の保護と研究の資料として少しでも寄与できれば幸であります。

最後に、発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただきました日本鉄道建設公団大阪支社、地元神辺町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、衷心より謝意を表する次第であります。

昭和56年3月

広島県教育委員会教育長

高 橋 令 之

例 言

1. 本書は、昭和53年1月より昭和54年3月までの間に実施した広島県深安郡神辺町の国鉄井原線建設に伴う予定地内の事前発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、広島県教育委員会が日本鉄道建設公団より委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターと協力して実施した。
3. 本書は、銀治益生（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ-1）三枝健二（Ⅳ-2）、高倉浩一（Ⅳ-3）が分担して執筆した。
4. 出土遺物の整理、復元、実測は銀治が中心となり埋文センター職員がおこなった。
5. 出土遺物の写真は銀治が撮影した。
6. 出土石器の石材同定にあたっては、県教育委員会指導課福原悦満氏から御教示を得た。
7. 本書に使用した遺構表示記号は次のとおりである。
溝状遺構：SD，住居跡・建物状遺構：SB，土城：SK，不明土城：SX
8. 本報告書第1図に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭55中複，第262号

目 次

I はじめに.....	1
II 位置と環境.....	5
III 調査の成果.....	9
IV ま と め.....	48
付1 掲載遺物観察表.....	57
付2 石器計測表.....	67

図 版 目 次

- 図版1 遺跡遺景(南より)
図版2 A地点SK01-05全景(西より)
A地点SK01(西より)
図版3 A地点SK02(西より)
A地点SK03(西より)
図版4 A地点SK03遺物出土状態
A地点SK04(東より)
図版5 A地点SK05(西より)
A地点SD06(北より)
図版6 A地点SB07(東より)
A地点SK11(南より)
図版7 A地点SK12(東より)
同上 遺物出土状態
図版8 A地点SB13(東より)
A地点SK14・15(北より)
図版9 A地点SD16(西より)
A地点SB17(南より)
図版10 A地点SB18(北より)
A地点SD20(西より)
図版11 A地点SD21(西より)
同上 遺物出土状態
図版12 A地点SD21遺物出土状態
同上
図版13 A地点SB22(東より)
A地点SK25(北より)
図版14 A地点SD26・27(北より)
A地点SD28(南より)
図版15 A地点SD29(北より)
A地点36G遺構全景(西より)
図版16 A地点SK30-38(東より)
A地点SK30(西より)
図版17 A地点SK31(北より)
A地点SK32(南より)
図版18 A地点SK33(東より)
A地点SD34(西より)
図版19 A地点SX35
A地点SX36
図版20 A地点SK38(東より)
A地点SX39
図版21 A地点SX40
A地点SK41(西より)
図版22 B地点遺構全景(東より)
B地点SB01(東より)
図版23 B地点SD02(北より)
B地点SD03(北より)
図版24 C地点SD01(北より)
C地点SD02(北より)
図版25 C地点SD03(北より)
C地点SD04-06(北より)
図版26 C地点SK07(南より)
C地点SD08(北より)
図版27 C地点SD09(北より)
C地点SD10(西より)
図版28 C地点SD11(南より)
C地点SD12(北より)
図版29 C地点SD15(西より)
C地点SD16(西より)
図版30 D地点SD01(東より)
D地点SD02(南より)
図版31 D地点SD03(南より)
D地点SK04(東より)
図版32 E地点SD02(南より)

- E地点SD03 (東より)
- 図版33 E地点SD04~07 (東より)
E地点SD05遺物出土状態
- 図版34 E地点SD08 (西より)
同上 遺物出土状態
- 図版35 E地点SD09遺物出土状態
同上
- 図版36 E地点SD09遺物出土状態
E地点SD10 (南より)
- 図版37 E地点SX11 (東より)
E地点SX12 (東より)
- 図版38 F地点1T全景 (西より)
F地点2T全景 (東より)
- 図版39 A地点SK01~05, SB07出土遺物
- 図版40 A地点SD16, SB17・19, SD20出土
遺物
- 図版41 A地点SD21出土遺物
- 図版42 A地点SD21出土遺物
- 図版43 A地点SD23・24, SK25出土遺物
- 図版44 A地点SK30~SX39出土遺物
- 図版45 A地点SX40, SK41出土遺物
- 図版46 C地点SD09・11・12・15・16出土遺物
- 図版47 E地点SD02出土遺物
- 図版48 E地点SD04・05出土遺物
- 図版49 E地点SD06・07出土遺物
- 図版50 E地点SD08出土遺物
- 図版51 E地点SD08出土遺物
- 図版52 E地点SD08出土遺物
- 図版53 E地点SD09出土遺物
- 図版54 E地点SD09出土遺物
- 図版55 E地点SD09出土遺物
- 図版56 E地点SD09出土遺物
- 図版57 E地点SD09出土遺物
- 図版58 E地点SD09出土遺物
- 図版59 E地点SD09出土遺物
- 図版60 E地点SD09出土遺物
- 図版61 E地点SD09出土遺物
- 図版62 E地点SD09出土遺物
- 図版63 E地点SD09出土遺物
- 図版64 E地点SD09出土遺物
- 図版65 E地点SD09出土遺物
- 図版66 E地点SD09出土遺物
- 図版67 E地点SD10, SX11出土遺物
井原線出土石器

挿入目次

第1図	御領遺跡の位置と周辺遺跡(1:25,000).....	6
第2図	A地点遺構配置図(I)(1:150).....	10
第3図	A地点遺構配置図(II)(1:150).....	11
第4図	A地点遺構配置図(III)(1:150).....	12
第5図	A地点SK02~05実測図(1:30).....	13
第6図	A地点SX35・36・37実測図(1:10).....	21
第7図	B地点SB01実測図(1:60).....	24
第8図	C地点遺構配置図(I)(1:150).....	26
第9図	C地点遺構配置図(II)(1:150).....	27
第10図	C地点SD15・16出土遺物実測図(1:3).....	30
第11図	D地点遺構配置図(1:150).....	31
第12図	E地点遺構配置図(I)(1:150).....	33
第13図	E地点遺構配置図(II)(1:150).....	34
第14図	E地点遺構配置図(III)(1:150).....	35
第15図	E地点SD09実測図(1:60).....	39
第16図	E地点SD09出土窠比較図(1:5).....	40
第17図	E地点SX11実測図(1:10).....	41
第18図	E地点遺構配置図(IV), F地点土層断面図(1:150).....	44
第19図	E地点SD09出土破鏡実測図(1:2).....	54
第20図	A地点SK12, SB13, SK14・15, 出土遺物実測図(1:3).....	69
第21図	A地点SD21出土遺物実測図(I)(1:3).....	70
第22図	A地点SD21出土遺物実測図(II)(1:3).....	71
第23図	A地点SD23・24, SK25出土遺物実測図(1:3).....	72
第24図	A地点SX40, SK41出土遺物実測図(1:3).....	73
第25図	C地点SD01・03・09・11・12出土遺物実測図(1:3).....	74
第26図	E地点SD02出土遺物実測図(1:3).....	75
第27図	E地点SD04・05出土遺物実測図(1:3).....	76

第28図	E地点S D06・07出土遺物実測図(1:3)	77
第29図	E地点S D08出土遺物実測図(I)(1:3)	78
第30図	E地点S D08出土遺物実測図(II)(1:3)	79
第31図	E地点S D09出土遺物実測図(I)(1:3)	80
第32図	E地点S D09出土遺物実測図(II)(1:3)	81
第33図	E地点S D09出土遺物実測図(III)(1:3)	82
第34図	E地点S D09出土遺物実測図(IV)(1:3)	83
第35図	E地点S D09出土遺物実測図(V)(1:3)	84
第36図	E地点S D09出土遺物実測図(VI)(1:3)	85
第37図	E地点S D09出土遺物実測図(VII)(1:3)	86
第38図	E地点S D09出土遺物実測図(VIII)(1:3)	87
第39図	E地点S D09出土遺物実測図(IX)(1:3)	88
第40図	E地点S D09出土遺物実測図(X)(1:3)	89
第41図	E地点S D09出土遺物実測図(XI)(1:3)	90
第42図	E地点S D出土遺物実測図(Ⅻ)(1:3)	91
第43図	E地点S D09出土遺物実測図(XIII)(1:3)	92
第44図	E地点S D09出土遺物実測図(XIV)(1:3)	93
第45図	井原線出土石器実測図(1:2)	94

付図 遺跡周辺地形図(1:7,500)

I. はじめに

1. 調査に至る経過

国鉄井原線は、伯備線総社駅を起点とし岡山県矢掛町、井原市を經由して広島県深安郡神辺町の福塩線神辺駅に至る延長41kmの路線であり、昭和41年5月7日運輸大臣の認可をうけて日本鉄道建設公団大阪支社（以下公団）が工事に着手したものである。広島県分については県境より旧井笠鉄道神辺線（軽便鉄道）敷を昭和43年3月同線廃線と同時に公団が買収し、さらに同敷地の左右を若干追加買収する形で路線幅が構成され、構造は全線高架方式をとっている。

当該地の埋蔵文化財の取り扱いについては路線計画決定に伴い、昭和41年11月、公団から広島県知事に対し埋蔵文化財の有無について調査依頼が提出された。これに対して広島県教育委員会（以下県教委）は現地調査を実施し、当該地がほとんど旧井笠鉄道敷であるところから埋蔵文化財包蔵地は認められないとして昭和42年3月回答をおこなった。ところが、その後県内全域で開発事業がすすみ、この周辺地域でも新たに遺跡の発見が相続いたため再度見直しの必要が生じた。そこで県教委は昭和47年12月、広島県企画部を通じて公団と協議し、昭和48年2月再度建設予定地内の分布調査を実施した。その結果3ヶ所の遺物散布地を確認し、同年4月公団に対しこの旨を回答し合わせて遺跡の保存についての要望書を提出した。しかし同年12月、県教委と公団との協議において対象地域内遺跡の現状保存は困難で記録保存もやむをえないとの結論に達し、東法田遺跡及び、沖湯野遺跡の2ヶ所については小規模であることから昭和50年度に発掘調査を実施し、御領遺跡については広範囲にわたるため昭和51年度に試掘調査を行うこととした。昭和51年11月より同年12月にかけて上御領南礼場よりF御領八幡原にかけての1.8km区間の試掘調査が実施され、その結果5地点総延長1km、総面積約9000㎡にわたる広範な地域に遺構が広がっていることを確認したため昭和53年度にこの区間内の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は県教委が公団より委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターと協同で実施した。

現地調査は昭和53年1月より同年3月、昭和53年4月より昭和54年3月までおよそ

15ヶ月を要した。

2. 発掘調査及び報告書作成の体制

松崎寿和	広島県文化財保護審議会委員	広島大学名誉教授 (広島県埋蔵文化財調査センター常務理事)
村上正名	広島県文化財保護審議会委員	福山女子短期大学教授
潮見 浩	広島県文化財保護審議会委員	広島大学教授
川越哲志	広島大学助教授	
河瀬正利	広島大学助手	
西本省三	広島県教育委員会事務局管理部文化課長	(現県立大竹高等学校校長)
斉藤清三	◇	◇
遠藤泰充	◇	主幹(現総務課企画広報室長)
荒川敏彦	◇	◇ (故人)
金井亀喜	◇	専門員兼埋蔵文化財係長
是光吉基	◇	指導主事 (現県立大竹高等学校教諭)
小部 隆	◇	文化財保護主事
中田 昭	◇	指導主事 (現県立高陽高等学校教諭)
桧垣栄次	◇	◇ (現広島市教育委員会社会教育課主事)
三好晴弘	◇	◇ (現福山市立中央中学校教諭)
桑原隆博	◇	◇
植田千佳穂	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員	
鍛冶益生	◇	
深井潤一	◇	(退職)
調査補助員		
園尾 裕	現福山市立福山城博物館学芸員	

三枝健二	現財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員
伊藤 実	現広島県教育委員会事務局管理部文化課指導主事
丹羽 博	別府大学学生
塩賀幸史郎	◇
道上康仁	◇
亀井孝文	◇
佐藤昭則	◇

なお現地発掘調査の実施にあたっては、広島県草戸干軒町遺跡調査研究所の協力を得、神辺町教育委員会社会教育課主事佐藤昭嗣氏には多忙にもかかわらずいろいろと便宜を計っていただいた。また調査遂行にあたっては神辺町の多くの方々に参加していただき、発掘調査への御協力を得ることができた。ここに記して謝意を表したい。

3. 発掘調査の方法及び成果

今回発掘対象地区の調査を行うに際して、次の2点が問題となった。

- (1) 当該地は、旧井笠鉄道路線敷内がほとんどであり盛土部分である。このため調査実施にあたっては総延長約1kmにわたりこの多量の盛土の排土を行う必要があり、重機を使用して盛土を除去し鉄道付設以前の旧耕作土面を検出する作業を行わなくてはならなかった。
- (2) 本線は新幹線などの1級幹線とは異なり高架建設にあたって橋脚幅は非常に狭く調査対象幅はわずか10m前後のものであった。加えて調査区及び周辺は現在でも水田又は畑地として使用されている地区がほとんどで、調査期間中の周辺の水田耕作等を考慮し、さらに調査対象幅を狭めたため実際に調査できた幅は4～5m、広い箇所で7～8mを測る程度であった。このため調査幅内で完結する遺構は土城などごくわずかで、住居跡をはじめとする各種遺構も全体の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{2}{3}$ で調査が実施できる程度で、全体の遺構の様相・性格を把握することは極めて困難である。

以上のことを考慮し、発掘調査にあたっては建設予定地内に沿って10m間隔にグリットを設定し、2グリット20m間を1調査単位区として区間ごとに調査することを基本とした。1調査単位区域内から出る排土は作業の進行状況に応じて前後20m間に排

土し、1区間が終了すると次の区間の排土を終了区間に排土するという方法で調査を実施した。1 調査単位区間内の調査は各遺構面ごとに順次掘下げて遺構を検出し、また路線に沿って北東方向より南西方向にかけての連続土層断面図作成のため1 調査区間の調査終了時に調査区北側を幅約1m、深さ約1.5mの範囲で断割りし、必要に応じ南北方向の断割りを実施した。但し、F地点については試掘段階の成果及び周辺地勢等を考慮し、また作業効率を計るためトレンチ調査のみを実施した。

今回実施した調査地点及び成果は下記の通りである。

A地点 上御領南札場～御野小学校グランド南側約400m間（IU、HU、HV、GV、GW、FW区）

住居跡5、建物状遺構1、溝状遺構13、土塚15、土器溜り遺構5

B地点 下御領為金 約36m間（EX区）

住居跡1、溝状遺構2

C地点 下御領為金 約90m間（DY区）

溝状遺構15、土塚1

D地点 下御領上手樋 約90m間（BB区）

溝状遺構3、土塚1

E地点 下御領八幡原地区 約200m間（YD、XD、XE、WE区）

溝状遺構10、土器溜り遺構2

F地点 下御領八幡原地区 約60m間（WE、VF区）

検出遺構なし

なお、各遺構の詳細は第三章を参照されたい。

※注 区名については広島県草戸千軒町遺跡調査研究所が実施した御領遺跡第1次第2次発掘調査時に設定した区名に基づくものである。

Ⅱ. 位置と環境

神辺御領遺跡は、福山市街地より北方約10km、広島県深安郡神辺町に所在する。神辺平野は地形的には中位浸食平坦面である吉備高原面より一気に下った瀬戸内面上にあり、世羅郡に源を發し東流する芦田川と、神辺町北端部に源を發し西流する高屋川及び南流する小河川群とによる沖積作用によって形成された東西に長く広がった平野である。御領遺跡はその東端部、高屋川が神辺平野に流れ込む付根部にあたり、高屋川による沖積微高地上に位置する。神辺平野においては沖積微高地上や周辺低丘陵上に縄文時代から歴史時代にかけての数多くの遺跡が知られており、県内でも江ノ川、太田川、沼田川流域に匹敵する遺跡密集地として知られている。

当該地域における縄文時代の遺跡としては、後期後半の住居跡を検出した御領遺跡AA区⁽¹⁾をはじめ、中島丹花⁽²⁾、八幡原(DY区)⁽³⁾の各地点が知られ、湯野・大宮遺跡⁽⁴⁾からも出土している。また今回調査したC地点溝状遺構中の流入遺物にも晩期の土器片が含まれていた。このように縄文後・晩期の段階においてこの地域はすでに沖積地化が進行し、当時の人間の生活環境として適した状況にあったことが窺える。

稲作生産開始期の弥生時代前期に至ると道上・亀山遺跡、湯野・大宮遺跡が知られている。亀山遺跡⁽⁵⁾は標高38mの独立丘陵上に位置し、その南東斜面で多量の弥生前期から中期にかけての土器片・石器類が出土し、また丘陵上に新たに溝状遺構が確認された。大宮遺跡は山王山東側の水田から検出したもので、当時微高地状を呈していたものと思われる。本遺跡は環濠によって囲まれた集落であることが明らかとなっているが、現在までの調査においては環濠内には同時期の住居跡は検出していない。環濠中からは弥生前期から中期にかけての多量の土器・石器類を検出している。一方御領遺跡では神辺農協御野支所予定地内地点⁽⁷⁾(EW区)より少量の前期末葉の土器が出土している他、井原線内においても少量出土しており(DY区)、御領遺跡においても亀山・大宮両遺跡と同様の拠点集落が形成されていたものと推測される。

弥生中期になると各地域で遺跡が急増し、沖積地をはじめとし山間地域にまで進出するが、これは農業技術の進歩及びこれに関連する農業基盤の拡大に起因する母村・分村関係の表出として考えられよう。沖積地の遺跡としては御領遺跡のおなか⁽⁸⁾(FW



第1図 御領遺跡の位置と周辺遺跡 (1:25,000)

御領遺跡

井原織建設予定地 A~F), 1. 上下 2. おなか 3. 為金 4. 神辺農協御野支所 5. 中島丹花 6. 古屋敷 7. 上手樋 8. 淀水 9. 高瀬 10. 上御領中組古墳群 11. 八丈岩古墳群 12. 八丈岩遺跡 13. 上御領下組古墳群 14. 下御領古墳群 15. 法堂寺古墳群 16. 園分寺高山古墳群 17. 駒ヶ爪古墳群 18. 寒水寺古墳群 19. 泰山遺跡 20. 迫山古墳群 21. 藤森東古墳群 22. 藤森古墳群 23. 深水古墳群 24. 貝谷遺跡 25. 備後園分寺跡 26. 長者腰敷遺跡 27. 小山池庵寺跡 28. 大宮遺跡 29. 山王山古墳 30. 山王山遺跡 31. 沖湯野遺跡 32. 江草古墳群 33. 廻木古墳群 34. 観音寺古墳 35. 馬場遺跡 36. 足永古墳

区)、中島丹花、神辺農協御野支所(EW区)の各地点があげられ、湯野地区では大宮遺跡が継続して営まれ、道上地区においては亀山遺跡・中谷遺跡が知られている。一方山間地域においては中条地区をはじめとし上三谷の小猿遺跡にまで及んでいる。⁽⁹⁾

弥生後期においては更に遺跡の拡散化が認められ、御領遺跡だけでも中島丹花、古屋敷、神辺農協御野支所があげられ、湯野・大宮遺跡においても良好な一括土器が出土している。

古墳時代における遺跡の分布は前時代同様沖積地において継続的に集落が営まれる他、丘陵上においては古墳の築造が盛んとなる。現在までのところ当該地域において竪穴石室を有する前期古墳は確認されていないが、御領遺跡北側丘陵には横穴式石室を有する下御領古墳群・法童寺古墳群・国分寺裏山古墳群などがあり、また一方現高屋川を挟んだ南側の丘陵上には辺木古墳群・江草古墳群をはじめ当該地域では現在まで知られている唯一の前方後円墳足永古墳などがある。現在の神辺町付近は「倭名抄」によれば、律令体制下にあつては安那郡に属し6郷から成っていた。その多くは現在の神辺町付近に比定されており、後期古墳、特に終末期の古墳群との係わりが問題となろう。

一方奈良時代から平安時代にかけての古代寺院跡・古瓦出土地も数多く知られている。寺院跡としては備後国分寺跡、小山池廃寺、中谷廃寺などがあげられる。⁰¹ ⁰² ⁰³

以上のように御領地区及びその周辺地域は古代より政治・経済の中心的意味をもち発展してきた地域であり、また吉備の国との関連においても重要な役割を果たしてきた地域である。

(注)

- (1) 広島県教育委員会「神辺御領遺跡第1次発掘調査報告」1976
- (2) 神辺郷土史研究会「神辺町の歴史と文化」1974
- (3) 注1に同じ
- (4) 広島県教育委員会「大宮遺跡第1次・第2次・第3次発掘調査概報」1978, 1979, 1980
- (5) 松崎寿和・潮見浩「広島県亀山遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
- (6) 昭和55年神辺町教育委員会による試掘調査によって確認された。
- (7) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「神辺御領遺跡」1980

- (8) 神辺町郷土史研究会「弥生時代の神辺」『神辺町の歴史と文化』第3号 1975
- (9) 注8に同じ
- (10) 注8に同じ
- (11) 広島県教育委員会『備後園分寺第1～4次調査概報』1973～1976
- (12) 広島県教育委員会『小山池鹿寺発掘調査概報』第1次・第2次・第3次 1977, 1979
- (13) 神辺郷土史研究会「神辺の古代寺院跡」『神辺の歴史と文化』第7号 1980

Ⅲ. 調査の成果

1. A 地点

上御領南札場から御野小学校グラウンド南側に至る約 400m の間を A 地点と設定し、昭和53年 4 月より同年12月までの 9 ヶ月間発掘調査を実施した。A 地点東半部は旧高屋川河川敷に近接するため、旧耕作土を掘下げるとすぐにバラス層に達した。このため約 200m には何ら遺構を検出せず、弥生土器、土師器、中・近世の土器片等を散見するにすぎなかった。しかし御野小学校より約70m 東側の地点よりバラス層は次第に薄くなり、黄褐色粘質土の堆積が認められるようになって遺構を検出しはじめた。検出した遺構としては、御野小学校グラウンド南側より弥生時代中期中頃の住居跡群をはじめ溝状遺構・土坑、9 世紀代の建物状遺構・土器溜り・土坑、中世の土坑などがあり、ほぼ同じレベルの床土直下より検出している。

以下、遺構・遺物の概略を述べる。

S K 01 (図版 2)

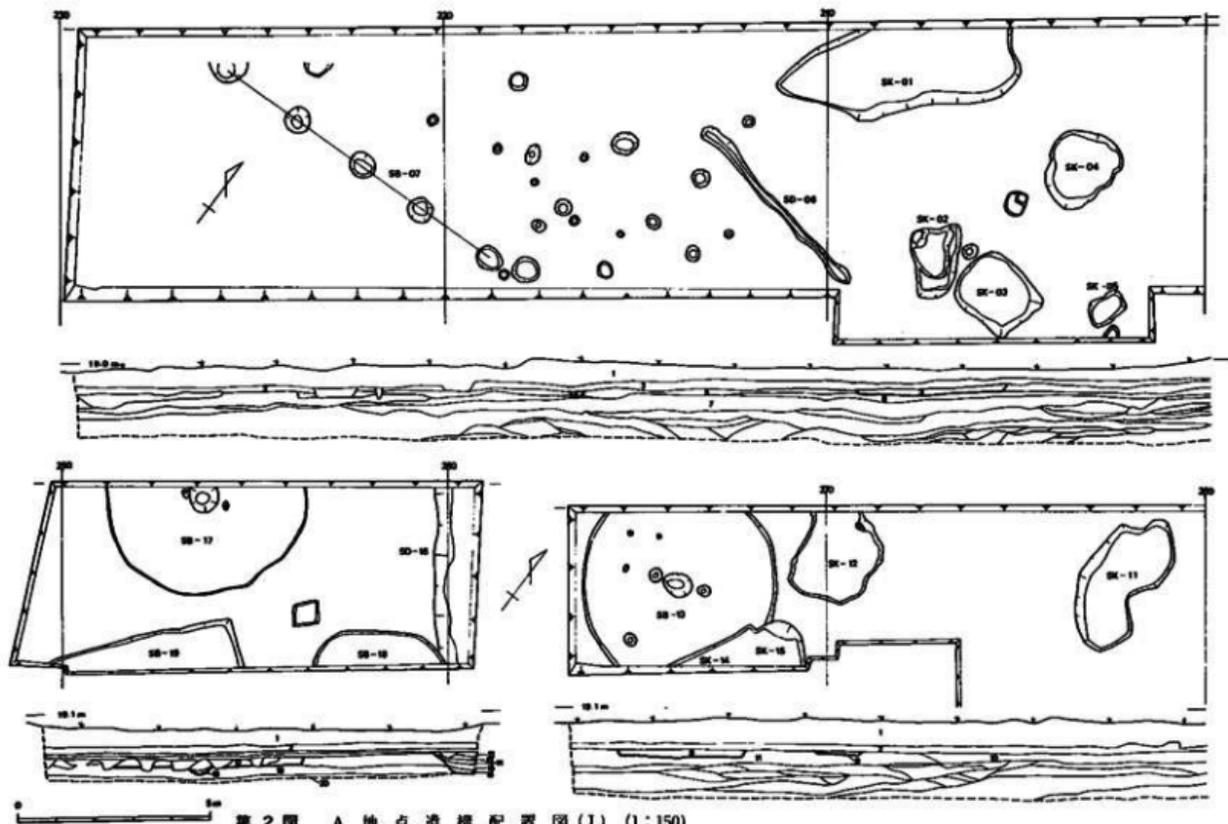
A 地点 O 原点より約 210m 付近で検出した土坑で、近接して S K 02 より S K 05 までの 5 基の土坑がある。本土坑は北側が調査区外にあたるため全体の規模は不明であるが、確認できた範囲では 6.3×2.3m、深さ 20cm を測る不整形プランを呈する。底面は平坦で茶褐色砂質土・暗黄褐色砂質土が充満していた。性格は明らかでないが、出土した高台付坏身・土師質土器の坏身等より 8 世紀代のものと考えられる。

S K 02 (第 5 図 1, 図版 3)

S K 01 より南西約 3m、S K 03 の西側に近接する土坑で、北辺 1.3m、南辺 1.7m、長辺 1.7m、深さ 35cm を測り台形状プランを呈する。東・南側は 2 段掘りし、底面はやや中央が凹み暗黄褐色粘質土・暗褐色粘質土が充満していた。性格は不明であるが、黒色土器の塊が出土しており遺物より 8 世紀代のものと考えられる。

S K 03 (第 5 図 2, 図版 3・4)

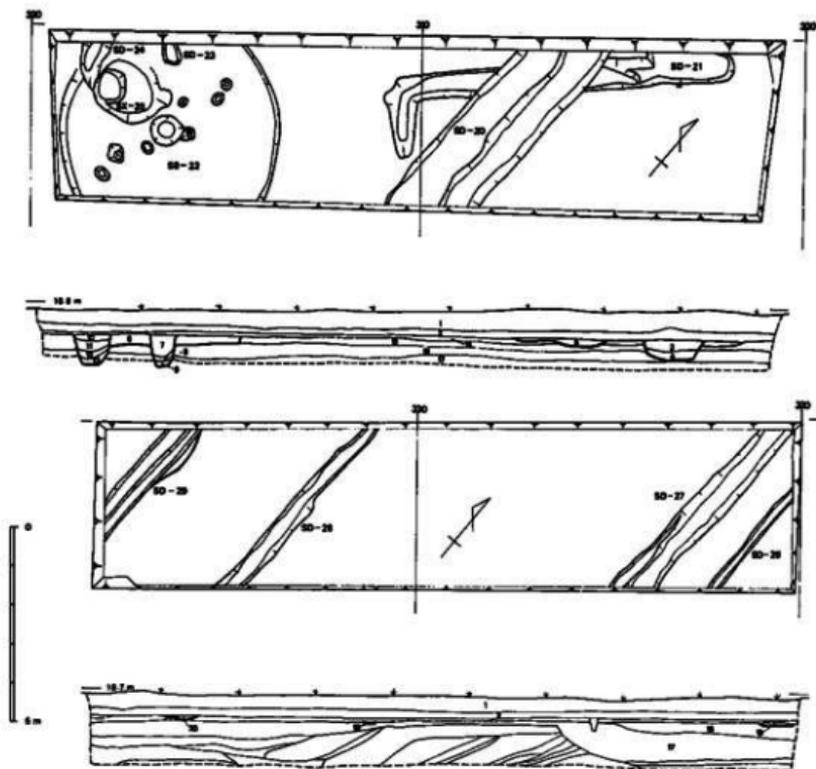
S K 02 の東辺に接して検出した土坑で、2×1.6m、深さ 25cm を測るほぼ長方形のプランを呈す。底面はほぼ平坦で暗褐色粘質土・暗褐色砂礫土が充満する。土坑中には



第2圖 A 地点遺構配置圖(I) (1:150)

土層說明

1. 底土 2. 田耕作土・塚土 3-5-12-14-15-17. 暗黃褐色粘質土 4-8-16-18. 暗褐色粘質土
6. 明褐色砂質土 7. 暗褐色砂礫 9-10-11-13-19. 黃褐色粘質土 20. 淡黃褐色粘質土



第3図 A地点遺構配置図(Ⅱ) (1:150)

土層説明

1. 盛土 2. 旧耕作土・塚土 3-10-16-17-19-20. 黄褐色粘質土 4. 茶褐色粘質土 5. 灰褐色粘質土
6-7-11-15. 暗黄褐色粘質土 8-9-13-14. 暗褐色粘質土 12. 暗黒褐色粘質土 18. 灰褐色粘質土

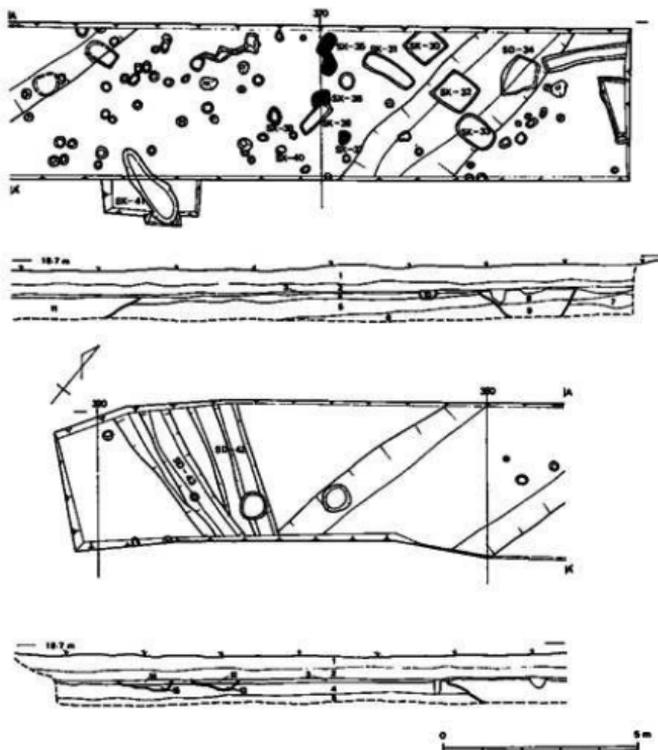
大小の礫が混入し、また中国明代の青磁の碗、土師質土器の皿等も出土している。

SK04 (第5図3, 図版4)

SK01の東約2m離れて検出した土塚で、2.1×1.7m、深さ15cmを測る不整形のプランを呈する。底面はほぼ平坦で暗黄褐色土が充満していた。土塚中より大小の礫とともに、小片の土師質土器が出土した。

SK05 (第5図5, 図版5)

SK03の東側1.3mで検出した1.0×0.6m、深さ20cmを測る長方形プランを呈する



第4図 A地点遺構配置図(Ⅱ) (1:150)

土層説明

1. 盛土 2. 旧耕作土・床土 3-4-8. 茶褐色砂質土 5-7-9. 暗茶褐色砂質土 6. 暗褐色砂礫
10. 黄褐色砂質土 11. 暗褐色砂礫 12. 暗紫褐色砂質土 13-15. 黒褐色砂質土 14. 暗紫褐色砂質土

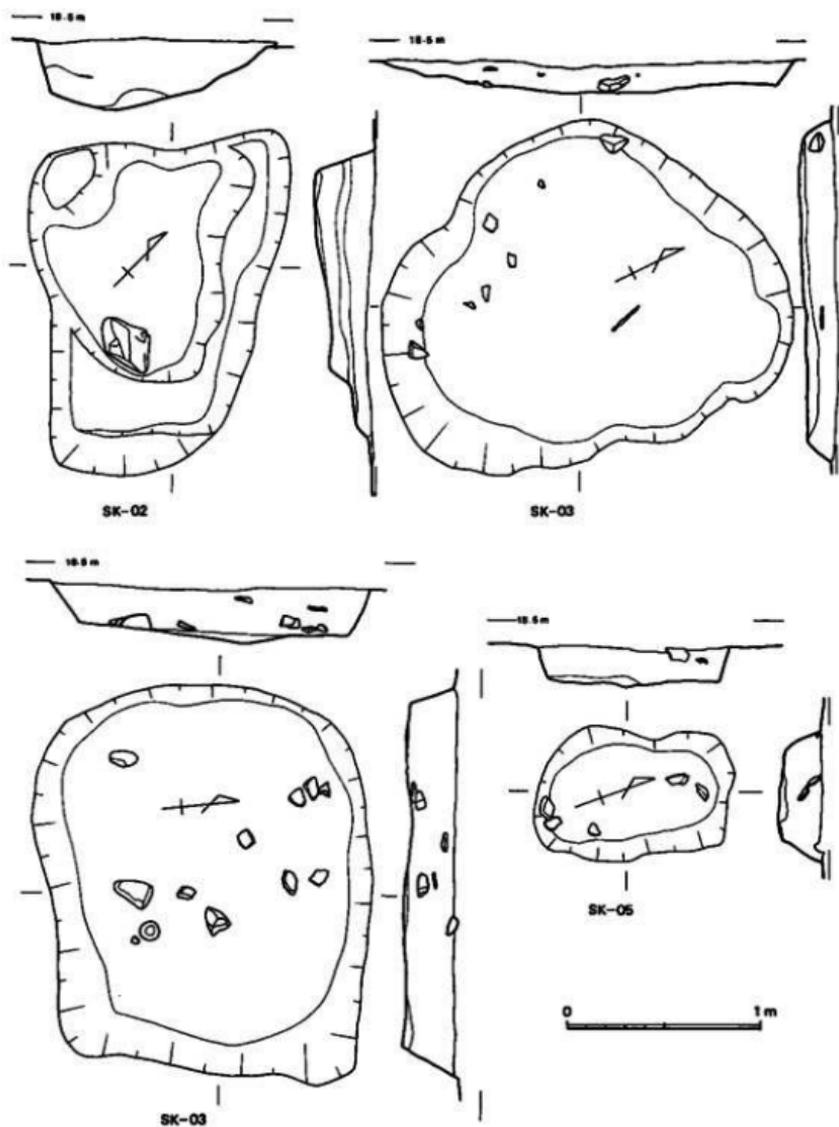
土塚である。底面はほぼ平坦で暗黄褐色土が充満していた。遺構中からは7世紀代と考えられる須恵器，土師質土器がわずかに出土した。

S D06 (図版5)

A地点O原点より210m付近で検出した幅20cm，長さ5.5m，深さ10cmの溝状遺構で断面逆台形を呈し，底面はほぼ平坦で暗褐色土が充満する。

S B07 (図版6)

O原点より220m付近で検出した建物状の遺構で，N3°S方向に4間分の柱穴を検出した。柱間の寸法は平均2.09mを測る。柱穴の大きさは60~70cm，深さ15~20cmを



第5圖 A地点SK 02~05實測圖(1:30)

測る。東西方向の柱穴しか明瞭ではなく、全体の規模は不明である。東端の柱穴内のほぼ中央からは上面平坦な石を柱穴のほぼ中央に検出した。出土遺物は須恵器の盤があり9世紀代と考えられる。

SK11 (図版6)

O原点より260m付近で検出した長さ3.7m、幅1.6m、深さ20cmを測る不整形なプランをもつ土坑である。底面はほぼ平坦で、坑中には暗黄褐色土が充満していた。

SK12 (図版7)

270m付近で検出した不整形なプランをもつ土坑であるが、北側は調査区外に続くため全体の規模を明らかにすることはできなかった。確認できた範囲では、長さ2.4m、幅1.9m、深さ15cmを測り、底面中央がわずかに凹む。土坑確認面においては全体的に厚さ3cm内外の木炭粒を含んだ焼土の広がり認められ、その下に暗褐色土が充満していた。東側隅において、底面より若干浮いた状態で弥生中期後葉の甕が1個体分出したほか、小片の弥生土器が出土している。

SB13 (図版8)

SK12の西側で近接して検出した直径5.2mを測る円形プランの住居跡である。北側及び南側は調査区外にあり、また南側はSK14・15によって切られている。本住居跡は後世の削平を受けたものと考えられ、側壁の残高はわずか6~7cmを測るのみである。床面はほぼ水平で、側壁周辺には周溝などの施設は認められない。住居跡中央から長径80cm、短径60cm、深さ20cmを測る楕円形プランのピットを検出し、ピット中には木炭粒を多含した褐色土の堆積が認められたほか、土製紡錘車などの土器片の混入を認めた。この中央ピットに近接して西側に直径30~40cm、床面よりの深さ15cmを測る円形のピットを検出した。この2つのピットは柱穴と考えられ、本住居跡が2本柱の家屋構造をもつものと考えられる。またこの他にも小ピット3、直径30cmを測るピット1を検出しているが本住居跡との関連は不明である。遺物は中央ピットのほか住居跡東側にかけて比較的多く見られたがいずれも小片である。弥生時代中期中葉頃のものと考えられる。また石鏃1が出土している。

出土遺物(第20図3~8.)としては、口縁部がL字状に折れる甕、高坏は坏部の浅いものと端部が立ち上る脚端部がある。また土器片転用の紡錘車もみられる。

SK14・15 (図版8)

S B 13の東側隅を切る2つの土坑で、S K 15がS K 14を切っている。S K 14は北西側の掘り方がほぼ直線的で北西隅でコーナーをもっており本来は方形プランをもつものと考えられるが、全体の規模については不明である。底面はほぼ水平で黄褐色砂質土が充満している。S K 15は不整形なプランをもつ土坑で規模は不明である。底面はほぼ平坦で黄褐色粘質土の堆積が認められる。出土遺物はS K 14から、弥生時代中期末～後期中葉頃にかけての土器が出土した。また石鏃1が出土している。

出土遺物(第20図9～12.)には、ヘラ描き多条沈線を有する長頸壺、く字状に折れ内上方に立ち上る甕口縁部、端部が立ち上る高杯脚端部がある。

S D 16 (図版9)

A地点O原点より280m付近で検出した溝状遺構で、東側半分は農道下にあたるため全体の形状・規模は不明である。本溝状遺構は調査区の南北方向にのびる。底面はほぼ平坦で、溝中には木炭粒・焼土粒を含んだ暗褐色粘質土、暗黄褐色粘質土が互層に堆積し水が流れた痕跡は認められなかった。

出土遺物(図版40-1～5)には、弥生土器の甕で口縁部がゆるやかに外反するものとL字状に折れるものがある。また土器片転用の紡錘車もある。

S B 17 (図版9)

S D 16より西側約7mで検出した直径5.2mを測る円形プランの住居跡である。側壁は残高数cmを測るのみである。北半は調査区外にあたるため全容を明らかにすることはできなかった。しかし中央及びその両側に柱穴らしいピットを検出しており、2本柱の住居跡と考えられる。床面はほぼ水平で、中央ピットより東側2m、南側1.5m、西側1mの範囲で焼土面が確認された。中央ピットは径80cm、深さ20cmを測り木炭粒を含んだ暗褐色粘質土が充満しており、柱穴は中央ピットより約15cm離れた西側に径10cm、床面よりの深さ10cmを測るものである。遺物は少量で弥生時代中期前葉頃の甕等が出土している。

S B 18 (図版10)

S D 16の西側に近接し円形プランをもつ住居跡状遺構で、 $\frac{2}{3}$ 以上が調査区外にあるため全容を明確にすることはできなかった。充満土は暗褐色粘質土で床面は東側に向けてやや傾斜し下っている。遺物は細片の弥生土器が出土している。

S B19

S B17の南側に近接する方形のプランを呈すると考えられる住居跡状遺構であるがほとんどが調査区外にかかるため全体の規模を明らかにすることはできなかった。側壁は約20cmほど残存しておりS B17・18に比して遺存の状態はよい。床面はほぼ水平で暗褐色粘質土が充満していた。遺物は少量の弥生時代中期後葉の高坏等が出土している。

S D20 (図版10)

O原点より約310m付近で検出した溝状遺構で、ほぼ磁北方向を指向する、幅2m、深さ9~17cmを測り、西側部分はテラス面をもち2段掘りとなっている。溝底面は浅く凹んだ状態をなしほぼ水平で、灰褐色粘質土が充満していた。埋土中より平瓦1が出土した。

S D21 (図版11)

S D20の下面で検出した南西より北東にのびる溝状遺構で、南西側でL字状に南東に屈曲し短くのびて終っている。北東側においてもL字状に屈曲して北西にのびる。幅70cm、深さ35~50cmを測り断面U字形を呈し底面レベルはほぼ同一である。溝中の埋土は黄褐色粘質土下に木炭粒を含む茶褐色粘質土が堆積する。溝中下層より一括して弥生時代中期末の高坏・甕等が出土している。また石鏃3、石匙1も出土している。

出土遺物(第21・22図、図版41・42)の甕は、弥生土器の甕で口縁部を内上方に立ち上らせ凹線を有するものがほとんどであるが、わずかに立ち上るものもある。胴内面は刷毛目とヘラ磨きとがあり、ヘラ削りが上半まで達するものもある。高坏は坏部がラッパ状に開くもの、端部が肥厚するもの、内湾するものがある。

S B22 (図版13)

S D21の西側3m、O原点より約320m付近で検出した直径5.8mの円形プランの住居跡であるが、南側・北側は調査区外にあり全容を明らかにすることはできなかった。また本住居跡の北西側はS D23・24、S K25によって切られている。側壁の残存状態は良好で約15cmを測る。床面はほぼ水平で暗黄褐色粘質土が充満していた。床面中央では直径80cm、深さ20cmを測る中央ピットを検出し、中央ピットより約1mの間隔において柱穴と考えられる直径15cm、床面よりの深さ25cmを測る2つのピットを確認した。本住居跡についてもS B13・17同様、2本柱の家屋構造をもつ円形住居跡と考え

られる。本住居跡覆土中より土器は出土していないが、本住居跡を切るSD23・SK25より弥生中期前葉～中葉にかけての土器が出土しており、これらの遺構とそれほど定期的に隔たらないと思われる。なお石鏃1、大型蛤刃石斧2が出土している。

SD23

調査区南北断割りによって検出したもので、調査区内にはわずかにのびるだけで終わっている。土層断面の観察では幅70cm、深さ80cmを測り、SB22を切り、溝中には暗黄褐色粘質土、暗褐色粘質土が充満していた。溝中最下層より弥生土器が少量出土し、中期前半のものと考えられる。

出土遺物（第23図1～3、図版43-1～3）は、甕で貼り付けにより口縁部をつくっているものとゆるやかに外反するものがある。また土器片転用の紡錘車も出土している。

SD24

SD23同様に調査区断割り断面にわずかに検出した溝状遺構で、断面観察では幅1m、深さ80cmを測り断面U字形を呈する。本溝状遺構はSB22を切って掘られており溝中には黄褐色粘質土など4層の粘質土が充満しており、水が流れた形跡はない。遺物は少量の弥生土器・土器片転用の紡錘車が出土し、中期中葉頃のものと考えられる。

SK25（図版13）

SB22の北西側を掘り込んでつくられた直径4m、深さ50cmを測る円形プランを呈する土城である。北東側はテラス部をもち2段掘りされており、底面はほぼ平坦となり暗黄褐色粘質土が充満していた。本土城の性格は不明であるが、北東テラス部及び底面より一括の弥生土器が出土しており中期中葉頃のものと考えられる。

出土遺物（第23図6～13、図版43-6～12）には甕で口縁部がゆるやかに外反するものとく字状に折れるものがある。壺は直線的に口縁が開き凸帯を有するものである。

SD26（図版14）

O原点より320m離れた付近で検出した溝状遺構で、調査区内を磁北方向へ走る。幅25cm、深さ2～5cmを測るだけの浅い溝状遺構で、溝中には旧耕作土と考えられる灰褐色粘質土が充満していた。

SD27（図版14）

S D26の約1m西側で検出した溝状遺構で、S D26とほぼ平行して走向する。幅80cm、深さ15cmを測る浅いもので溝中には灰褐色粘質土が充満していた。

S D28 (図版14)

O原点より330m付近で検出した溝状遺構で、S D26・27同様磁北方向に走る。幅40~50cm、深さ5cmの浅いもので溝中には黄褐色粘質土が充満していた。

S D29 (図版15)

S D28の西側3.7m付近で検出した溝状遺構で、S D28と平行して走る。幅75cm、深さ8cmを測るだけの浅いもので西側部分はテラス面をもつ。

S K30 (図版16)

O原点より365m付近で検出した1辺80cm、深さ17cmを測る方形プランの土塚である。底面はほぼ平坦で茶褐色土、赤褐色土が充満し、底面南東隅に厚さ3~5cmの焼土と炭の混入が認められた。土塚中より弥生土器が1点出土した。

S K31 (図版17)

S K30の南側50cmほど離れた付近で検出した土塚で、長さ1.4m、幅42cm、深さ8cmを測り、長方形のプランをもち長軸をほぼ東西方向に指向する。底面はほぼ平坦で土塚中には暗褐色土が充満していた。

S K32 (図版17)

S K30の東側1m付近で検出した幅90×82cm、深さ16cmを測るほぼ方形のプランをもつ土塚で、長辺をほぼ南北方向にとる。土塚底面はほぼ水平で、土塚中には少量の炭を含む淡茶褐色土が充満していた。

S K33 (図版18)

S K32の東側に近接して検出した長さ1m、幅67cm、深さ30cmを測る長方形に近いプランをもつ土塚で、長軸をほぼ東西方向にとる。土塚底面はほぼ水平で土塚中には灰褐色土が充満していた。

S D34 (図版18)

S K32・33より下の遺構面で検出した上面幅2.2m、底面幅1m、深さ70cmを測る溝状遺構で断面U字形を呈する。本溝状遺構は調査区をほぼ南北方向に走向し、底面レベルはほぼ同一で水平である。溝中には暗黄褐色粘質土が充満し下層では礫を多く含む状態を示す。埋土中より少量の弥生時代中葉頃の土器片が出土している。

出土遺物（図版44—2～4）の壺は口縁部へ直線的に開き凸帯を有するものと外反し端部が垂下するものがある。また土器片転用の紡錘車も出土している。

S X 35（第6図，図版19）

連続した2つのピット中に遺物が混入した状態を示す土器溜り遺構である。北側のピットは長径55cm，短径40cm，深さ30cmを測る楕円形状プランを呈し断面円筒状をなす。底面は平坦でピット中には暗褐色土が充満していた。検出した遺物のほとんどは遺構確認面又はその直下からの出土である。南側のピットは長辺40cm，短辺35cm，深さ25cmを測る台形状に近いプランをもつもので断面逆台形を呈する。底面は平坦で暗褐色土が充満していた。少量の土師質土器・須恵器がピットに落ち込んだ状態で出土している。

出土遺物（図版44—5～12）の土師質土器には口縁部がゆるやかに字状に折れるた甕，平底であるがやや丸味をもつ皿があり，須恵器は坏身で高台のつくものである。8世紀後半から9世紀代にかけてのものである。

S X 36（第6図，図版19）

S X 35の南東側30cm付近で検出した土器溜り遺構で，S K 38と切り合っている。直径55cm，深さ10cmを測る円形プランを呈するもので底面はほぼ平坦である。ピット中には暗褐色土が充満していた。遺物は主に遺構確認面直下より出土しており，土師質土器の坏を中心に土師質の甕形土器が口縁部を下にした状態で出土した。この甕形土器は体部上半より口縁部にかけてのみ残っており，本来完形であったものが後の耕作時に削平を受け欠損したものと考えられる。遺構の性格についてはなお不明であるが蔵骨器の可能性も考えられる。なお出土遺物より9世紀代のものと考えられる。

S X 37（第6図）

S K 38の東側50cm付近で検出した遺構で，掘り方3.8×3.3m，深さ9cmを測る不整形なプランを呈し，底面は中央部がやや凹み暗褐色土が充満していた。遺物は遺構確認面直下の中央よりやや北側に偏して出土した。出土状態は土師質の杯を下にし，これに蓋をするように須恵器盤が被されていた。本遺構の性格は不明確であるが，S X 36と同様に蔵骨器の可能性もある。なお遺物より9世紀代の遺構と考えられる。

S K 38（図版20）

S X 36と切り合う土竈で長さ96cm，幅35cm，深さ12cmを測り，長方形プランを呈し

長軸はほぼ南北方向を指向する。底面はほぼ平坦で土壌中には暗褐色土が充満し、底面より若干浮いた状態で土師質土器片が出土した。

S X 39 (図版20)

S X 38の南東側1m 離れて検出した土器溜りの遺構である。遺構確認面はわずかに凹んだ状態を示し、この凹みに4 個体分の土師質土器の坏が並んだ状態で出土した。本来何らかの遺構に伴っていたものが後世の削平によって失われたものと思われる。出土遺物より9 世紀代のものと考えられる。

S X 40 (図版21)

本遺構は弥生土器が遺構確認面で重なり合って出土した土器溜り状のもので、本来何らかの遺構に伴っていたものが後世の削平を受けて失われたものと考えられる。遺物は弥生時代中期中葉頃の口縁内面に凸帯を有する壺、高坏等が出土している。

S K 41 (図版22)

A 地点O 原点より 375m 付近の調査区南側で検出した長さ2.3m、幅65cm、深さ40cm を測る不整形な土塚で、底面は西側がやや高まっており中央より東側はほぼ平坦である。土塚中には暗黄褐色粘質土、暗褐色粘質土が互層となって充満しており、最上層においては木炭粒及び焼土粒を多含する。本土塚中の東側及び西側に比較的集中して底面より浮いた状態で遺物が出土している。遺物は弥生時代中期後葉頃のものと考えられ、土塚墓の可能性も考えられる。

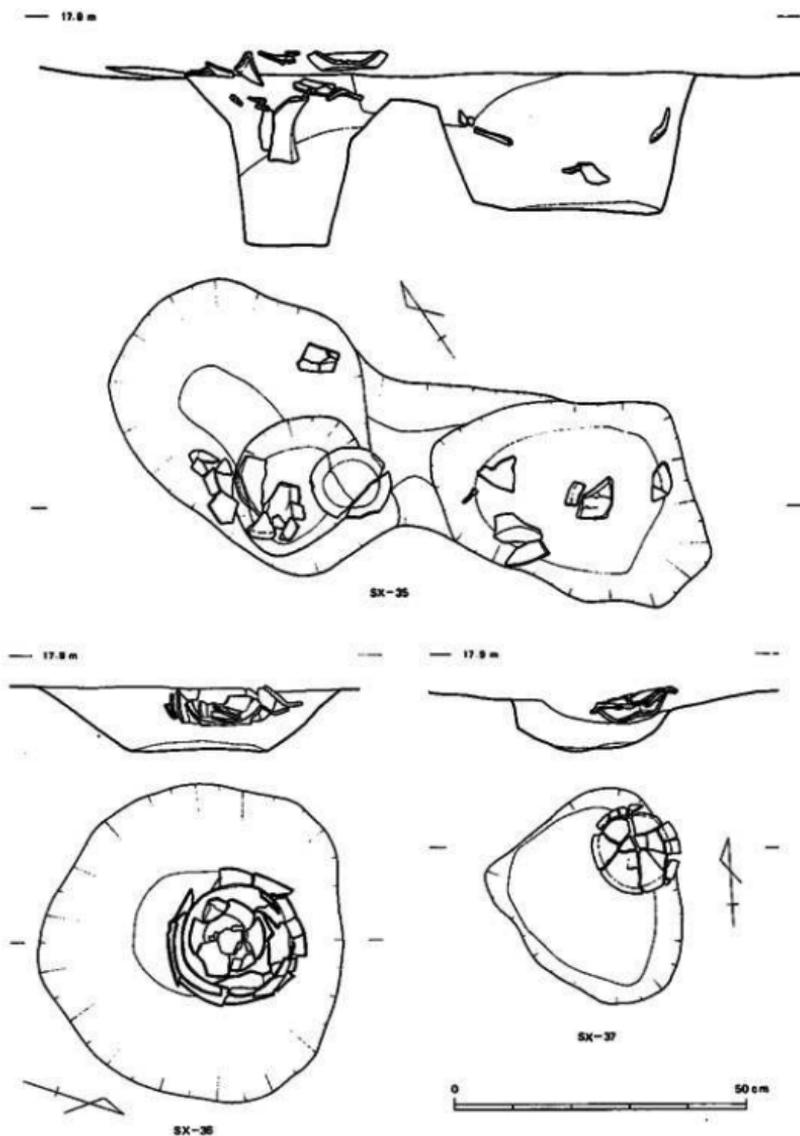
出土遺物(第24図、4~10、図版45-4~6、9)の高坏は坏部の口縁部が内湾するもの、脚柱部はラッパ状に開くもの、無頸壺は凹線を有し棒状浮文を配すもの、甕は口縁端部が上方に肥厚するものなどである。土師質土器は断面三角形の高台のつく杯である。

S D 42

A 地点調査区最西端で検出した北西方向に流走する溝状遺構で、S D 43によって南西隅の一部が切られている。幅1.1m、深さ23cmを測り、北西側はテラス状となり2段掘りされている。溝底面は平坦でほぼ同じレベルを測り、溝中には木炭粒を含む黒褐色粘質土が充満していた。出土遺物は $\frac{2}{3}$ 以上を欠損した磨製の石庖丁1点がある。

S D 43

S D 42の西側に近接して検出した北西方向に流走する溝状遺構で、幅98cm、深さ17



第6圖 A地点SK35·36·37実測図(1:10)

cmを測る。遺構の北西側はテラス状となり2段掘りされている。溝底面はほぼ同レベルを測り、溝中には暗紫褐色砂質土・黒褐色砂質土が充満していた。溝中より小片の土器片が出土した。

小 結

A地点約400m間のうち東側半分の200mからは何ら遺構は検出できず旧耕作土直下にバラス層が広がる状況を示した。このことは旧高屋川が近接するためこの間が氾濫原に近い状態であったと考えられる。しかし御野小学校グラウンド南側の調査区間においてはバラス層は認められず黄褐色粘質土の堆積が認められた。この間200mには弥生時代中期より中世に至る遺構群を検出し、すでに弥生時代中期にはこの付近の沖積微高地化が進行し当時の人間の生活環境に適した状況にあったと考えられ、その後安定した地勢であったと思われる。しかし当調査区間は幅4～5mと極めて狭く、また後世の水田耕作のため遺構上面が削平を受け検出した遺構の遺存状態は決して良好とは言えずまた一部ないし殆どしか調査できなかったため、遺構の時期・性格・機能について十分明らかにしえたとは言えない。

検出した遺構のうちS B 13・17・22は弥生時代中期前葉～中葉頃にかけての住居跡で2本柱の円形プランを呈する。これは当時2本柱の家屋構造をもつ住居跡が一般的であったものと考えられ、ひとつの時期設定の指標となろう。また現地の状況等を考えると調査区北側に同時期の住居跡群が広がっていた可能性も考えられる。S B 22の東側で検出したS D 21は弥生時代中期後葉のものであるが検出の状況・土器の一括出土の状態から何らかの意味をもつものと考えられる。また8世紀後半～9世紀代と考えられるS X 35・36・39・40の土器溜り遺構は後世の削平を受け本来の状況は明確ではないが、検出の状態などから埋葬施設又は祭祀遺構の可能性が考えられ、近接して検出したS K 30・31・32・38等は遺物が出土していないため不明確であるがS X 35・36・39・40に関連する埋葬施設の可能性も考えられよう。

2. B 地点

B地点はA地点の南西方約100m, 下御領為金の約36m間である。この地点は昭和52年度に草戸千軒町遺跡調査研究所が御領遺跡第2次調査として発掘を行った地点のすぐ南側にあたる。昭和52年度の調査においてはB地点に近接する1・2区では遺構は全く検出せず、最下層に砂利層の堆積が認められ旧河川跡と推定されていた。今回の調査においてはこの砂利層は1区南西方向に連続する様相が認められ旧河川が南西方向に流走していたものと考えられる。この砂利層はB地点O原点より約5m付近で消失し代って黄褐色粘質土層となり安定した土層状況を示し、この基盤土の黄褐色粘質土を掘り込んだ状態で住居跡1、溝状遺構2を検出した。以下概略を述べる。

SB01 (第7図, 図版22)

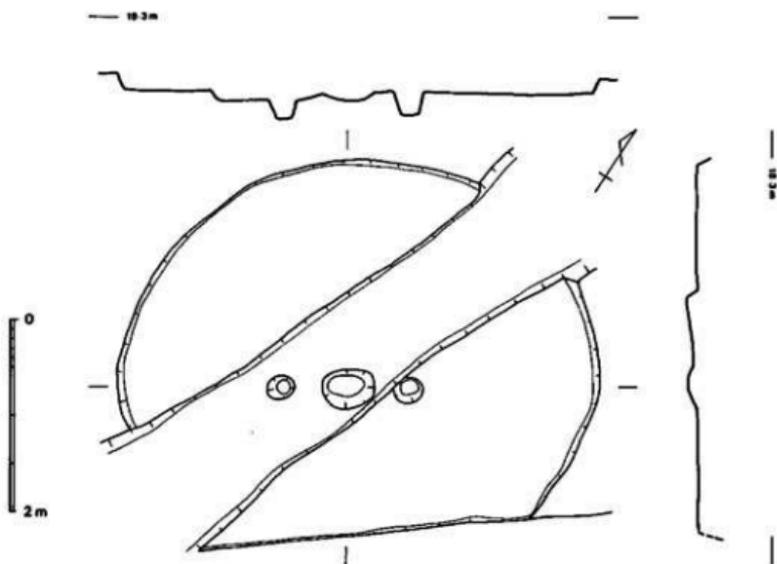
調査区のほぼ中央付近で検出した直径5mの円形プランを呈する住居跡であり、北方に流走するSD02のために住居跡の中央部が切られている。このため住居跡中央で検出した中央ピット及び柱穴の遺存の状態は非常に悪く、中央ピットは長径54cm, 短径43cm, 深さ4cmを測り、わずかに凹んだ状態で検出した。また柱穴と考えられるピットは20~25cmほど中央ピットより離れて西側で検出したが、これらも遺存の状態は悪く、直径14cm, 確認面よりの深さ9~11cmを測るのみであった。また後世の削平を受けたものと思われ壁の残高は10cm程度である。住居跡の床面はほぼ水平で暗褐色粘質土・暗黄褐色粘質土が充填していた。遺物は挟入扁平片刃石斧1, 石錐1, 不整形石器3の石器類だけで土器は出土しておらず時期は明確にはできないが、本住居跡のプラン、2本柱の家屋構造等を考えるとA地点で検出した住居跡等と時期的にさほど隔たりはないものと思われる。

SD02 (図版23)

SB01を切って掘り込まれた溝状遺構で、幅1.5m, 深さ20cmを測り北側に向けて流走する。溝中央部はやや高まり、2本の溝が平行して流走する状況を示す。溝底面レベルはほぼ同一で、溝中には暗褐色粘質土、灰褐色砂の堆積が認められた。遺物は古式土師器が出土しており、本溝状遺構は古墳時代前期のものと考えられる。

SD03 (図版23)

SB01の東側に近接して検出した幅1.1m, 深さ48cmを測る溝状遺構で、北方に流走



第7図 B地点SB01実測図(1:60)

し調査区北側でSD02によって切られている。断面U字形を呈し底面レベルはほぼ同一で溝中最下層及び中層に砂の堆積が認められる。

小 結

当調査区間で検出した遺構は、住居跡1、溝状遺構2であった。住居跡からは土器は全く出土していないが、その家屋構造の特徴からA地点で検出した住居跡とほぼ同時期の弥生時代中期と思われる。SD03はSD02によって切られており古墳時代以前のものと考えられる。同遺構中には砂の堆積が認められ、ある程度の流水があったと考えられ、また比較的深いことなどから用水路の可能性も考えられる。

3. C 地点

C地点はB地点の南西方約70m, 下御領為金の約90m 間であり, 昭和53年1月より3月まで約3ヶ月を要して調査を行った。本調査区内の土層堆積状況は比較的安定しており, C地点O原点より約60m 付近で砂礫層, 砂層の堆積を認めるがそれ以外では断割りトレンチの底面まで粘質土が堆積していた。検出した遺構は溝状遺構15, 土坑1で大部分が床土直下より掘り込まれていた。以下その概略を述べる。

SD01 (図版24)

C地点調査区最東端で検出した幅40cm, 深さ20cmを測る溝状遺構で, ほぼ磁北方向に流走する。溝底断面は浅いU字形を呈し, 底面レベルは北側がやや低くなっており溝中には灰褐色粘質土が充満していた。溝の両肩付近では大小のピットを検出し, 槽列状を呈する。遺物は須恵器, 土師器, 瓦片などが出土している。

SD02 (図版24)

SD01より下の遺構面で検出した北側に流走する溝状遺構で, 幅87cm, 深さ27cmを測り断面U字形を呈する。溝底面レベルは北側がやや低く溝中には暗褐色粘質土が充満していた。遺物は細片の弥生土器等が出土しているが, 後世の流入品と考えられる。

SD03 (図版25)

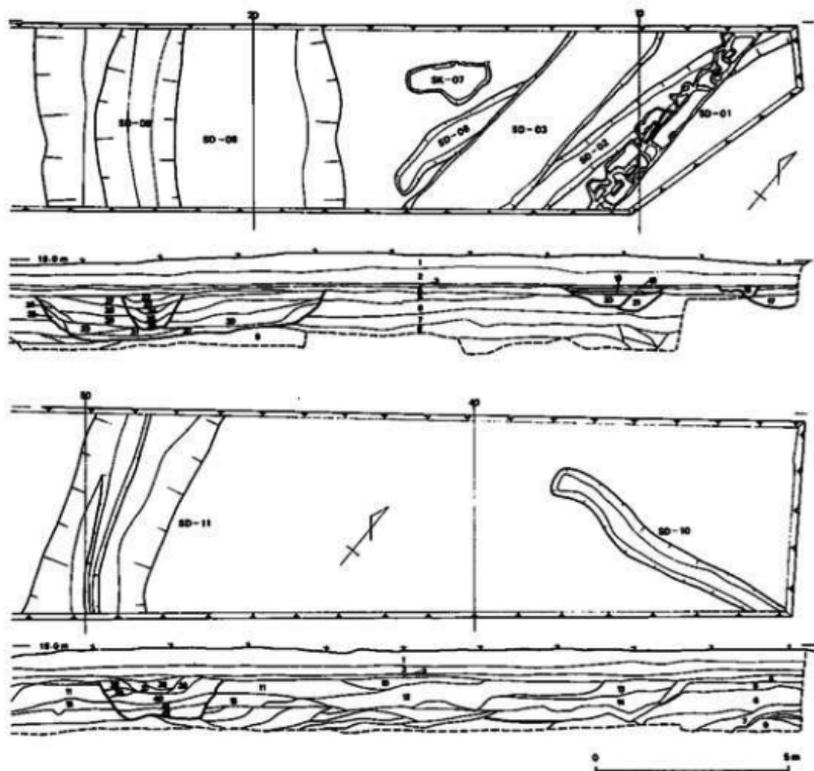
SD01の西側1.5m 付近で検出した幅1.9m, 深さ18cmを測る溝状遺構で, SD01とほぼ同一の遺構面で確認した。本溝はほぼSD01と平行して北方に流走する。溝底面レベルはほぼ同一で溝中には灰褐色砂質土が充満していた。遺物は少量の須恵器が出土している。

SD04 (図版25)

SD03より下の遺構面で検出した溝状遺構で, 幅65cm, 深さ18cmを測る。本溝はほぼ同一面で検出したSD05を切っており南北方向に流走し調査区のほぼ中央で終わっている。溝底面レベルはほぼ同一で溝中には暗褐色粘質土が充満していた。溝中からは遺物は全く出土していない。

SD05 (図版25)

SD04の西側で検出した幅1.2m, 深さ13cmを測る溝状遺構で, 東側半分はSD04によって切られている。本溝は調査区を南北方向に流走する。溝底面レベルはやや北側



第8図 C地点遺構配置図(I) (1:150)

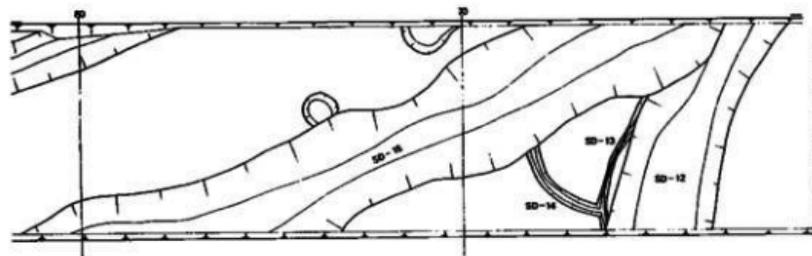
土層説明

1. 盛土 2. 旧耕作土・床土 3. 褐色粘質土 4. 黄褐色粘質土 5. 淡褐色砂質土 6-7-8-10-12-13-14. 褐色砂質土
 9. 暗褐色砂 11. 暗灰色砂 15. 茶褐色砂質土 16-24-25. 灰褐色粘質土 17-20-21-27-28. 暗褐色粘質土 18-19-22-23-33.
 灰褐色砂質土 26. 褐色粘質土 29-30. 淡茶褐色砂質土 31. 暗灰色砂 32. 黒褐色砂礫 34. 淡褐色砂質土 35. 暗褐色
 砂質土 36. 淡茶褐色砂質土 37. 淡茶褐色砂礫 38-39. 暗茶褐色砂質土 40. 暗褐色砂質土 41. 暗黄褐色砂 42. 灰褐色砂

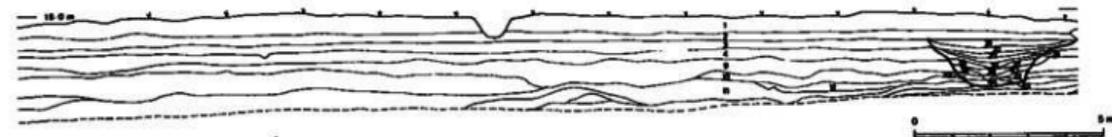
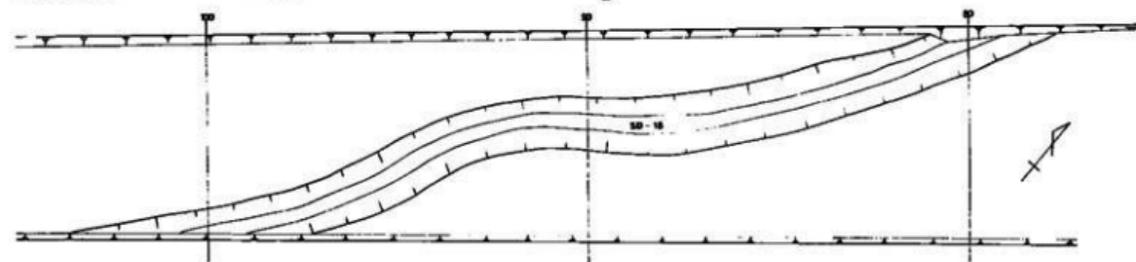
が低くなっており、溝中には暗褐色粘質土が充満していた。溝中からは細片の弥生土器が出土している。

SD06 (図版25)

SD05の西側に近接し調査区北側では一部SD05を切った状態で検出した溝状遺構で、幅55cm、深さ12cmを測る。本溝は調査区をほぼ南北方向に流走し調査区南隅で終っている。溝底面のレベルはほぼ同一で溝中には暗褐色粘質土が充満していた。溝中か



1. 藍土 2. 田耕作土·塚土 3-4-9-10. 黃褐色粘質土 5. 黃褐色砂質土 6. 暗褐色砂礫 7. 茶褐色砂 8. 暗黃褐色砂 11. 灰白色砂 12. 黃褐色砂 13. 淡茶褐色土 14. 暗褐色土 15. 暗茶褐色土 16. 暗褐色砂礫土 18-20-21-25-26-28-31-33-39-44. 暗褐色粘質土 19. 暗黃褐色砂質土 22. 暗黃褐色砂質土 24. 暗黑褐色粘質土 27. 暗黃褐色粘質土 29. 暗黃褐色砂質土 30. 暗黑褐色粘質土 32. 暗黃褐色粘質土 34. 暗黃褐色砂質土 35. 暗黃褐色粘質土 35-36-38-41. 暗黃褐色粘質土 37. 黃褐色砂質土 40. 黃褐色粘質土 42. 黃褐色粘質土 43. 淡黃褐色粘質土



第9圖 C地点遺構配置圖(Ⅱ) (1:150)

らは細片の弥生土器が出土している。

S K07 (図版26)

C地点O原点より約15m離れた付近で検出した土塚である。遺構検出面は近接するS D06等の検出面より約40cm下の面である。長さ1.77m、幅83cmを測る不整形な土塚で、底面はほぼ平坦となり土塚中には焼土粒及び木炭粒を多含した褐色粘質土が充満していた。遺構中からは全く遺物は出土していない。

S D08 (図版26)

C地点O原点より約25m付近で検出した幅2.1m、深さ85cmを測る溝状遺構で断面V字形を呈する。本溝は調査区を北西～南東方向に流走する。溝底面のレベルは調査区内においてはほぼ同一であり、溝中には4層の砂質土と最下層に粘質土が充満していた。溝中よりは細片の弥生土器が少量出土するのみである。なお本溝は自然河川と考えられるS D09のほぼ中央にあり、S D09がある程度埋った段階で掘削された用水路の可能性もある。

S D09 (図版27)

S D08の外側で検出した溝状遺構で、幅約7m、深さ約1.1mを測り、調査区を北西～南東方向に流走する。溝底面のレベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には粘質土、砂質土、砂礫の堆積が認められ流水のあったことが窺われることから、自然の小河川ではないかと思われる。遺構中よりは少量の弥生土器が出土しているが流れ込んだものと考えられる。壺は頸部からく字状に外反するものと胴上半部に重弧文をもつもの、甕は頸部に段を有するものと沈線間に刺突を有するものがある。

S D10 (図版27)

C地点O原点より約35m付近で検出した溝状遺構で、幅約75cm、深さ約35cmを測る。本溝は調査区をほぼ東西方向に流走し調査区中央部で終わっている。溝底面のレベルはやや南側が低くなっており、溝中には暗紫褐色砂質土が充満していた。遺構中からは細片の弥生土器が出土している。

S D11 (図版28)

C地点O原点より約50m付近で検出した幅約2.7m、深さ約1mを測る溝状遺構で、断面逆台形を呈する。本溝は調査区を南北方向に流走し溝底面は中央部が1段低く浅く凹んでいる。底面レベルは調査区内においてはほぼ同一であり、溝中には砂利、砂

の堆積が認められ流水のあったことが窺われ、自然河川であった可能性も考えられる。遺物は弥生中期の土器で溝底面付近で出土した。また一部縄文土器の混入が認められた。

SD12 (図版28)

SD11の西側に近接して検出した幅約2.3m、深さ約75cmを測る溝状遺構で、調査区を南北方向に流走する。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には砂質土・砂礫の堆積が認められた。出土遺物は少量の縄文土器と弥生土器であるが器面の磨滅が著しく流込んだものと思われる。

SD15 (図版29)

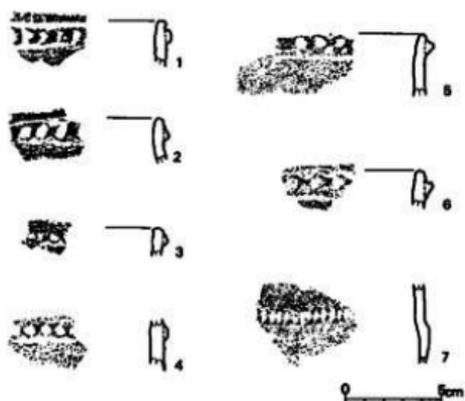
C地点O原点より55m 付近から70m 付近にかけての調査区をほぼ南北に流走する溝状遺構で、幅約2.5m、深さ約1.2m を測り断面U字形を呈する。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一であり、溝中には砂質土・粘質土の堆積が認められた。出土遺物は流込みと考えられる少量の縄文土器である。また石鏃2、石錐1が出土する。なおSD13・14はSD15に接続する浅い溝状遺構である。

SD16 (図版29)

O原点より70m 付近から95m 付近にかけての調査区を南北方向にやや蛇行して流走する溝状遺構で、幅約1.3m、深さ約1.2m を測り断面V字形を呈する。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には粘質土・砂質土の堆積が認められるがそれほどの流水があったとは考えられない。しかし本溝の性格については用水路の可能性が考えられ水の移動はさほどなかったと思われる。溝中より流込んだと思われる少量の縄文土器が出土している。

小 結

C地点において検出できた遺構は、溝状遺構15、土坑1であった。溝状遺構はほとんど南北方向に流走している。溝状遺構のうちSD08・15・16は溝の形態・土層状態などを考えると用水路としての可能性があると思われる。しかし調査区内においては溝底面レベルに大きな差異は認められず、取水・排水側を判断することは困難である。また溝状遺構のうちSD09・11などについては堆積状況などから自然の小河川と考えられよう。



第10図 C地点S D 15・16出土遺物実測図(1:3)

出土した遺物を見てみると縄文晩期のものから弥生中期にかけての遺物が多く認められる。そのほとんどが溝中に流込んだ状態で出土しており、明確ではないがこの近辺に同時期の集落跡の存在する可能性も考えられよう。これは比較的安定した土層状況からも窺われ、この近辺が早い段階で沖積微高地化していたものと想定される。

4. D 地点

D地点はC地点の南西
 方約 180m 離れた下御領
 字上手樋町地区の約90m
 間で、昭和53年12月の約
 1ヶ月間発掘調査を実施
 した。当調査区は昭和52
 年度に御領遺跡第2次発
 掘調査が行われた地域の
 ちょうど中間地帯を通っ
 ている。本調査区の土層
 堆積状況は断割り断面最
 下層まで粘質土が堆積し
 安定した土層状況を示し
 ている。しかし本調査区
 内で検出した遺構は溝状
 遺構3、土塚1で安定し
 た土層であるにもかかわらず
 遺構が少なかった。

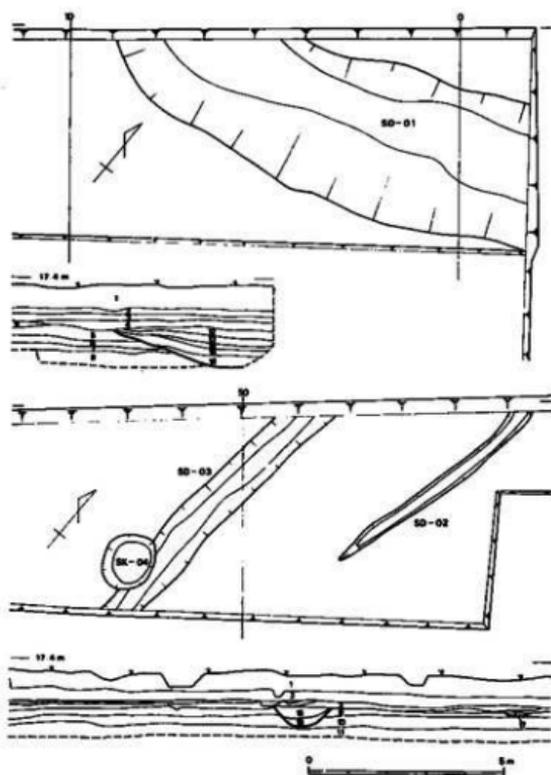
以下検出した遺構の概略
 を述べる。

S D01 (図版30)

D地点O原点付近より10m 付近にかけて調査区をほぼ東西に流走する幅約4m、深さ約1mを測る溝状遺構である。溝底面レベルはやや東側に向け低くなっており、溝中に堆積する土は6層から成る粘質土である。本溝はその規模などから自然河川と考えられる。なお遺構中から遺物は出土していない。

S D02 (図版30)

D地点O原点より約45m 付近で検出した溝状遺構で、幅約38cm、深さ約3cmを測る



第11図 D地点遺構配置図(1:150)

1. 盛土 2. 旧耕作土・床土 3・14-19. 暗黄褐色粘質土
 4-12-13. 暗褐色粘質土 5-6-7-9-11-15-16. 黄褐色粘質土
 8-10. 茶褐色粘質土 17-18. 淡黄褐色粘質土

わずかに凹んだだけのものであり、調査区のほぼ南北方向に流走し調査区中央付近で終っている。溝底面レベルはほぼ同一で溝中には淡黄褐色粘質土が充満していた。遺構中からは遺物は全く出土していない。

S D03 (図版31)

O原点より約50m 付近でS D02の西側に近接して検出した溝状遺構で、幅約1m、深さ約40cmを測り断面逆台形を呈する。本溝は調査区をほぼ南北流走する。溝底面レベルは南側に向けて低くなっており、溝中には淡黄褐色粘質土、暗黄褐色粘質土が堆積していた。溝中からは細片化した土器片が出土している。

S K04 (図版31)

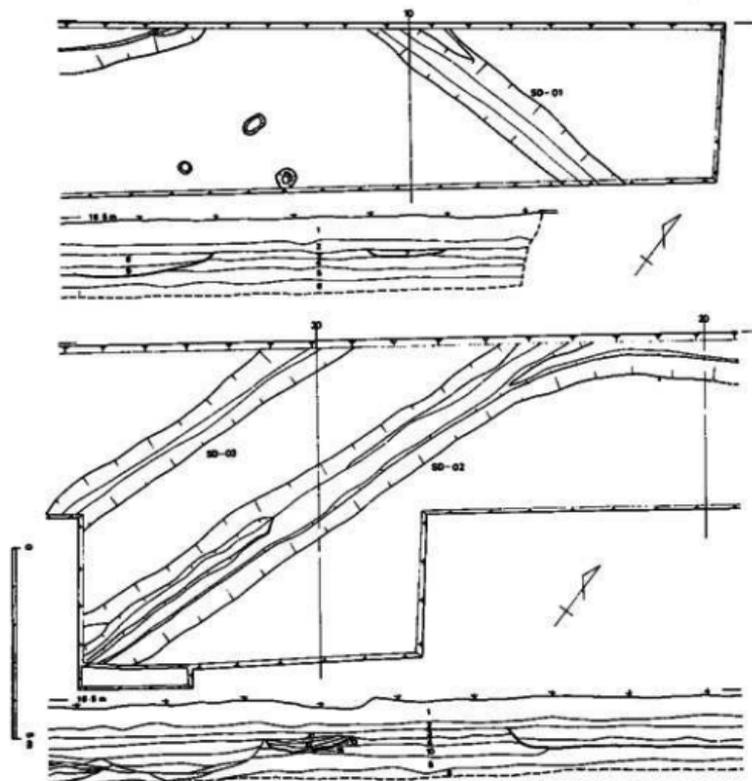
S D03の南側で検出した土塚でS D03によって切られている。直径約1.5m、深さ約1.2mを測り、円筒状を呈し底面はほぼ平坦となる。土塚中には灰褐色粘質土と黄褐色粘質土が充満していた。土塚中からは底面より若干浮いた状態で杭状の木片・種子が検出され、埋土中位ほどから磨製石斧1が出土したが、土器は出土していない。

小 結

D地点で検出した遺構は溝状遺構3、土塚1にすぎなかった。当調査区の土層は前述のように比較的安定した状況を示すにもかかわらず、検出した遺構はわずかであった。昭和50年・52年の二次にわたるこの周辺の調査においては、本調査区北西約m 付近で縄文後期後半の住居跡を検出し、また北西約100m 付近においては弥生土器を出土する溝状遺構を検出している。しかし本調査区に近接する箇所においては地下げが行われているため、遺構は検出できず遺物がわずかに出土するにすぎなかった。これらのことから当周辺での遺構の広がりを中心はやや北側にあったのではないかと推定される。

5. E 地点

E地点はD地点の南西約 220m 離れた下御領八幡原付近約 200m 間で、昭和53年12月より昭和54年3月までの約4ヶ月間調査を実施した。その結果検出した遺構は溝状遺構10、土器溜り状の遺構2であり調査区全域にわたった。本調査区における土層はD地点同様断割り断面の最下層まで粘質土層が堆積する状況にあり安定している。しかし前述のように検出できた遺構のほとんどが溝状遺構で生活跡を検出することはできなかった。ただし出土遺物は弥生中期より古式土師器にまで及び、特に本調査区



第12図 E地点遺構配置図(I) (1:150)

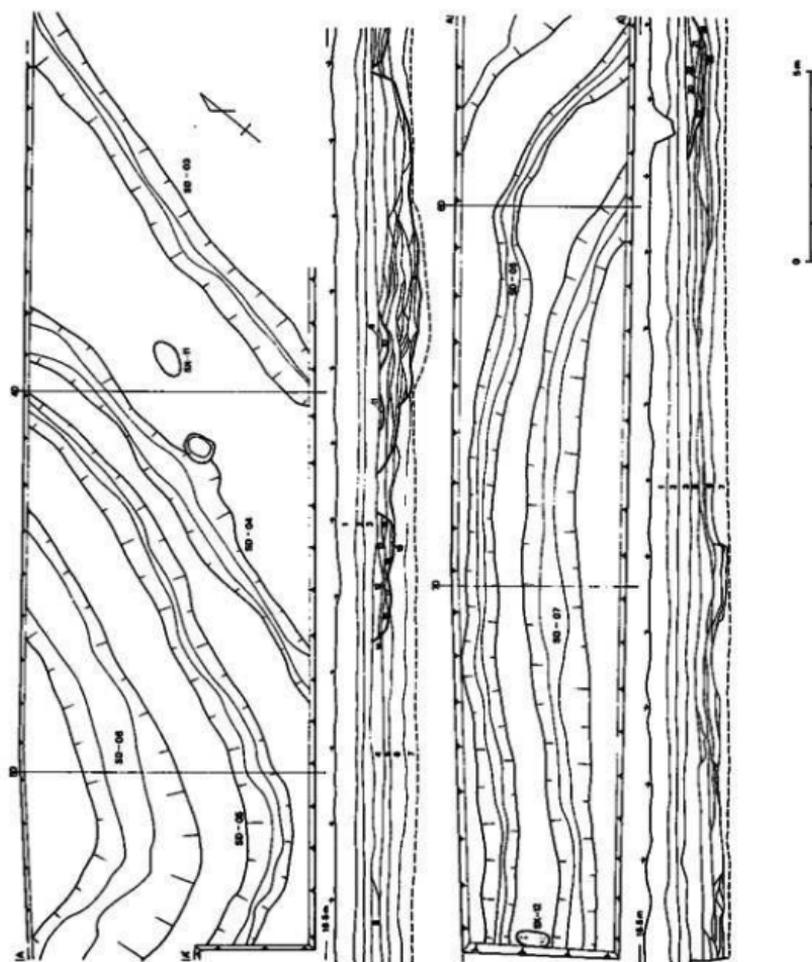
土層説明

- | | | | |
|----------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 盛土 | 2. 旧耕作土・床土 | 3・4. 茶褐色粘質土 | 5. 褐色粘質土 |
| 6. 淡褐色砂質土 | 7-9. 灰褐色粘質土 | 8. 黒褐色粘質土 | 10. 茶褐色粘質土 |
| 11・13. 暗黄褐色粘質土 | 12. 暗黄褐色砂質土 | 14. 暗褐色砂 | |

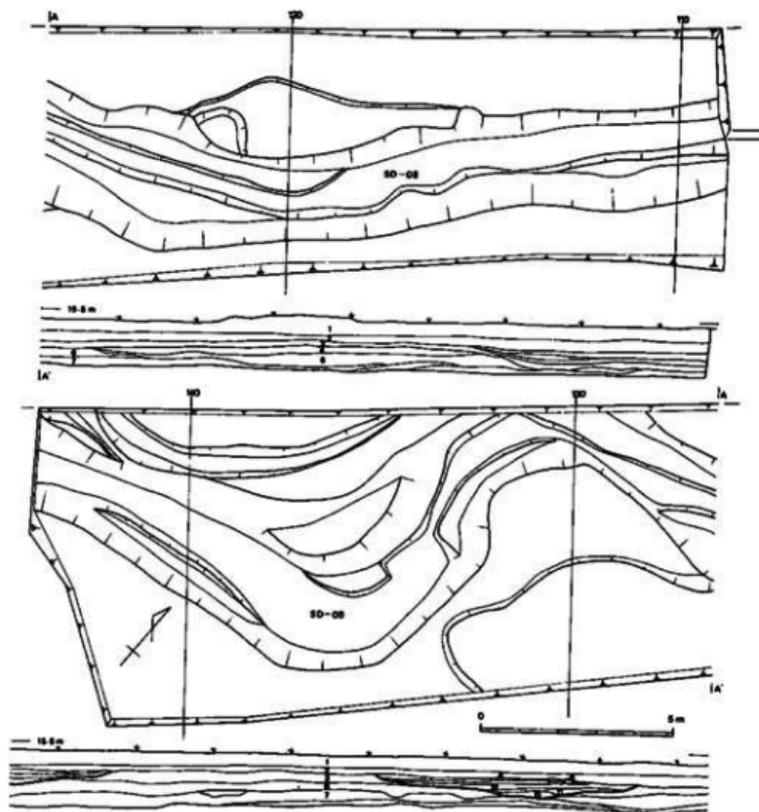
西側で検出した溝状遺構中より出土した一括の遺物は今後当地域の指標となるべきものと考えられる。以下検出の遺構・遺物の概略を述べてみたい。

土層説明

1. 盛土 2. 旧耕作土 3-4-5. 茶褐色粘質土 6. 褐色粘質土 7. 淡褐色砂質土
 8-13-21. 暗黄褐色粘質土 9-17-19-22-25. 暗褐色砂質土 10-11-12-20. 暗褐色粘質土
 14-18. 灰褐色砂質土 15. 暗褐色粘質土 16. 灰褐色砂 23. 赤褐色砂質土



第13図 E地点遺構配置図(II) (1:150)



第14図 E地点遺構配置図(Ⅱ) (1:150)

土層説明

1. 田耕作土・床土 2・10. 暗灰褐色粘質土 3・12. 黄褐色粘質土 4・5. 灰褐色粘質土 6. 灰茶褐色粘質土 7. 茶褐色砂質土 8. 暗褐色粘質土 9. 暗茶褐色粘質土 11. 暗黄褐色粘質土

SD01

本調査区の最東端で検出した幅約1.3m、深さ約20cmを測る浅い溝状遺構で、調査区をほぼ東西方向に流走する。溝底面レベルはほぼ同一で溝中には灰褐色粘質土が充満していた。溝中からは遺物は全く出土していない。

SD02 (図版32)

E地点O原点より15m 付近より40m 付近にかけて調査区を南北方向に流走する溝状遺構で、幅約1.8m、深さ約55cmを測り断面逆台形を呈する。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には黒褐色粘質土、灰褐色粘質土が充満していた。溝中からは弥生時代中期から古墳時代前期にかけての土器が出土したが、ほとんどの遺物

は溝底面よりかなり浮いた状況で出土しており、後に流込んだものが多いと考えられる。また石鏃が4点出土している。

出土遺物(第26図, 図版47)としては、甕は口縁部がゆるやかに外反し頸部に沈線をもつもの、口縁端部が上方に拡張されるものとそうでないものがある。壺は口縁部へ直線状に開き凸帯を有するもの、高坏は坏部が稜をもち大きく開くもの、鉢は口縁部が稜をもち外反し端部がやや肥厚するものがある。土師器では、甕は口縁部がく字状に折れ端部が内へ肥厚するもの、壺は直立気味の口縁をもつもの、高坏は坏部が強く開くもの、埴は口縁が開くものがあり、また手捏ね土器もある。

S D03 (図版32)

E地点O原点より30m 付近から40m 付近にかけて調査区をほぼ南北に流走する状態で検出した溝状遺構で、幅約1.5m、深さ約25cmを測り断面V字形を呈する。溝底面レベルはやや北側が低くなっており、溝中には4層の充満土の堆積が認められ最下層には砂が堆積する。溝中からは遺物は全く出土していない。

S D04 (図版33)

E地点O原点より40m 付近から50m 付近にかけて調査区をほぼ南北に流走する溝状遺構で、幅0.6~1m、深さ約15cmを測る。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には暗褐色粘質土、暗褐色砂質土が堆積する。溝中より出土した遺物は弥生土器・土師器で流込んだものと思われる。なおS D07に続く可能性も考えられる。

出土遺物(第27図1~8, 図版48-1~8)には、弥生土器がある。甕は口縁部が外反するものと二重口縁のもの、壺は直線状に口縁が開くものがある。土師器では、壺は口縁部が二重のもの単口縁のもの、甕は口縁端部が内側にはねあがるもの、高坏は脚柱部から端部へ強く折れるものとゆるやかにカーブするものがある。

S D05 (図版33)

E地点O原点より40m 付近から80m 付近にかけて蛇行しつつ南西方向に流走する溝状遺構で、幅約0.8~1m、深さ約15cmを測る浅いものである。溝底面レベルはほぼ同一であり、溝中には暗褐色粘質土が充満していた。溝中よりの出土遺物は弥生土器、土師器であり、器面が著しく磨滅していることなどから流込んだものと思われる。

出土遺物(第27図9~17, 図版48-9~16, 図版49-12) 壺は口縁部が直線状に開き凸帯を有するものと短い頸部に綾杉文をもつもの、甕は口縁端部が上方に肥厚する

もの、高坏は脚端部が肥厚するものである。土師器は、二重口縁の壺、甕は口縁部がく字状に折れるもの、高坏は坏部がゆるやかに内湾し脚柱部は下半で開くものである。

SD06 (図版33)

E地点O原点より約45m 付近より60m 付近にかけて蛇行して流走する幅約1.5m、深さ約40cmを測る溝状遺構で、断面U字形を呈する。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には8層から成る充滿土が堆積していた。弥生土器・土師器が溝底面から浮いた状態で出土した。

出土遺物(第28図1~6, 図版49-1~5)には、弥生土器がある。壺は口縁部が内傾して肥厚するものと直立するものがある。土師器では、甕は口縁部がく字状に折れ端部が内厚するものとゆるやかに外反するもの、高坏は坏部が深く脚裾が平坦になるものがある。

SD07 (図版33)

SD05の南側をほぼ平行して流走する溝状遺構で、幅約1.2m、深さ約20cmを測る。溝底面レベルは調査区内においてはほぼ同一で、溝中には5層から成る充滿土の堆積が認められた。出土遺物は弥生土器・土師器であり、土師器は溝底面に密着した状態で出土した。

SD08 (図版34)

O原点より110m 付近から140m 付近にかけ調査区のほぼ中央を北東~南西方向に蛇行して流走する溝状遺構で、上面幅約2.5~4.5m、底面幅約1~1.5m、深さ約40~50cmを測る。溝底はやや凸凹があり一部には底面中央が凹み浅い溝状を呈する箇所もある。溝底面レベルは北東~南西方向にかけて低くなり、溝中には粘質土・砂質土・砂礫等が複雑に流入し基底面付近には砂質土の堆積が認められる。出土遺物は弥生土器・土師器・石器であるが、溝中層位より下層にかけての出土が多くみられた。

出土遺物(第29・30図, 図版50・51)には、弥生土器がある。壺は口縁部が直線状に開き凸帯を有するもの、短く外反するもの、外反し下方に肥厚するが内傾するものと外傾するもの、直立し二重口縁のもの、甕は口縁部が内傾し肥厚するもの、高坏は坏底部が円板充填法のもの、脚端部が肥厚するもの、器台は口縁部が上下にわずかに拡張されるもの、鉢は内湾し口縁端部が肥厚するものと頸部から折れ外反するものがある。土師器では、壺は口縁部がく字状に折れ外反するもの、小型壺は胴部が

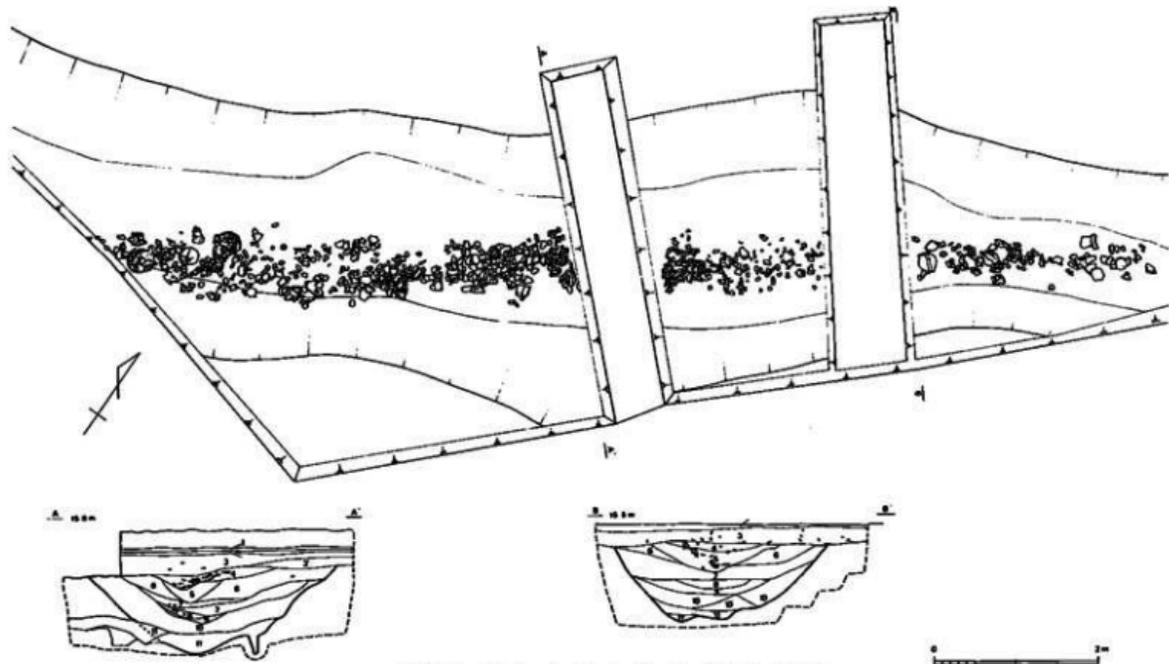
球形のものと中位が張るもの、甕は口縁部がく字状に折れ外反し端部がわずかに内厚するものと直立し二重口縁のもの、高坏は坏部が底部で折れ体部・口縁部となるもの、脚部は折れて裾部が広がるもの、器台はいわゆる鼓形器台といわれるもの、鉢は口縁部がく字状に折れわずかに肥厚するものと二重口縁のもの、埴は丸底のものがある。須恵器は、坏蓋の天井部と口縁部とが明瞭に稜をなすものである。他に土錘がある。

S D09 (第15図, 図版35~36)

E地点を北東から南西に走行する多数の溝状遺構のうち、最も多量の遺物が出土した溝で、同地点西半を蛇行するS D08の西端部付近から、それとほぼ平行して北東から西南方向に緩くカーブしながら流走している。確認面上端幅3.3~2.2m, 下端幅約1.8m。深さは北東部で約1m, 西南部で約0.8mと西南部に向って幅・深さともわずかず減ず傾向を示す。溝底面は浅い凹凸のある鈍いU字状を呈している。溝底及びその直上を覆う砂・砂礫層は鉄・マンガン分の沈着による硬化がみられ、同溝の埋没面直上の暗黄褐色粘土層(第3層)までは粘質土層と砂層・砂泥層の入り組んだレンズ状堆積を成している。中層位ではその下部に比較的安定した流水痕を示す小円礫を含んだ砂層がみられ、それらの埋没後最上層部に土器溜りが形成されている。

遺物は下層からは細片化した土器片が散見された程度で同遺構の掘削時期を決定するものを欠くが、中層位砂層を中心に弥生中期から後期の土器が混在した状態で出土しており、上層の土器溜りでは中・後期の土器を混入するものの、時期的にも限定される古式土師器の一群が圧倒的に多く、同溝の完全な埋没時期を示そう。また上層土器溜りは第15図南北セクションに顕著にみられるように主に南側からの傾斜が著しく、同上層中には多量の焼土ブロック・焼土粒・カーボン等が含まれている。またその分布は旧路線敷コンクリート基礎付近から西半にかけて特に著しく、完形品に近いものも多くみられた。器種等については後で述べるが、同一土器溜りの東半部の第31図No. 6付近から2孔を有した鏡片1点が出土した。

出土遺物(第31~44図, 図版53~66)には、弥生中期の土器から土師器まで各期のものがある。まず弥生土器としては、1)口縁部へ直線状に開き凸帯をもつもの、2)頸部から外反し口縁部拡張のみられるもの、3)内傾気味の二重口縁の大型壺で、頸部が短く羽状文を有するもの、4)外傾又は直立の二重口縁を呈するもの、5)強く外反する二重口縁を呈するもの、6)く字状に外反する単純口縁のもの、7)外反する二重口



第15圖 E 地点 S D 09 实测图 (1:90)

土层说明

1. 旧耕作土 2. 床土 3-4-5. 暗褐色粘质土 3'. 茶褐色粘质土 6. 灰褐色粘质土 7. 暗灰褐色粘质土 7'10. 暗黄褐色粘质土 8. 灰褐色砂 9. 黄褐色砂 10'. 灰黄褐色泥 11. 灰褐色砂 11'. 灰褐色砂壤土

縁で頸部が直立し凸帯を有し、波状文・浮文で飾られたものなど。甕は1)強く外反し単純口縁を呈するもの、2)口縁部が直立・内傾し上・下に拡張されるもの、3)丸底を呈し胴最大径がほぼ中位にあり、口縁部はく字状に折れ端部が内厚するものなど。高坏は、坏部では1)口縁部が直立し端部が肥厚するもの、2)口縁部が内湾するもの、3)内面の肥厚が消え大きく外反するもの、4)底部と体部とに明瞭な稜がみられるもの、5)4)が明らかでなくゆるやかなカーブをなすもの、脚部は1)ラッパ状に開くもの、2)端部が外上方に立ち上りへら描文をもつもの、1)端部を上下に著しく肥厚させるもの、4)折れて裾部が大きく開くものなど。器台は1)口縁部を上下に拡張し凹線を有す大型器台、2)口縁端部が上方に拡張され、大きく外反するものとゆるやかにカーブするもの、3)いわゆる鼓形器台と呼称されるもの、4)いわゆる小型器台と呼称されるものなど。鉢は1)口縁端部が内外へ拡張されるもので大型と小型とがある、2)上方へ著しく拡張された二重口縁をもつもの、3)小型で平底を呈するものなど。埴は1)皿状を呈するもの、2)ボール状を呈するものなど。他に平底状を呈す手焙形土器、いわゆる犬埴輪と呼称される支脚形土製品・製塩土器・タタキのある甕底部なども出土している。



第16図 E地点SD09出土甕比變図
(1:5)

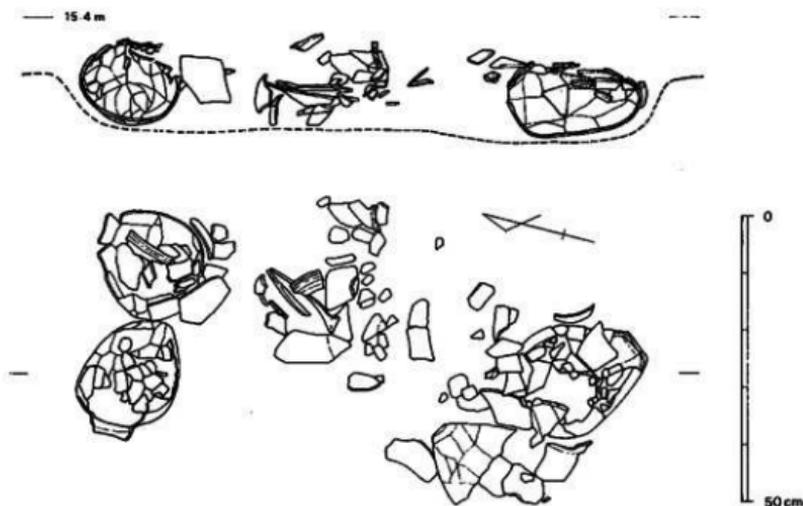
SD10 (図版36)

E地点O原点より180m付近で検出した溝状遺構で、幅約2.5m、深さ約20cmを測り調査区をほぼ東西方向に流走する。溝底面レベルはほぼ同一で、溝中には黄灰色粘質土・暗黄灰色粘質土が充満していた。また溝中には大小の石が混入した状態を呈し、遺物はやや溝底面より浮いた状態で出土した。遺物は須恵器・土師器で須恵器は8～9世紀のものと思われる。

出土遺物(図版67-1)には、須恵器で長頸壺、坏身で高台のつくもの、土師器で高坏の脚部が折れて裾にむかって開くものがある。

SX11 (第17図, 図版37)

O原点より40m付近SD03の西側に近接して検出した土器溜り遺構で、遺構自体は後世の削平のため失われており、4個体分ほどの弥生土器が置かれたような状態で出



第17図 E地点SX11実測図(1:10)

土した。出土遺物は弥生後期後半期の一括遺物である。

SX12 (図版37)

O原点より80m付近SD05と07の間で検出した土器溜り遺構で、遺構自体は後世の削平を受け失われており、土器が散乱状態であった。出土遺物は小片の弥生土器である。

小 結

E地点約200m間は前述のように比較的安定した土層状況を示すにもかかわらず検出できた遺構は溝状遺構10、土器溜り遺構2であり、直接生活跡に結びつけられる遺構は検出できなかった。溝状遺構のうちSD01はほぼ東西方向に流走り規模も小さく遺構確認面も床土直下であることなどから比較的時期の新しいものと考えられる。SD02・03はほぼ南北に平行して流走する。溝断面は逆台形又はV字形を呈し人為的に掘削されたものと考えられ、溝の機能としては用排水路としての機能が考えられる。特にSD02より出土した遺物は弥生時代中期～古墳時代前期にかけてのものでありこ

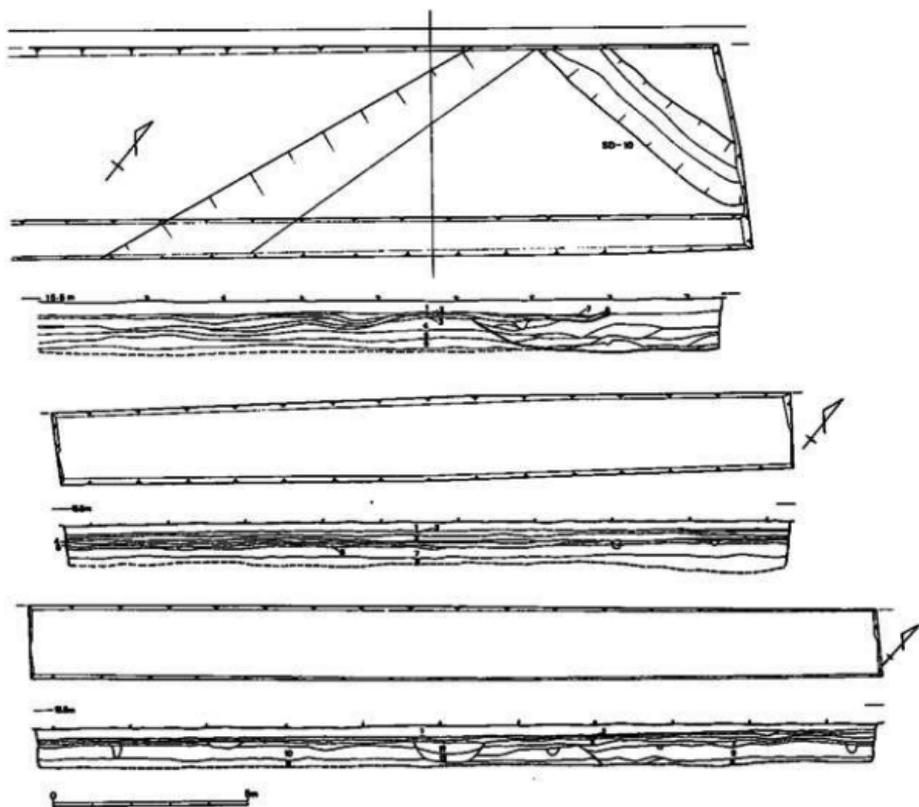
の間有効的に機能したものと考えられる。SD04～07にかけてはSD05を除いて比較的規模が小さい。この付近の断割り断面観察によればこの付近に自然河川と考えられる大溝の存在が看取でき、これらの溝状遺構はこの自然河川がある程度埋ってきた段階の自然河川のなごりをとどめる凹みとも考えられ、その時期はSD07等で出土した遺物によって古墳時代前期頃と考えられる。

SD08は調査区の北東部より南西部にかけて蛇行して流走する溝状遺構で、幅・深さとも規模が大きく、溝底面には砂の堆積層が認められかなりの流水があったことが想定される。その機能については用排水路であったと考えられるが、同調査区東側の調査区においては深さ約2m、幅については調査区内では確認できないほどの大溝がSD08とほぼ同一方向に向け流走しており、この大溝の支流又は大溝がある程度埋った段階の流路とも考えられる。本溝より出土した遺物より本溝が最終的に埋没した時期は古墳時代前期・布留Ⅲ式期に相当する時期と思われ、それ以前の布留Ⅰ式期には遺物の出土状態等により有効的に機能していたものと思われる。

庄内最新期相当の良好な一括資料を出土した溝状遺構SD09は大きく3層に分層され、最下層付近には砂・砂礫土・泥の堆積が認められかなりの流水があったものと想定され、用排水路として機能したものと思われる。しかし一括資料を出土した溝上層においては粘質土の堆積を認めるだけで流水のあった痕跡は認められない。よってこの時期にはすでに溝はその本来の機能を失ったかまたは低下していたものと考えられ、当時としては深さ約50cmほどの浅い凹みとしてしか意識されなかったのではないかと考えられる。庄内最新期の一括土器はこの浅い凹み状となった溝に南側より溝底面に向け傾斜した状態で出土している。このことは土器廃棄に際し意識的に一定方向からの廃棄がなされたものと考えられる。またこの上層中には多量の焼土ブロック・木炭粒の混入が認められ、土器の一括廃棄とともに本溝近辺に生活跡の存在を想起させるものである。

SD10はほぼ東西方向に流走する溝状遺構で、出土遺物より時期的には新しいものと考えられるがその機能については不明瞭といわざるを得ない。またSX11、SX12については本来の遺構の姿をとどめているとは考えられないが、SX11の甕形土器が置かれたような状態で出土したことは溝状遺構と有機的に関連づけられる遺構である可能性もある。

以上のように、E地点では弥生時代中期頃より古墳時代にかけての用排水路としての機能を有する溝状遺構が数多く掘削されている。これらの溝状遺構の存続期間についての細かな検討は不可能であるが、少なくとも数本は同時存在した可能性もある。さらにこの調査区間に用排水路が集中することは取水部がこの付近にあることを想起させる。このことは調査区間中に自然河川と考えられる大溝を2箇所検出したことよりも明らかである。また周辺地域には用排水路を利用した水田遺構が広がっていたものと思われ、これを生産基盤とする集落の存在も推定できよう。



第 18 圖 E 地点遺構配置圖 (IV) F 地点土層断面圖 (1:150)

土層說明

- | | | | |
|------------|------------|--------------|-----------|
| 1. 旧耕作土・床土 | 2. 黑褐色粘質土 | 3. 暗褐色砂質土 | 4. 茶褐色粘質土 |
| 5. 茶褐色砂質土 | 6. 淡茶褐色粘質土 | 7-8. 暗灰褐色粘質土 | |

土層說明

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 耕作土・床土 | 2-9. 黃褐色粘質土 | 3~5. 暗褐色粘質土 | 6. 淡褐色粘質土 |
| 7. 淡褐色砂質土 | 8. 明褐色砂質土 | 10. 灰褐色砂礫土 | 11. 暗黃褐色粘質土 |
| 12. 暗灰褐色粘質土 | | | |

6. F 地点

F地点は今回調査を実施した調査区のうち最も西端に位置するもので下御領八幡原地区の西側約 250m 付近、E地点西端より約50m 付近の約60m 区間である。F地点西側には国道を挟んで現在天井川となっている堂々川が南方向に流下し、F地点より南西方向約 600m 付近で高屋川と合流し西流する。この堂々川西側には沖積地が広がっており、この沖積微高地上に位置する大宮遺跡とは直線にして約 600m の距離がある。

F地点の調査は、幅約 1m、深さ約 1m のトレンチを 2 本設定し掘り下げた。その結果、トレンチにわずかにかかる溝状遺構、ピットを検出したがその内容について十分把握することはできなかった。しかし包含層中より縄文土器から須恵器に至るまでの各時期の遺物が出土した。また北東より南西方向にかけての断割り断面土層の観察によれば東側トレンチでは最下層に至るまで粘質土・砂質土が水平堆積し安定した状態を示すのに対し、西側トレンチでは中央より西側にかけ下層に砂礫の堆積が認められた。これは本調査区が堂々川の氾濫原に近接するためと考えられる。

7. 井原線出土の石器 (第45図)

今回調査した地域内で遺構に伴って出土した石器は石鏃・石錐・石匙・石庵丁・磨製石斧・不整形石器で、遺構に伴わない石器も少量出土したが今回の報告からは除外する。遺構中から出土した石器には溝状遺構より検出されたものもあり一部を除いて流入遺物と考えられる。

石鏃 (1・3・4・6・7・17・18・20~23)

各地点より総数11点出土しておりすべて打製で安山岩を石材とする。これらの石鏃は大まかに平基式と凹基式とに分類でき、平基式3、凹基式6、不明2を数える。平基式のもののはほぼ二等辺三角形を呈し両側辺とも細かい押圧剝離により成形する。凹基式には側辺がやや内湾するもの(6)、側辺が2段に湾曲して中央に小さな逆刺をもつもの(17・18・22)、三角形を呈するもの(21・23)があり、両側辺も細かく調整するものと1側辺を丁寧に調整し他辺をやや雑に調整するものがある。

石錐 (2・13・16)

頭部が大きくふくらむつまみをつけたもので両側面が広がっている。頭部より錐部先端部にかけて次第に幅を減ずるもの(2・13)と、頭部と錐部との境がやや湾曲して錐部が細長くのびるもの(16)とがある。錐部両側辺とも丁寧に押圧剝離し成形され断面やや偏平な菱形を呈す。

石匙 (5)

安山岩製で刃部のほとんどが欠損し、柄部は刃部に対し直角の位置につけられる。

石庵丁 (10・24)

磨製と打製とがあり不整形石器中の一部にも石庵丁と考えられるものがある。磨製のもの(10)は殆ど以上を欠損し紐かけ孔の一孔を遺存する。刃部は湾曲し背部はほぼ直線状になると思われる。石材は砂粒礫岩である。打製のもの(24)は刃部に対し背部は平行し側辺の中央部は抉りを入れている。刃部は両面より細かく丁寧な調整を加えている。

石斧 (8・9・15・19)

蛤刃石斧3点、抉入片刃石斧1点である。蛤刃石斧(8・9・19)はすべて欠損した状況で出土している。石材は閃緑岩(8・9)、粘板岩(19)である。抉入片刃石

斧 (15) は頭部より $\frac{1}{2}$ だけ遺存し頭部の1側面をわずかに欠損している。袂入部はわずかに凹むだけで残存する面には研磨が十分及んでいない。石材は砂質粘板岩である。

不整形石器 (11・12・14・25～27)

不整形石器には方形で2側面に刃部をつけたもの (11・12・25・26) , 多角形で2ヶ所に刃部をつけたもの (14) , 三角形で2側面に刃部をつけたもの (27) がある。方形のものは一方の側辺を両面より丁寧に押圧剝離し他辺は比較的雑に調整している。このうち (25) は片面に自然面を残している。方形のものの中には石庵丁として使用されたものがあると思われるが使用痕などの痕跡はない。(14)は2ヶ所の内湾する部分に刃部がつけられており雑な調整で刃部を形成する。(27)は長辺及び一方の短辺に雑な刃部をつくりだす。石材はすべて安山岩である。

IV. ま と め

今回調査を実施した国鉄井原線建設予定地内での成果は前章までの報告のとおりであるが、ここではその成果に検出した遺構・遺物・鏡片についての若干の検討を加え、まとめにかえたい。

1. 検出した遺構

今回の調査で検出した遺構は、住居跡6（住居跡状遺構2）、建物状遺構1、溝状遺構43、土城17、土器溜り7であり、その時期は弥生時代から中世にわたるものである。しかし総延長1kmにも及ぶ調査対象域では検出の遺構に疎密があり、御領遺跡の性格を考える上で貴重な資料を得ることができた。ここでは特に住居跡と溝状遺構に焦点をあて検討を加えてみたい。

住居跡について

住居跡を検出したのはA地点及びB地点だけで他の調査区からは検出していない。今回検出した住居跡はすべて弥生時代中期頃のものであり、2本柱の円形プランを呈する。類例として周辺地域では福山市駅家住宅団地内の大塚谷・地藏堂1号、手坊谷2・7・12・13号、池ノ内6・24・33号住居跡⁽¹⁾があり、時期的にもほぼ同時期のこのような家屋構造の住居が当該地域においては一般的であったと考えられよう。住居跡を検出した地点については近接していた旧高屋川の後背地上に形成された沖積微高地で、この微高地が更に北側にかけて広がっていたと推測される。このような沖積微高地が当平野内に点在していたと思われるのは弥生時代中・後期にかけての遺跡が周辺に点在している状況からも推測される。しかし御領遺跡A地点で縄文時代後期の住居跡⁽²⁾を検出していることや、本調査区内においても溝状遺構中の流入遺物ではあるが縄文時代晩期・弥生時代前期の土器片が出土していることなどから、当地域の沖積微高地化はかなり早い段階より進行し、少なくとも縄文時代後期後半には人間が当地域に居住できる条件ができたことは想定でき、また稲作を生産基盤とする弥生時代になって急速に遺跡が増加する現象は至極当然であったであろうと考えられる。

溝状遺構について

調査地域内において溝状遺構は43本と他の性格の遺構に比して異常なまでに多く検

る遺跡の現状の問題点を整理しておきたい。当該地域は旧来より遺跡密集地として周知され分布調査・試掘調査が数多く実施されてきた。そして今回の調査においては当御領平野の北東部より南西部にかけて幅5m内外ではあったが連続的な発掘調査を実施し、ある程度の遺跡の分布状況を明らかにすることができた。しかし各遺跡の内容・広がりについて十分把握できていないのが現状である。これは当地域において重要な位置を占める旧高屋川の流路の変遷、また当地域に点在したと思われる沖積微高地の在り方などの地形上の検討がなされていないことにもよる。これらの問題について総合的検討が将来加えられるべきものとする。また現在上御領地区より下御領地区にかけての広範な地域は一括して御領遺跡として総称されているが、沖積微高地の在り方などの考慮にいれつつ今後の調査を期待したい。

2. 出土の遺物について

今回の調査は神辺平野を東西に縦断するかたちで行い、各時期にわたる遺物が出土した。中でも弥生時代中期末と庄内式最新段階の古式土師器の一群が比較的良好な状態で出土しており、その概要を述べまとめにかえたい。

縄文時代～弥生時代前期

縄文時代晩期と弥生時代前期（中段階～新段階）は、調査区ほぼ全域から出土したものの細片化したものが多く、全て遊離・混入した状態で散見されたにすぎない。

弥生時代中期中葉

A地点S D16・SK32、C地点S D12のものと、A地点SK25・SB13・SX40、C地点S D11出土のものがある。前者では甕は胴部最大径がほぼ中位にあり、「く」の字状にややカーブ気味に外反する単純口縁をもち、体部は張りが少なく、外面は縦位の刷毛調整で最大径位に櫛歯状工具による刺突文をもつものもみられ、口縁部も外反するものや外面に部厚い粘土帯を貼り横ナデするものがみられる。後者は胴部最大径がやや上位となり、口頸部で鋭く「く」の字状に外反する単純口縁で、端部に横ナデによる平坦面を有し肥厚気味のものが多い。全体に肩部の張る倒卵形を呈し、底部付近で僅かに内湾する。内面は前者同様ヘラ磨きであるが、外面肩部に刷毛調整、肩部下端から底部にかけてヘラ磨きが施されている。壺は口縁部がラッパ状に開くものと、頸部からほぼ水平に広く外反するものがあり、前者は外面に数条の貼り付け突

出した。この溝状遺構のうちには自然河川と考えられる大溝や時期の不明確なものが含まれるが、溝中よりの検出遺物を検討する限りにおいては弥生時代から古墳時代前半期にかけてのものが10数本あり、その多くが用排水路として機能したものと考えられる。しかし旧地形の状態が十分把握できていない現状においては、用排水路の取水部の位置、水田跡や集落跡との関連を明確にすることは不可能である。またA地点からC地点にかけての溝状遺構からの出土遺物は、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけてのものが多く、E地点においては弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物が多い。一方B地点及びB地点北側の神辺農協御野支所建設地内の溝状遺構からは古墳時代前期の一括土器群が出土している。このことは当地域における集落の在り方に係わる一資料を提供するものと思われるが、直接集落跡を調査したものではなく溝中の流入遺物であることなどから速断はできない。今後の発掘成果をまって検討したい。

E地点SD09内より出土した一括遺物の状態は前述のとおりであるが、これは明らかに意識的な一括廃棄である。このことが溝状遺構に関連する何らかの祭祀的意味をもつものか、あるいは単に不用となったものを廃棄したとも判断しがたい。このことは器種構成を見る限り高坏が僅少であることや祭祀的要素をもつ土器と一般雑器とが渾然とした状態で出土したことより一既に祭祀的意味をもつとは考えがたく、一方完形に近い土器を廃棄している状況からは不用となったものを廃棄したとも判断しがたい。また同遺構より検出した鏡片の意味についても不明確である。鏡片出土の類例は近年増加しているが墳墓・住居跡からの出土であり、溝状遺構よりの類例は報告されていない⁽⁴⁾。今後、類例の増加をまって本溝の性格について検討してみたい。

上記のように今回の調査では多数の用排水路と考えられる溝状遺構を検出したが、これは水稻を生産基盤とする当時の社会構造にあって用排水路の掘削・管理は共同作業として展開されたものであり、水稻生産の共同作業と相俟って重要な共同体内における労働の結果であったと考えられる。また一方では周辺地域との水利問題との関連により周辺集団との水を紐帯とする地縁的共同体が成立していたものと思われる。しかし今回の調査が集落の一部を検出したにすぎず、また周辺遺跡の実相を十分把握できていない現在、集団間における関連を論述することは極めて困難と言わざるを得ない。

以上今回の調査に係わる遺構について若干の検討を加えたが、最後に当地域におけ

帯を有し刻み目をもつものもある。後者は口縁内面に貼り付け突帯・円孔をもち、口縁部は上方にやや拡張気味となる。高坏は全形を知るものを欠くが、坏受部から内傾する浅い立上りの口縁をもち、内外面ともやや雑な弧状ヘラ磨きを施す。甕の2様は、前者がやや先出的なものにとれるが、一応同時期として扱っておく。ザブ遺跡出土土器に該当する。

中期末

全体に遺物量が増し、甕にまとまった資料が得られた。倒卵形のもの他に胴径に比し器高の低いもの（鉢形土器の系譜か）、口端部拡張の発達しないものがあり、上方拡張が顕著で内傾する口端面に数条の退化気味の凹線を廻らすものが大半を占める。該当する遺構はA地点SK41・SK12のグループと同SD21の一群があげられる。ともに胴最大径を上位にもつ倒卵形を呈すが、前者は底部付近の円湾が著しく口縁端部拡張面も内傾味が強く凹線もしっかりとしている。また胴部内面下半をヘラ磨きする例がある（第20図1）。これに対し後者では底部付近でのスリムさは消え、口端部拡張面も起き上り気味で凹線も退化が窺われ、横ナデのみの例も混在する。両者共にヘラ削りと刷毛調整が混在し、削りも肩部上半程で止まり口頸部直下には押圧痕と刷毛目を残す。また外面も肩部刷毛調整下にタタキ痕を残置し、胴部最大径付近から底部にかけヘラ磨きされている。壺は凹線文で飾られた無頸壺がある。高坏は坏部内外面とも弧状ヘラ磨きで坏部底面は円板充填法によっている。脚部はラッパ状に開き、脚端部は肥厚し斜め外方につまみ上げている。E地点SD09出土の(73)~(75)、(82)、(83)等がこれに当ろう。またE地点SD08の(37)、SD09の(71)、(72)等も同期に比定されよう。当該期の遺跡としては、福山市加茂町吹越遺跡、福山市駅家町地藏堂2号住居跡、大塚谷住居跡等があり、前段階のSD25、SD11の土器群との間には口縁端部拡張の開始、凹線文の盛行する中期後半の土器型式が考えられる。SK41は中期後半の可能性が高いが、良好な一括資料を欠く（E地点SD08の14）。一応駅家団地内の池ノ内住居跡群の一群を相当させておく。

後期

後期に入ると前段階同様に遺物量が多い反面、安定した遺構面はなく、遺物は主に包含層または再堆積土中から出土した。芦品郡新市町神谷川遺跡、尾道市堂垣内遺跡、福山市駅家町石籠権現遺跡等に比較的まとまった資料がある。甕は中期末のスタイル

を受継ぎ、口縁部は端部拡張面を徐々に直立化する。退化凹線も直立化と相前後して徐々に消失する傾向を示す。壺も同様であるが比較的大型の内傾する二重口縁のもの(SD08—5.6)が口縁部の直立化と相俟って顕在化し、西部瀬戸内的な様相を色濃く示し始める。内面へら削り技法も肩部までのものが多く定着化する。この他に高坏、高坏坏部を深くした形態の大小の鉢・大型器台・長頸壺等の出現がみられる。後期前半でも古相を示す時期に吉備地方の上東式圏内との密接な交流が考えられよう。しかしその反面それ以降の器種変化、胴部最大径で鋭く屈曲する土器類等、独自の様相の発達が見られる。

後半期ではE地点SX11の甕が確認される程度で、それによれば甕は胴部最大径がかなり上位に移り、肩部との屈曲部は強い張りをもつ。底部から胴部最大径付近までへら磨きされ、肩部は細条の刷毛調整が残る。また口縁の上部拡張はほぼ直立し、横ナデで仕上げられるのが大半を占め、底部付近で既に外湾気味となりやや不安定な平底を呈す。この他にSD09の(5)~(17)、(77)~(79)、(84)~(89)、(94)、(95)、(102)、(104)等のものが後半期のものと思われる。

古式土師器

E地点SD02、SD07・SD09上層土器群と同SD02・SD05・SD08に分かれる。SD09上層一括の他はいずれも溝状遺構出土のため新旧の混入がめだつ。前者は上東遺跡の編年で下田所式期から亀川上層式期にあたり、庄内式の新相に併行するものと考えられる。口縁部・肩部を波状文・突帯・円形浮文等で装飾した二重口縁壺は長越Ⅱ式。東奈良Ⅵ、編向にみられ、甕は胴部最大径を中位からやや上方付近にもち張り気味で、底部は尖り気味の不安定な丸底を呈す。そのほとんどが肩部に刺突文を施す。底部内面に指頭圧痕を残し、へら削りは頸部やや下方まで均質的に施されている。外面は縦位もしくは斜位及び横位の刷毛調整を施し、底部付近はナデ仕上げを行う。また口縁部の形状もほぼ一定するが折り返しのきつく浅いもの(56)、口縁内面横ナデ下に刷毛痕を残すもの(58・60)、頸部上面を強く横ナデするもの(60・70)もみられるが、概してプロポジション・刷毛調整・口縁の作り等共通する。布留式甕への傾向が強く過度的な様相と言えよう。壺形土器では上層述の他に広く外反する二重口縁のもの「く」の字状に外反する単純口縁のものがあり、共に刷毛調整されている。高坏は内外ともへら磨きされた屈曲の鈍い坏部と広く外反した脚裾に4孔をもつ脚部等がある。

他器種では小型丸底壺、口端部をわずかに上方につまみ上げる小型器台、底部外面をへら削りし口縁端にクセをもつ坑、暗文風へら磨きの施される大型鉢・鼓形器台・手焙形土器・支脚形土製品・製塩土器などが知られる。

これに対して後者では、壺の装飾の退化（第30図5）、壺・甕の体部の球形化（第30図6）がみられ、鼓形器台（第31図35）も前者に比べ器高に対し口径が増しくびれ部の段も退化する。鉢（第31図39）も薄手・小型化する。更に甕の口縁部のつまみ上げ、横刷毛が顕著なもの（第27図17）等と、内湾気味の口縁（第28図17）を上方に拡張し端部を肥厚するもの（第30図21）、SD08の高坏の新旧（第31図）等、鼓形器台（35）に伴い布留Ⅰ式に併行するものから須恵器坏（第 図44）までを含み、かなりの時期幅をもつ。

SD09の一群はその器種構成及び甕口縁部の作り方など未だ庄内期の様相を示す反面、甕群のプロポーション及び調整法等に布留式への傾斜を窺わせており過度的な様相といえるがここでは一応庄内式最新相として位置づけておく。類例に乏しい現段階ではこれらの土器群の成立について論ずることは避けるが、備南地域における古墳発生期の問題と相俟って、神谷川式と総称される弥生時代後期の土器編年作業が急がれよう。

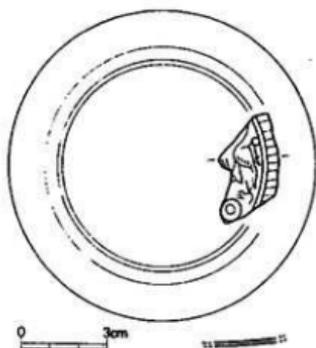
3. E地点SD09出土の鏡片について

E地点SD09上層で出土した鏡片は伴出の土器群の様相から庄内式の最新相に属する時期のものである。鏡片は内区主文部及び外区約 $\frac{1}{2}$ 程を残すのみで、外縁部及び鈕部を欠失している。破損部及び鏡面の内外面はともに丁寧に研磨が施され、特に文様を描き出している鏡背部は全体に研磨のため文様が凸凹のない暗文風となっており、断面は非常に薄く1mm程の厚さしかない。また主文部を画する突線の圏帯付近と主文部鈕付近には計2孔の懸垂孔が穿たれている。現存では主文部鈕付近の1孔は鏡片の欠損のため約半分程が欠けており、こののち再度破損面を研磨した痕跡が明瞭に窺え、永年の使用が考えられる。

遺存する鏡片は内区主文部及び外帯部の一部であるが、主文部を画す円座を有す乳が1個遺存しており、主文部にみられる文様はやや簡略化された神仙像が描かれている。外区は突線による区画がなされ、直行の櫛歯文帯がみられる。このような文様を構成するものとしては内区に獸形を主として配し、ときに神仙像・禽形をまじえる獸

帯鏡の類が考えられる。この鏡種には図像の表現に細線式と半肉形式の2種があり、当鏡はこのうち鑄出しの具合からみて細線式獣帯鏡に属するものと考えられる。遺存する外区突線帯より外区櫛歯文帯までの径は約8cmに復元することが可能で、通例この式に伴う外縁の形状は平縁と考えられることから、全体の面径はほぼ10~11cmのものと推定されよう。製作時期は前漢末から後漢代にあり盛行するのは後漢代前半と考えられる。

特にこれが鏡片として溝内より出土した点は注目される。現在これら鏡片の実例は弥生時代後期後半から古墳時代末期にかけて九州を中心としつつも西日本全域に分布することが知られ、その出土例は墳墓・集落跡を問わず増加の一途にあるが、広島県内でも近年この種の鏡片の出土が相次いでいる。現在県内出土の鏡片の実例は当例を含めて6遺跡7例が知られ、このうち6例までが埋葬遺構からの出土であり、本例が集落跡に関係のある溝中より出土したことは興味ある資料と言えよう。



第19図 E地点SD09出土破鏡実測図(1:2)

(注)

- (1) 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976
- (2) 広島県教育委員会『神辺御領遺跡第1次発掘調査概報』1976
- (3) 広島県教育委員会(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡—神辺農業協同組合御野支所建設に係る—』1980
- (4) 正岡睦夫『鏡片について』『古代学研究』第90号
- (5) 一般にハケ、ハケ目と呼ばれる調整で、板小口部の様な工具を使用したものと思われ多様であるが、中には単位の中に植物繊維のスレた跡の残るものがある。板目単位の明らかなものもあるが、ここでは一応刷毛調整としておく。
- (6) 広島県教育委員会『ザブ遺跡』『山陽新幹線建設予定地内遺跡発掘調査報告』1973
- (7) 前期古墳群中に弥生時代中期後半の住居跡2軒、墳下と同じく中期後半～末の土椀が検出されている。
- (8) 豊元国、甘粕建『備後神谷川の弥生式遺跡』『吉備考古』75 1968
脇坂光彦、小郡隆『芦品郡新市町神谷川遺跡の資料』『地歴部誌』第4号 1976
- (9) 広島県教育委員会『堂垣内遺跡発掘調査報告』1977
- (10) 弥生時代後期の住居跡群で、後期後半初頭と中葉以降の土器が出土している。
- (11) 既に中期末で内面へラ削りが肩部程まで施される。神谷川遺跡の資料紹介、堂垣内の報告で問題提起されているが、後期初頭での鬼川市Ⅰ式の高坏形土器との共通性の他、長頸壺・大型器台等の検出例が比較的多い。
- (12) 一般に広義の神谷川式の特徴とされているが、他器種の鉢形土器にも顕著で、壺・甕形土器等も胴部最大径で強い張りをもってくる時期がある。後期前半でも新相頃に顕在化するため、狭義のメルクマールとして扱うことが可能となれば、今後の細分化の一指標となり得よう。
- (13) 岡山県教育委員会『川入・上東』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977の編年。最近高橋護氏によって更に細分化されている。高橋護『入門講座・弥生土器—山陽3』『考古学ジャーナル』179 1980
- (14) 兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』1978
- (15) 東京奈良遺跡調査会『東京奈良』発掘調査概報Ⅰ 1979
- (16) 奈良県立橿原考古学研究所編『橿向』1976

- (17) いわゆる「犬埴輪」と呼ばれる中空の上部にV字の突起をもつもので、県内ではザブ遺跡で同型ものがあり、矢捨遺跡でも中空の円筒柱状の支脚が出土している。前者は古式土師器、後者は土師質土器類と共伴。『古代学研究』17 1978の大橋氏の論文「土製支脚の系譜」に詳しく紹介されている。
- (18) 溝状遺構から他の土器群と混在し出土。一括組成の内容にも乏しく、ここでは型式分類は控えた。SD09に続くものとして、今後の資料の増加を待って細分したい。須恵器坏蓋については新谷式夫「安芸・備後の古式須恵器」『古文化談叢』第5集(1978)によると5類別された内、第I型式の後半期に比定されるであろう。
- (19) SD09の土器群は変形土器をとってみても弥生後期後半のものとは大きな隔絶性を示し布留式への傾向も強く見受けられ、個別的に取扱えば区分しがたい様相を示す。

なお出土遺物については間壁忠彦・江見正己・酒井龍一・小山田宏一・大船孝弘各氏の御教示を得ることができた。

付1 掲載遺物観察表

土 製 品

A 地 点

SK12

弥 生 土 器	甕	20-1	口頸部は強く屈曲し口縁部は強く内傾し上方に拡張する。端部外面には4条の凹線、内外面とも丁寧に横ナデ。内外面とも最大径付近まで縦位の刷毛調整を行っており、それ以下では外面縦位、内面縦位のヘラ磨きを行なう。底部は外面へラ磨き内面ナデが施されている。口径17cm, 器高34.3cm, 最大径25cm。
	壺	20-2	長脚の付く菱形土器と思われる。口端部はやや内肥し上面は平坦で1条の沈線を選す。口縁部より体部にかけては直線的に外方に広がり外面には7条の凹線を選す。外面には2本1単位とする棒状浮文が貼付けられている。外面及び内面口端部は横ナデ体部内面は横位及び斜位の刷毛調整。口径13cm。

SB13

弥 生 土 器	甕	20-3・6・7	(3)口縁部は強く屈曲し短く外方にのびる。端部はやや肥厚し断面矩形を呈する。口縁部は内外面とも横ナデ体部内面は横位の刷毛調整。推定口径22.8cm。(6)・(7)菱形土器の底部と思われる。
	高 環	20-4・5	(4)口縁部は環部よりわずかに屈曲し内傾して短く立上り端部は丸くおさめる。口縁部内外面とも横ナデし、環部内面は縦位の刷毛調整。推定口径18.4cm。(5)端部は外方に拡張されたものと考えられる。端面は強く内傾し2条の凹線を選す。底面はわずかに平坦面をつくりだす。内面へラ削り、端部は横ナデ。脚端部13.8cm。

SK14・15

弥 生 土 器	高 環	20-9	脚端部はわずかに外上方に拡張し端面は強く内傾する。脚端径11.2cm。
	甕	20-10	口端部は強く内傾し上方に拡張し端部は丸くおさめる。端部外面には浅い4条の凹線が選す。
	壺	20-11・12	ともに長頸部下半と思われる。

SD21

			(1)~(3)口縁部はく字状に屈曲して短く外方にのび口端部をわずかに上方に拡張する。体部はなで屑。口縁部内外面は横ナデし、体部は細かい刷毛調整。(9)・(10)口縁部は頸部よりく字状に屈曲しわずかに内湾して短く外上方にのび、口端部は内傾し上方
--	--	--	---

弥生土器	甕	21・22 1～15・21	及び外方に拡張され口端部外面に3条の凹輪を廻す。最大径は体部上位にあり器高は低いと考えられる。(9)は外面縦位の刷毛調整、内面横位斜位のヘラ磨き。(11)は外面縦位の刷毛調整、内面横位及び斜位の刷毛調整。内面頸部付近に指頭による押圧痕を残す。(5)～(8)・(12)～(15)く字状に口縁部が屈曲し短く外上方にのび、口端部は強く内傾し、上・下方に拡張する。口端部内面には数条の凹輪を廻す。体部はややなで肩を呈す。内外面とも刷毛調整(5, 8, 13, 14)と、内面へう削り(12)がある。(6)体部外面上位は叩き調整を行なった後縦位の刷毛調整、最大径よりやや上方より縦位のヘラ磨き。内面は最大径よりやや上方まで斜位の刷毛調整下方は縦位の刷毛調整。口径17cm, 器高34.5cm, 胴部最大径25.2cm。(12)底部中央には焼成後の穿孔がある。体部外面上位は縦位の刷毛調整、下方は縦位のヘラ磨き。内面は胴部最大径より下方を縦位のヘラ削りする。口径15cm, 器高33.2cm, 胴部最大径24cm。
	高坏	22 16～20	①口縁部は屈曲しやや外上方に短く開き、口端部は内傾し外面に2条の凹輪を廻す。坏部は口縁部よりやや下方で屈曲し直線的に下方に向う。外面横ナデ、内面ナデ風のヘラ磨きを施す。(18)口端部を内外に拡張し端面は内傾する。(19)小形高坏形土器の坏底部。外面には指頭による押圧痕を残す。(20)口縁部は坏部より屈曲し内傾して短く上方にのび、端部は丸くおさめる。坏部はやや内反して坏底部に至る。内外面とも横位のヘラ磨き。口径25.6cm。(17)端部は内傾しやや外方に拡張、脚底面は平削面をつくりだす。脚底径15.2cm。

S D 23

弥生土器	甕	23-1・2	(1)口縁部は粘土帯貼付けにより外下方に拡張し、端部は丸くおさめる。口縁部直下には貼付けによる凸帯が1条廻る。胴部最大径は体部上位にあり、下半にかけてゆるやかにカーブする。(2)口縁部はゆるやかに外反して短く外方にのび、端部は断面矩形を呈する。体部はやや内湾しつつ直線的に下方にのびる。体部外面縦位の刷毛調整、口端部は横ナデ、口縁部内面は横位の刷毛調整、体部横ナデの後横位のヘラ磨き。口径25cm。
	紡錘車	23-3	周辺部は欠損する。土器片よりの転用。残存径2.3～3cm

S D 24

弥生土器	壺	23-5	頸部から直線的に外上方に開く。口端部は平坦面をなし外方にわずかに拡張、端部に刻目を施す。口縁部には2条の断面三角形の貼付け凸帯が廻り刻目を施す。内外面とも横ナデ、口径11.6cm。
	紡錘車	23-4	周辺部は欠損する。土器片よりの転用。残存径2.2cm。

S K 25

弥生土器	壺	23-11	頸部からやや外反して上方にのび口端部に至る。口端部は平坦面をもち内外に拡張肥厚する。口端部直下には2条の断面三角形の貼付け凸帯を通し刻目を施す。内外面とも横ナデ。
	甕	23-6～10	口縁部はく字状に屈曲外上方にのびる。(6)口縁部曲部を強く横ナデし段を有してい

弥 生 土 器	甕	23-6~10	る。口縁部は短くのびる。外面縦位の細かい刷毛調整、内面縦位の刷毛調整の後横位のへう磨き。(7)口縁部は強く字状に屈曲し、内面に明瞭な稜線をもち、外上方に短く直線的にのびる。最大径は体部上位にあり内湾して底部に至る。底部には中心より偏して焼成後の穿孔がある。口縁部内外面横ナデ、体部外面は縦位のへう磨き、体部内面上半は刷毛調整後幅の広い横位のへう磨き下半は幅の狭い横位のへう磨き。体部内面には煮沸による炭化物の付着が認められる。口径19.5cm、器高29.3cm、胴部最大径22.7cm。(8)口縁部は強く屈曲し短く外上方にのび端部はやや肥厚する。口縁部内外面横ナデし体部外面は縦位の刷毛調整の後一部横ナデする。体部内面はナデ。(9)口縁部はゆるやかに外反し短くのび、端部は丸くおさめる。
		12・13	

S X 4 0

弥 生 土 器	高 環	24-1	口縁部は環部から屈曲内傾して短くのび端部は丸くおさめる。体部はわずかに内湾して下方に向う。内外面とも幅の狭い丁寧なへう磨き。
	壺	24-2	口縁部は外反して外下方にのびる。端部は上方にやや肥厚し、端面には浅い2条の凹線を廻す。口縁部内面屈曲部には断面三角形の2条の貼付け凸帯が弧状に廻っており、凸帯と凸帯の間及び内側の凸帯の内側にはそれぞれ等間隔に穿孔あり。内外面とも横ナデ。

S K 4 1

弥 生 土 器	高 環	24-4・7	(4)口縁部は環部より強く屈曲内傾し短くのび端部は丸くおさめる。外面環部は刷毛調整した後縦位のへう磨き、口縁部縦位のへう磨き。口端部外面は横ナデ、環部内面は横位の多角形へう磨き。(7)環部はゆるやかに内湾して上方にのびる。環部底面は円板充填による。脚柱部はゆるやかにカーブしてラッパ状に開く。脚端部はやや外上方に拡張。脚柱部には方形の透あり。環部内外面ともへう磨き。環部底面は横位のへう磨き。脚柱部外面は縦位のへう磨き。脚端部内外面とも横ナデ。
	壺	24-5	体部屈曲部より口縁部にかけてはほぼ直線的に内傾してのび、端部はわずかに外方に拡張し口縁部は平坦な面をもつ。口端部直下に焼成前に穿孔された穴あり。口端部直下より体部にかけて10条の凹線。口端部直下には2本を単位とする棒状浮文を凹線施文後に貼付け、刺突列点状に押圧する。体部凹線下方は横位のへう磨き。口端部は横ナデ。内面は口端部より体部中位にかけて横ナデ。下半は刷毛調整。
	甕	24-3・6・8・9	(8)口縁部は強く屈曲し短く外方にのびる。口端部はわずかに上方に拡張し端面には2条の退化凹線を廻す。口縁部は内外面とも横ナデ。体部内面は縦位の刷毛調整。(9)口縁部はゆるやかに外反し短くのび、端部は内上方に拡張し丸くおさめる。端部外面に3条の凹線。体部外面は縦位の刷毛調整。口縁部内外面は横ナデ。
土 器	環	24-10	体部はやや内湾して立上り端部はやや尖る。底部と体部との境界面には断面三角形の高台が貼付けられ端部は尖る。体部内外面とも横ナデ。口径14.4cm、器高4.4cm。

C 地点

S D 0 1

須 恵 器	高 環	25-1	脚柱部はほぼ直線的に下方にのびた後、ゆるやかにカーブして開く。環底部直下には円形透が4ヶ所ある。脚柱部内外面とも横ナデ。環底部も横ナデ。
-------------	-----	------	--

S D 03

須恵器	坏身	27-2	底面はほぼ平坦で底部より体部にかけてゆるくカーブする。高台は断面台形状を呈しやや外方に張出す。底部内面及び高台部は横ナデ。高台径8.2cm。
-----	----	------	--

S D 09

弥生土器	壺	25-5・6・8	(5)口縁部は頸部よりゆるやかに外反し中位外面がやや肥厚し端部に至る。体部は頸部よりほぼ直線的に開く。頸部にへら描き沈線が4条廻る。口縁部外面を横位の刷毛調整、体部を横位へら磨き。口径14.2cm。(8)蓋形土器の肩部付近と思われる。2本の沈線下に3重の重弧文を施す。外面へら磨き、内面ナデる。
	甕	25-4・7	(4)口縁部はゆるく外反し端部は丸くおさめる。口縁部は粘土帯接合により外面接合部に段をつける。(7)口縁部はゆるく外反し短くのび端部は矩形をなす。端部外面に刻目。口縁部直下には1条の沈線を随しその下には刺突列点文を施す。口縁部は粘土帯接合により外面接合部は段をなす。

S D 11

縄文土器		27-12	口縁部外面には断面三角形の貼付け凸帯をもち刻目を施す。内面横ナデ、外面二枚貝殻条痕を残す。
弥生土器	壺	25-10・11	(10)口縁部は強く外傾し、口端部はやや肥厚し端面内傾する。口縁部外面には断面三角形の2条の貼付け凸帯が廻る。内外面とも横ナデ。口径19.4cm。(11)口縁部は外反し、端部はやや外方に拡張する。口縁部外面には断面三角形の貼付け凸帯が3条廻り刻目を施す。口縁部外面横ナデ、内面横位のへら磨き。口径18cm。

S D 12

縄文土器	鉢	25-16	口縁部は屈曲しやや内湾して上方にのびる。端部はやや内肥さず端面をもつ。外面屈曲部直上及び内面端部直下に1条の沈線を施す。
弥生土器	甕	25-15	口縁部は強く外反して短くのび、端部は内肥させる。胴部には板状工具による刺突文。外面横位の刷毛調整。口縁部内外面横ナデ、胴部内面横位の刷毛調整。口径17cm。

S D 15

縄文土器	鉢	10-1~4	口端部直下に断面三角形の貼付け凸帯を随し刻目を施す。
------	---	--------	----------------------------

S D 16

縄文土器	鉢	11-5~7	(5)・(6)口端部直下には断面三角形の貼付け凸帯を随し刻目を施す。内外面とも横ナデする。(7)わずかに屈曲する体部をもち外面屈曲部に刺突列点文を施す。内外面ともナデ。
------	---	--------	--

E 地点

S D 02

弥生土器	甕	26 1・6~10	(1)口縁部はゆるく外反し短くのび端部は丸みをもつ。口端部外面に刻目。口縁部直下には3条のへら描き沈線。沈線間に刺突列点文を施す。内外面とも横ナデ。(6)・(7)口縁部はゆるく外反し短くのび端部は外上方に拡張する。端面は内傾し外面には2条の凹線を施す。内外面とも横ナデ。(8)口縁部は強く屈曲し短く外方にのび端部はほぼ垂直に立上り、先端は尖る。端部外面に2条の凹線。口縁部内外面横ナデ、
------	---	--------------	---

甗	甗	26	体部外面縦位の刷毛調整。(9)口縁部はゆるく外反し短くのび端部はやや上方につまみ上げる。口縁部内外面横ナデし、体部内面は頸部直下までへら削り。0口縁部は短く屈曲してのびる。口縁部内外面横ナデし体部内面は屈曲部までへら削り。
		1・6~10	
甗	甗	26-2~5	口縁部は頸部より外反して上方にのび、外面には断面三角形の貼付け凸帯を施す。(2)貼付け凸帯上に刻目を施す。(3)貼付け凸帯を施した後2本1単位の棒状浮文を貼付ける。(4)口端部に円板状粘土を貼付ける。(5)頸部は体部よりやや内湾して立上り、口縁部は屈曲して外上方にのびる。口端部は上方及び外下方に拡張し口端は内傾する。口縁部内外面横ナデ、頸部外面横位のへら磨き、頸部内面はへら状工具によるナデ、体部はへら削り。
		26-11	口縁部は斜め上方に大きく外反し端部は丸くおさめる。
甗	鉢	26-12	体上部を一回屈曲させ直立気味に立上らせ、口端部は外方に拡張し端部は平坦面をもつ。
		26-1	0口縁部は外傾してのび端部はわずかに平坦面をもつ。外面中位ほどがやや肥厚する。内外面とも横ナデする。(5)口縁部はく字状に屈曲して短くのび端部は矩形を呈する。外面屈曲部は強い横ナデのため凹む。口縁部内外面横ナデ、体部外面刷毛調整。体部内面へらナデ。(7)口縁部はく字状に屈曲しやや内湾気味に立上り、端部は内肥する。口縁部内外面横ナデ、体部外面横位の刷毛調整。体部内面横位のへら削り。
甗	甗	26-18	口縁部は直立気味にやや外傾して立上り、体部はやや肩が張る。口縁部内外面横ナデ。体部内面横位のへら削り。
		26-22	口縁部はゆるく外反してのび端部は丸くおさめる。内外面ともナデ。
甗	甗	26-16	口縁部は直線的に外上方に長くのび端部は丸くおさめる。体部は肩が張り屈曲して丸底部に続く。外面ナデつけ。内面口縁部ナデ、体部は全面指頭による押圧痕を残す。口径9.4cm、器高10.4cm。
		26-19~21	0口縁部内面を丁寧にナデている。口径6.2cm、器高5.5cm。

S D 0 4

甗	甗	27-1・3	(1)口縁部は強く外反し短く外方にのび端部は丸くおさめる。口縁部直下には削り出し凸帯が張り、凸帯上をへら状工具で鋭突点状の刻目を施す。内外面とも横ナデ。(3)口縁部はゆるく外反した後ほぼ直立して短く立上る。外面横ナデ。
		27-5・6	(5)口縁部は頸部より直線的に外上方に開いた後、屈曲してやや内湾して外上方に続く。体部はゆるくカーブし球形に近い。口縁部内面横ナデ、頸部内面には指頭による押圧痕を残す。(6)口縁部は頸部よりゆるく外反して外上方にのび、端部は矩形を呈する。口端部内外面横ナデ、口縁部内面は粗い縦位の刷毛調整の後ナデ。
甗	甗	27-4	口縁部はく字状に外反しほぼ直線的にのびる。内外面とも横ナデ。
		27-7・8	(7)脚柱部外面刷毛調整後ナデ、裾部外面横ナデ。内面は脚柱部へら削りし、裾部刷毛調整後ナデ。(8)外面脚柱部指頭によるナデつけ。内面脚柱部はへら削り。

S D 0 5

甗	甗	27-9・12	(9)口縁部は頸部よりほぼ直線的に外上方に開き、端部はやや内傾し内外に拡張する。口縁部直下に断面三角形の貼付け凸帯を2条施し刻目を施す。凸帯上に2本を1単位とする棒状浮文を貼付ける。(2)頸部はほぼ直立し体部は強く外方へ開く。頸部外
---	---	---------	--

弥 生 土 器	甕	27-11	面には板状工具の小口部によって綾杉文を施文する。頸部外面ナデ、体部は縦位の細かい刷毛調整。頸部内面横ナデ。頸部には成形時のしぼり目を残す。体部はナデ調整。
			口縁部はゆるく屈曲し短くのび、口端部は内傾し上下に拡張する。端部外面には浅い凹線を4条通す。口縁部内外面横ナデ、体部外面は縦位の刷毛調整。
土 師 器	高 坏	27-10	脚端部は下方に拡張しやや内傾する。端部は丸くおさめる。脚端部内外面とも横ナデし、脚部内面へラ削り。
	壺	27-16	内外面とも横ナデ。
	甕	27-17	口縁部はく字状に外反し外面がやや肥厚する。体部はゆるくカーブし肩部でわずかに屈曲する。口縁部内外面横ナデ。体部外面下半に刷毛調整痕を残し、体部内面はへラ削り。
高 坏	27-13~15	①3内面横位の刷毛調整した後横ナデする。②中底部はやや平坦気味となり体部にかけてゆるやかにカーブして上方に開く。外面縦位のへラ磨き、内面指頭によるナデ。③脚柱部は筒状となり襠部にかけてゆるやかにカーブして開く。外面脚柱部縦位のへラ磨き、襠部は斜位の幅の狭いへラ磨き。	

S D O 6

弥 生 土 器	壺	28-1~3	(1)口縁部はゆるく屈曲し外上方に短くのび、端部は内傾し外上方に拡張する。端部外面に1条の凹線を廻し、屈曲部には粘土線を貼付け凸帯風にする。内外面とも横ナデ。(2)口縁部は頸部より強く外反し短くのび屈曲してやや内湾気味に立上り、端部は丸くおさめる。口縁部外面はナデによって凹線風な凸凹が生じる。内外面とも横ナデ。(3)口縁部は強く屈曲して外方にのび、頸部はやや内傾気味にのびる。外面及び口縁部内面横ナデし、頸部内面は指頭によるナデ。外面及び口縁部内面には丹の付着が認められる。
			甕
高 坏	28-6	坏部は小さなボール状を呈す。脚柱部は筒状で襠部にかけて強く屈曲し襠部は低く直線的に外方に開く。脚柱部内面へラ削りし襠部内面ナデ。口径12.5cm、器高10.6cm。	

S D O 7

弥 生 土 器	甕	28-7	口縁部はわずかに屈曲し、短く外上方にのび、端部を丸くおさめる。端部外面には刻目を施し、屈曲部直下には3条のへラ描き沈線あり。
	壺	28-8	口縁部はほぼ直線的に外上方にのび端部はやや肥厚し平坦な面をもつ。口縁部外面には断面三角形の貼付け凸帯。
土 師 器	壺	28-10	体部外面右上りの叩きの後縦位にへラ磨き、体部以下ナデ。体部内面は板状工具によるナデ。
	埴	28-9	体部は内湾して立上り、端部は丸くおさめる。体部下半右上りの叩き。

赤 土 器	壺	29-1~5	(1)口縁部はゆるく外反して短くのび、端部は内傾し下方に強く拡張する。口端部は櫛形斜格子目文、頸部下端には断面台形の粘土帯を貼付け、その上を指頭によって押圧する。口縁部外面横ナゲ、口頸部に刷毛痕を残す。内面はヘラナゲ。(2)口縁部は直線的に外上方に開き、端部はやや内傾し肥厚する。口端部には刻目を施し、口端部直下には3条の断面三角形の貼付け凸帯を廻し刻目を施す。(3)口縁部は頸部より短く外反した後屈曲してやや内湾して立上る。口縁部外面は強い横ナゲのため凹線風となる。内外面とも横ナゲ。(4)口縁部はゆるく外反し端部は内傾して肥厚する。頸部外面には断面台形の凸帯を廻しその上をヘラ状工具で押圧する。外面及び口縁部内面横ナゲし体部にかけてナゲつける。(5)口縁部はゆるく外反して長くのび、口端部は断面三角形の粘土帯を貼付け垂下させる。口端部外面に5条の櫛形平行文。口端部内外面横ナゲし、口縁部外面下半は縦位の刷毛調整。内面上半は丁寧な横位のヘラ磨き、下半は横位の刷毛調整後ヘラ磨き。
	甕	29-13~17	(3)口縁部は強く外反して短くのび端部は内傾して外上方に拡張。内外面とも横ナゲ(4)・(5)口縁部は強く外反し短くのび端部は内傾し上方に拡張する。屈曲部外面には粘土紐を貼付けその上に刻目を施す。口縁部内外面横ナゲ、体部外面は縦位の刷毛調整。体部内面は縦位(4) 横位(5)の刷毛調整。(6)口縁部はわずかに立上った後内反して短くのび端部は丸くおさめる。口縁部内外面横ナゲ、体部外面横位の細かい刷毛調整後縦位のヘラ磨き。体部内面は横位のヘラ削り。(7)口縁部外面には4条の退化凹線。体部はなで寫を呈す。口縁部内外面横ナゲ、体部内面横位のヘラ削り。
	高 坏	29-30 —22~24	(2)底部底面は円板充填法をとる。外面縦位のヘラ磨き、内面は横位のヘラ削り。(3)外面刷毛調整痕を残し、端部は横ナゲ。内面ヘラ削り。(4)脚部外面にはヘラ状工具による条線を施す。外面及び端部は横ナゲ、内面は横位のヘラ削り。
	鉢	30-36~38	口縁部は強く屈曲し短くのび、端部はやや内傾しわずかに上下に拡張する。外面及び口縁部内面横ナゲし、体部内面ヘラ削り。
赤 土 器	壺	29-6~12	(6)口縁部はく字状に外反してのび、端部は矩形を呈する。体部・肩部分がわずかに屈曲しほぼ球形であり、丸底を呈す。口縁部内外面横ナゲ、体部外面縦位、斜位の刷毛調整。内面屈曲部に指頭玉痕を残し体部から底部にかけヘラ削りする。口径12.2cm、器高17cm。(7)口縁部はゆるく外反して上方にのび、端部はわずかに尖る。口縁部内外面横ナゲし、体部内面はヘラ削りする。(8)・(9)口縁部はゆるく外反してのび、端部は丸くおさめる。外面は横ナゲ、内面は口縁部が横位の刷毛調整、体部ヘラ削りする。(10)~(12)小型品で体部はほぼ球形を呈すもの(10・12)と中位が張るもの(11)がある。外面刷毛調整、内面ヘラ削り。
	甕	29-18~21	(8)~(9)口縁部はく字状に屈曲してほぼ直線的にのび、端部はわずかに上方につまみ上げる。口縁部内外面横ナゲ、体部外面縦位に刷毛調整。体部内面は頸部直下までヘラ削り。(10)口縁部はゆるく外反した後屈曲してほぼ直立して立上り、端部は肥厚し内傾する。口縁部内外面横ナゲ。
	高 坏	30-25~33	(2)S底部はほぼ平坦であり、底部より体部にかけて屈曲し、体部は直線的に外上方に開く。S体部内外面には横位の刷毛調整痕を残し、杯底部内面はナゲ。口径17cm。(2)~(3)脚柱部はやや長脚化し筒状を呈し、裾部にかけて強く屈曲して開く。脚柱部外面を刷毛調整するもの(27・30)、ヘラナゲするもの(28・31)、ヘラ磨きするもの(29・32)があり、内面は全てヘラ削り。
	戲形器台	30-35	器高は口径に比して低くなり柱状部も短く扁平化する。口縁部及び脚端部にかけて

		はやや内湾して強く外方へ広がり、端部はやや屈曲して丸みをもつ。口縁部外面及び脚部外面は横位にヘラ磨き、柱状部外面は横ナデ。内面は上半部横ナデ、下半部ヘラ削り。口径19.5cm、器高10cm、脚端径16.7cm。	
鉢	30-39・40	口縁部は二重口縁となり強く外傾するもの(3)とほぼ直立するもの(4)がある。外面横ナデ、内面ヘラ削り。	
埴	30-41・42	外面下部はヘラ削り、内面は横位(4) 縦位(2)のヘラ磨き。	
須 志	坏 置	30-44	天井部と口縁部との境界はやや外方に突出し明瞭な線をなす。口端部内面には段を有す。内面横ナデ、外面口縁部横ナデ、天井部ヘラ削り。
器	土 罎	30-43	長さ3.9cm、直径2.9cm、重さ25.1g。

SD 09

		<p>(1)・(2)口縁部ラッパ状に外反し、外面に数条の貼付け凸帯を廻し、横ナデの後刻みを施す。外面は縦刷毛、内面は横位の丁寧なヘラ磨き。(3)縦く外反する短い頸部から内傾する口縁部にうつり端部を上下に拡張、端面に3条の浅い凹線を廻し、斜方向の刻みをもつ。頸部中位外面は縦位の刷毛目。(5)・(6)内傾気味に深く立上る二重口縁の大型蓋で、器壁も厚く口縁部に凹線を廻らすもの(5)と横ナデで終えるもの(6)があり、共に頸部には帯歯状工具による羽状文が施され、(6)はヘラ先によるしっかりとした沈線がそれを区画する様に廻っている。外面は縦位・斜位の細かな刷毛目、肩部下方向横位の刷毛目を、内面は押玉による成形の後頸部から上半を横ナデで仕上げ、頸部下半から肩部にかけてラフなナデを行うが押玉痕を止め、肩部から下半にかけて横位のヘラ削りが施される。口径は(5)で20cm、(6)で24.4cmを測る。(8)頸部下半に帯歯状工具による刺突文を施す。(10)〜(13)横ナデにより仕上げられる。(12)は波状文の後沈線を1条めぐらせる。内面はヘラ削り。(14)〜(16)強い横ナデで外反気味の口縁部をもち、端部を丸く終え頸部直下までヘラ削りのみられるものもある。(18)〜(22)強く外反する二重口縁で、(21)は外面を横位の丁寧なヘラ磨き、他は横ナデで仕上げられている。(23)はほぼ直立する頸部から強く外反する口縁をもち、頸部外面に縦位の刷毛痕。他は丁寧な横ナデ、口径2.5cm、(24)内面は底部付近で横方向、肩部にかけて縦方向のヘラ削り、頸部屈曲部付近で横位のヘラ削り。頸部外面は明瞭な屈曲をみせ、器壁厚はほぼ均一。口径12.5cm、器高23.7cm、頸部径9.5cm、胴部最大径21.4cm。(25)口縁上部に焼成後の穿孔があり、口縁から肩部にかけて斜方向の刷毛目。(15)肩の張った胴部に直角に立上る頸部をつける。内面は刷毛調整で胴部に押玉痕を止め、外面に斜格子のカゴ編目痕跡がある。頸部径12.2cm、胴部最大径32.2cm。(33)〜(37)帯歯状工具等により裝飾されたもので、(38)が肩部の張りの強い直口蓋の他は二重口縁の屈曲部にクセをもち、口縁受け部はやや内湾気味で端部を外反するものが多い。全体を復元し得るものに欠くが、細片等からほぼ球形に近い胴部に不安定な平底をもつものが推定され、頸部は直立する円筒状で肩部との屈曲部に凸帯を廻らし帯歯状工具による波状文が施されている。波状文は2〜4条で口縁外面・肩部に施され、口縁屈曲部に円形浮文を配す。口縁内面、頸部、胴部には概して丁寧な縦位もしくは斜方向のヘラ磨きが施される。口径約22〜28cm、頸部径約8〜13.4cm、頸部から口端部までの高さ約9cm。(39)は口径10cm、頸部径9.4cm、頸部から口端部までの高さ4cm。(40)肩部から強く外反する頸部との屈曲部に太い凸帯をもち、帯歯状工具で刺突を施す。外面縦位の刷毛目の後、縦方向のヘラ磨きが施されている。</p>
壺	31-36 -1~40	

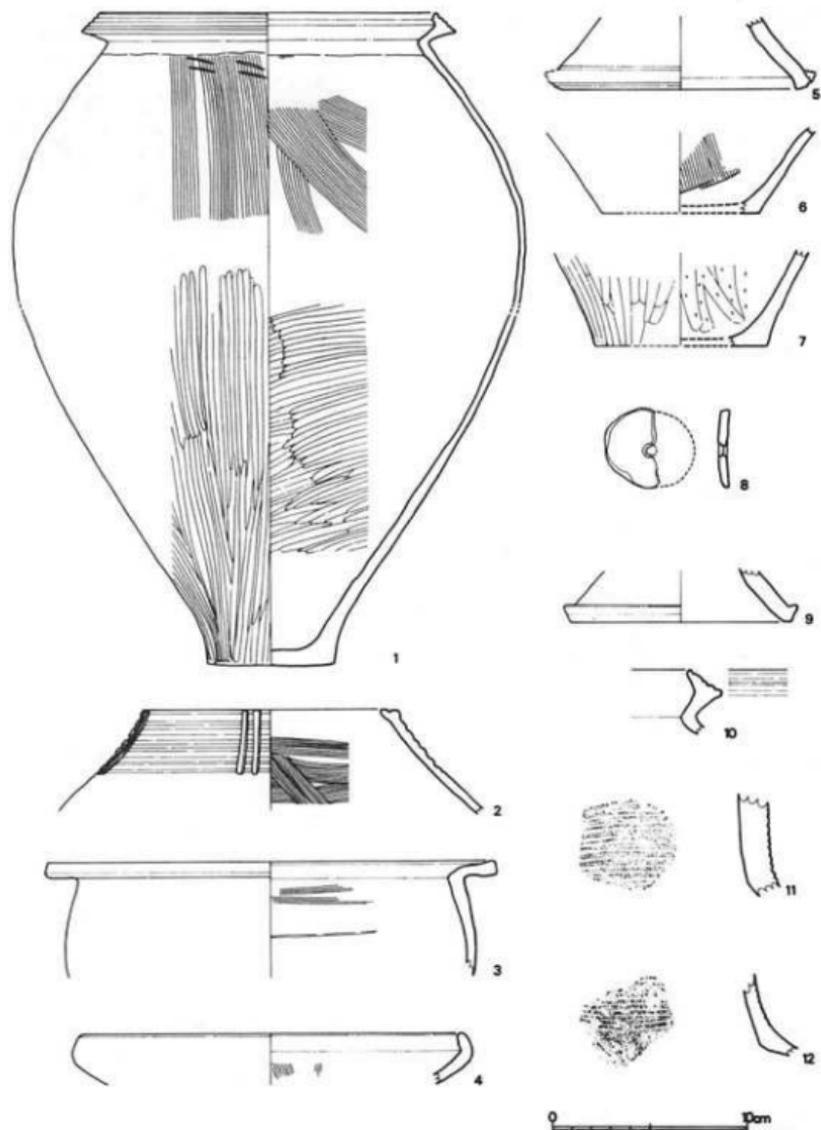
変	37-39 -41-70	(41)-(43)口徑に対し胴部の張りが未発達でくの字状に強く外反する口縁をつける。外面は縦位の細かな刷毛目、内面はヘラ磨き。(44)胴径にやや張りがみられ、内外ともヘラ磨きで、頸部内面でシャープな屈曲を行い、口端部は上下にやや拡張する。(45)蓋の可能性もあるが、口端部は上方に拡張し内傾する端面に退化した凹縁を廻らす。内外とも刷毛調整。(46)口端部が上方に拡張し、端面に凹縁を廻らす。胴部が強く張り鉢の可能性もある。外面縦刷毛の下に叩き痕を止める。(47)口径17.3cm、頸部径12.3cm、頸部屈曲部から口端部までの高さ1.8cm、(48)口径16.9cm、頸部径12.3cm、(49)口径16cm、頸部径11.7cm、胴部最大径21.7cm、器高23.4cm。(50)-(57)口径約14cm、頸部径10.5cm。(58)-(59)口径15cm、頸部径11.5cm。
		ぼぼ直線的な高坏受け部に対し浅い立上りは直立かやや内傾し、外面に退化した凹縁もしくは横ナデを施すもの(73-75)、端部が内外面に拡張肥厚させて平坦面に凹縁を施すもの(76)、内面の肥厚が消え外反するもの(77-79)等があり、受け部は(79)の内面放射状のものを除けば全て弧状ヘラ磨きが施されている。脚部は外面をヘラ磨きし内面にしぼり目を残置するラッパ状の端部をわずかに内側に肥厚させるもの(80, 81)、脚端部を上方につまみ出し長方形造し、ヘラ描き文をもつもの(82-83)、脚内面のヘラ削りが顕著に残り脚端部を上下に著しく肥厚させるもの(84-86)等がある。また(87)は器台の脚とも思われる。この他に坏部屈曲部で段を有し外反するもの(87)外面に暗文風ヘラ磨きをもつもの(88)短脚のもの(89)脚端部拡張のないもの(90)等がある。(91)は内外面とも比較的丁寧な横ナデで仕上げられており坏部の可能性もある。(92)坏部最大径30cm。(93)-(94)口径20cm。(95)脚高12.1cm、脚端部径13cm。(96)-(97)脚端部径12.8-15cm。(98)口径18.8cm。(99)口径19.5cm。(100)口径22cm、坏部高5.7cm。(101)脚高8cm、脚端部径15.5cm。
生	40-41 -71-99	上半部を欠き底径約16cm、最大胴径18.5cm。円盤状の底面に外傾気味の体部を巻付け、その上に上半部を被せた形をとる。各部分接合しつつ主にナデで荒く成形し、底面は一方向のラフな刷毛目、体部及び上部外面は縦及び斜方向の刷毛目で、内面は横位の刷毛目を残す。底部内面は螺旋状の刷毛目の後、丁寧にナデで仕上げる。刷毛は同一の板小口状工具を使用したもので、窓部はいびつな二等辺三角形を呈する。口端部は外方に傾く平坦面をもち、2列の円形竹管文が廻る。内外とも顕著な二次焼成痕は認められないものの外面底部付近に細かな亀裂が断続的にみられる。
高 坏	41-100	(101)口端部は上下に拡張、内傾し5条の凹縁を廻らせる。数条の縦位のヘラ先による線紋を配し、その間に円形竹管文を施す。(102)-(104)小型で口端部を上方に拡張、横ナデもしくは沈線・円形竹管文を配するものもある。前者は内面弧状ヘラ磨き、後者は丁寧に横ナデで、(104)は屈曲部下方に内開きの円孔を4つ配す。(105)-(108)鈺形器台で口縁部立上りは深く段も比較的しっかりしている。内外面とも横位の丁寧なヘラ磨き。(109)口径37cm。(110)口径9.9cm、底部径11.5cm、器高8.2cm。胎土、焼成共良好の薄手の小型器台で、口端部を横ナデでわずかに上方につまみ上げている。脚部内面接合部にはしぼり目を残すが丁寧にナデしており、外面は細かな不定方向のヘラ磨きが施されている。明赤褐色を呈している。
器 台	42-101-110	中空であり、上部でV字状に開く長さ約12.5-13cmの突起をもつ。全面に二次焼成痕がみられる。器壁の厚さは約1.4-2.3cm。底径10.7-11cm、器高約12.5cm。
支 脚	42-111	内外面を押しで成形後外面に叩きを施し、脚部は押し気味のナデで作出す。石英・長石等の砂粒を多く含み、外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈す。底部径4.1cm、器壁の厚さ0.6cm。
製 土 器	42-113	

鉢	43-114~120 44-121・122 ・130	<p>大型のもの(114~118)と小型のもの(119・120)に分かれ、前者は器壁も分厚く口縁部付近でクセをもつ。口縁部は内外面へ拡張する。外面は縦位の刷毛、内面は縦もしくは斜方向の丁寧なヘラ磨き。後者はその小型のもので同時期の高坏と同様な口縁をもち、内外面に弧状ヘラ磨きを行うが、坏受け部が深く(120)にみられる様な平底を呈す。(121)・(122)は口縁部の上方拡張の著しい二重口縁状を呈し口縁端部に平坦面をもつ。共に口縁内外面は横ナデで丁寧に仕上げ、内面は肩部付近まで横位のヘラ削りを施す。外面は縦位(121)、また横位の刷毛目の上に縦方向の時文風ヘラ磨きを施す(122)。(119)口径18.2cm。(121)口径35.4cm。(122)口径41.9cm。(130)は小型で器高6.8cm、口径10.6cm、器壁厚4.3cmを測る。全体に押玉で成形後ナデる。</p>
埴	44-123~129	<p>肌状を呈すものとボール状を呈すものがあるが、外面を底部付近もしくは口縁部立上り直下付近までヘラ削りし、それを残置したままで内面及び口縁部外面にかけ丁寧なナデ、横ナデ仕上げである。口縁部は丸く終えるもの他、内傾するもの(125)、平坦面をもつもの(123)などがみられる。(123)~(125)口径15~17.8cm、器高5.4~7.3cm、器壁厚約4mmを測る。</p>

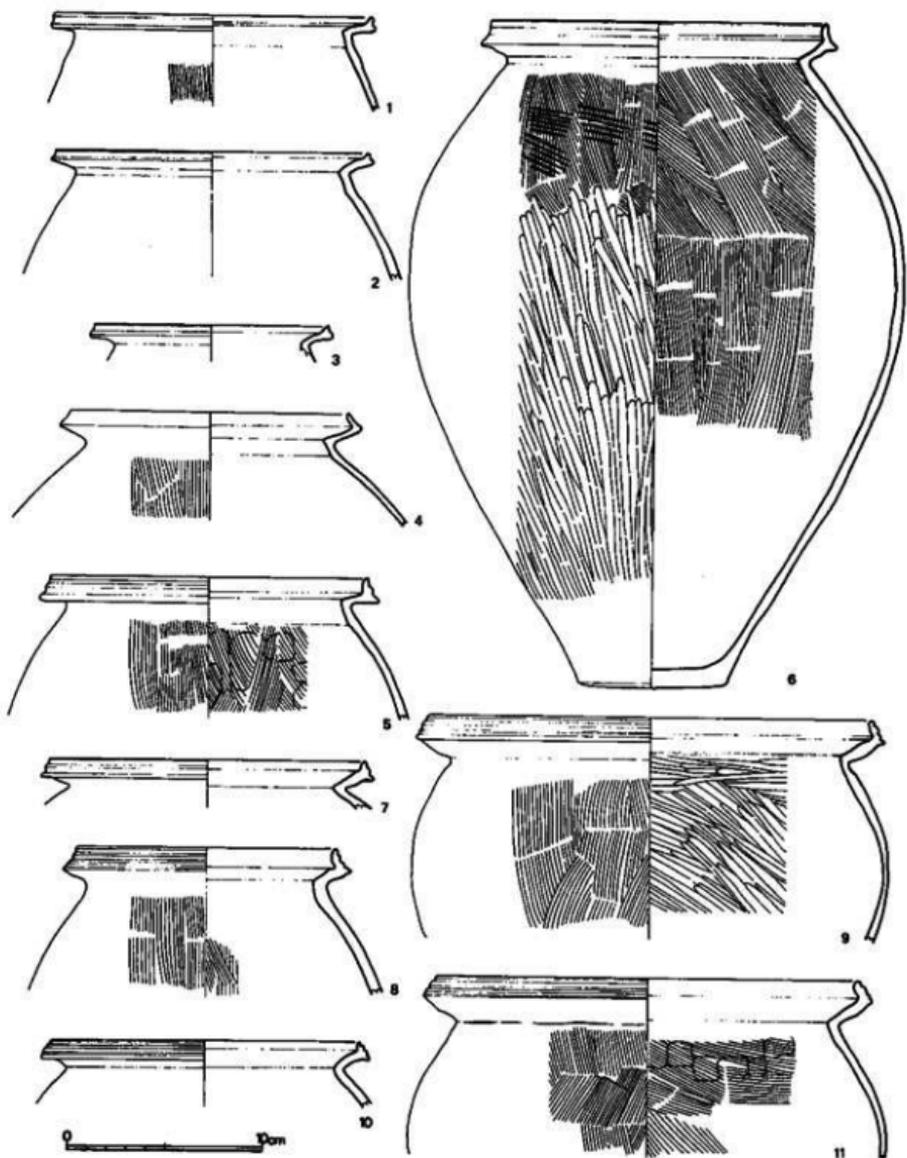
付2 出土石器計測表

番号	種別	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	石材	備考	出土地点
1	石 鏃	2.4	1.8	1.15	安山岩	打製	A-SB13
2	石 鏃	(3.2)	(1.3)	1.35	*	*	A-SK14
3	石 鏃	1.5	1.3	0.4	*	*	A-SD21
4	*	2.2	1.7	1.1	*	*	*
5	石 鏃	(2.6)	(2.0)	3.1	*	*	*
6	石 鏃	2.9	1.3	1.4	*	*	*
7	*	(2.5)	(1.3)	0.85	*	*	A-SB22
8	石 斧	(4.1)	(6.3)	253.85	閃緑岩	磨製	*
9	*	(8.1)	(6.5)	406.6	*	*	*
10	石 庖丁	(7.2)	(4.9)	40.5	砂粒礫岩	*	A-SD42
11	不整形石器	4.5	3.1	11.6	安山岩	打製	B-SB01
12	*	(1.5)	2.5	2.1	*	*	*
13	石 鏃	3.9	2.0	2.6	*	*	*
14	不整形石器	3.3	3.5	5.6	*	*	*
15	石 斧	6.7	2.4	135.2	砂質粘板岩	磨製	*
16	石 鏃	(2.5)	1.7	1.0	安山岩	打製	C-SD15
17	石 鏃	1.8	(1.3)	0.55	*	*	*
18	*	2.6	1.7	0.9	*	*	*
19	石 斧	(9.0)	4.4	119.0	粘板岩	磨製	D-SD02
20	石 鏃	(2.3)	(1.3)	1.0	安山岩	打製	E-SD02

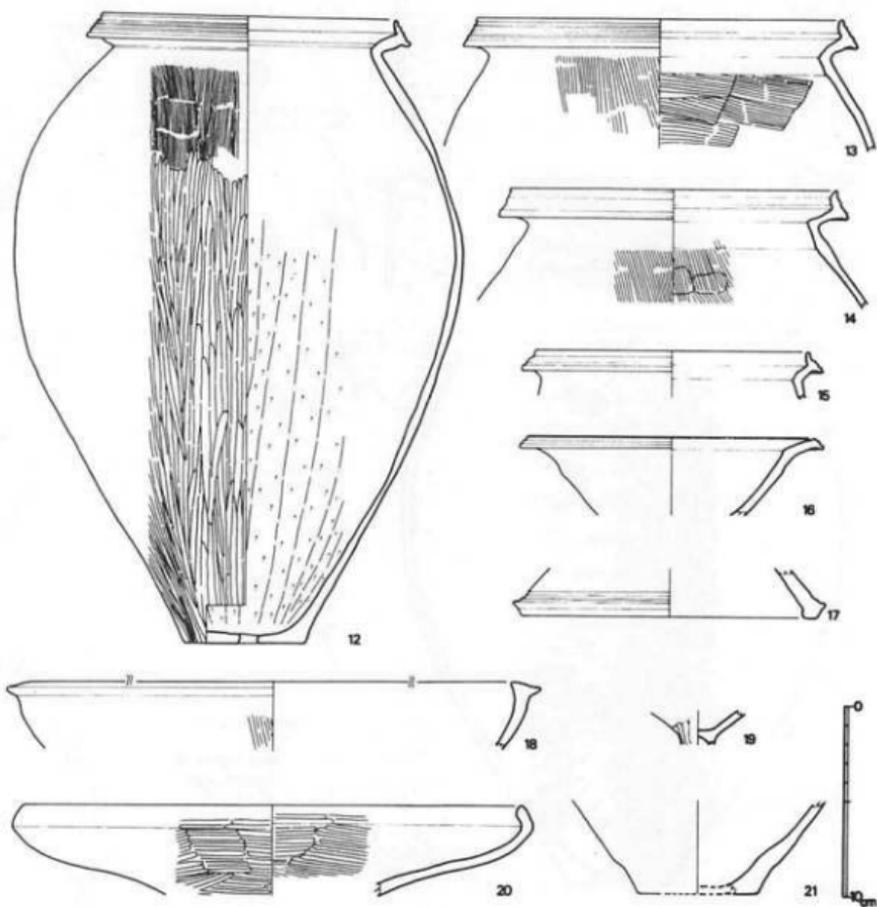
番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	備考	出土地点
21	石 燧	1.9	(1.5)	0.85	安山岩	打 製	E-S D02
22	◊	1.8	(1.3)	0.5	◊	◊	◊
23	◊	2.3	1.7	0.95	◊	◊	◊
24	石 庖 丁	(6.1)	3.7	33.25	◊	◊	E-S D08
25	不整形石器	(5.5)	4.1	15.05	◊	◊	E-S D09
26	◊	(3.8)	(3.6)	25.3	◊	◊	◊
27	◊	(3.2)	2.2	3.3	◊	◊	◊



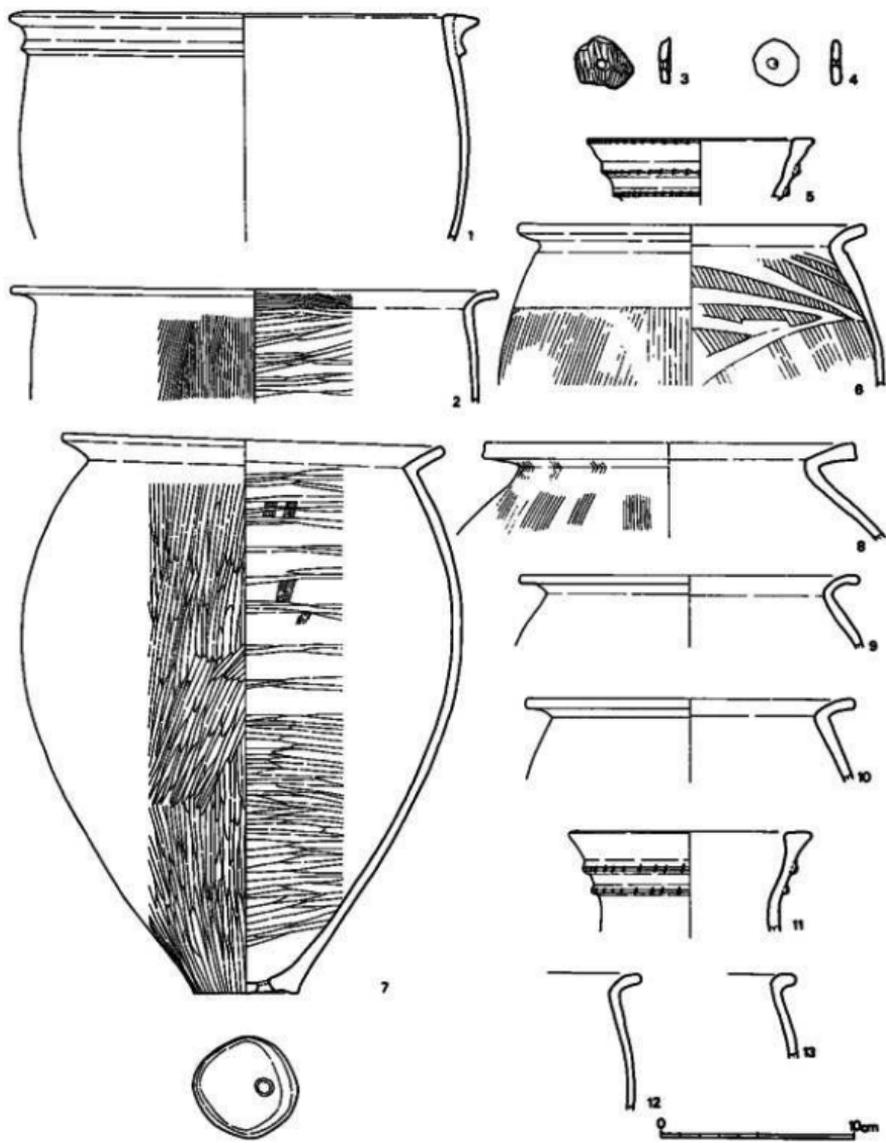
第 20 图 A地点SK12, SB13, SK14-15出土物实测图(1:3)



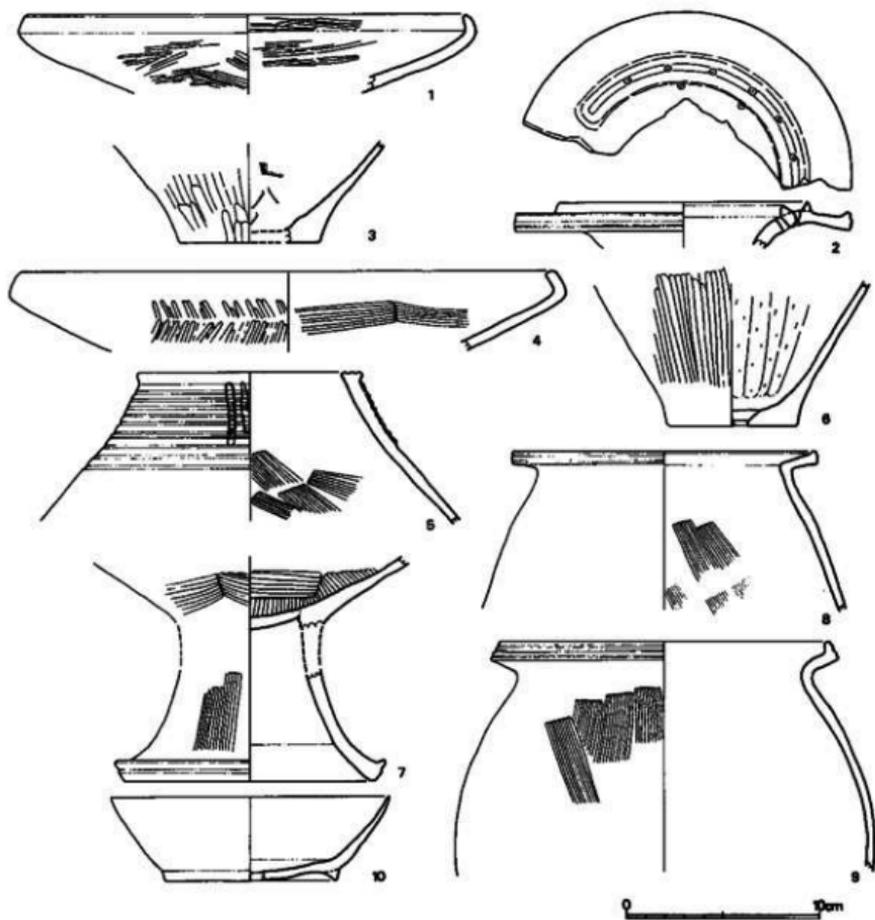
第21圖 A地点S D 21出土遺物実測図(1) (1:3)



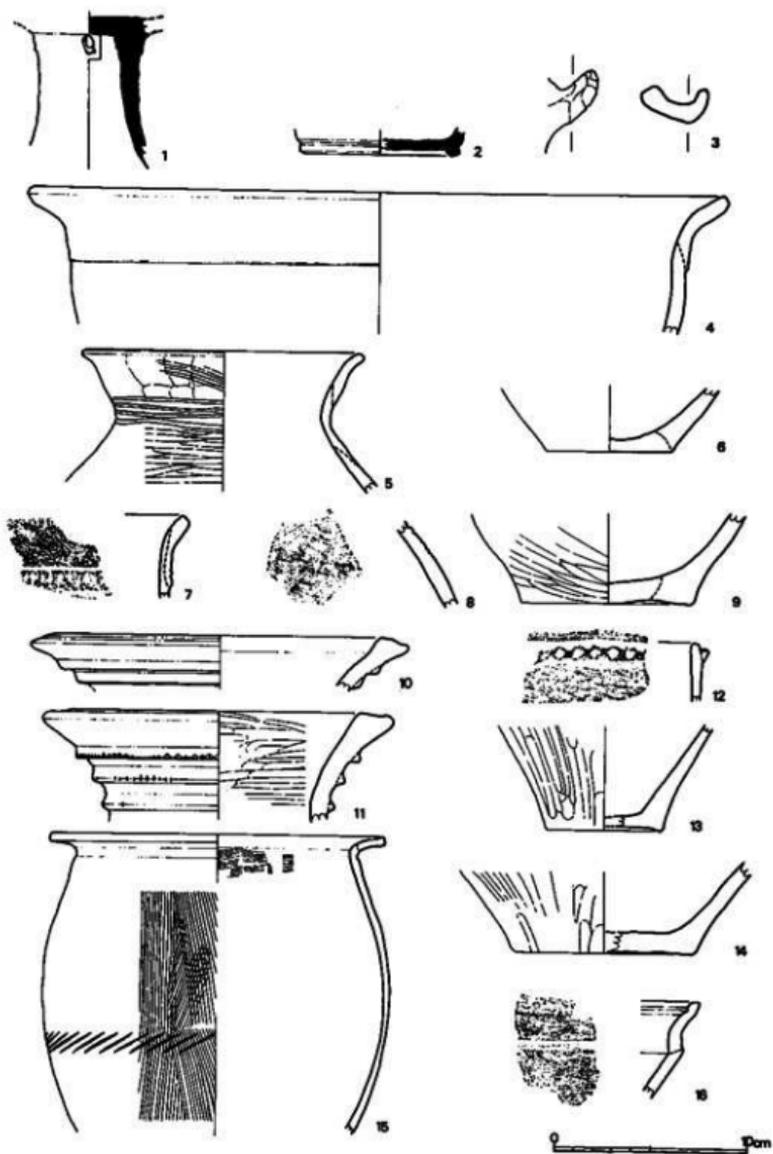
第 22 图 A 地点 S D 21 出土遗物实测图(II) (1:3)



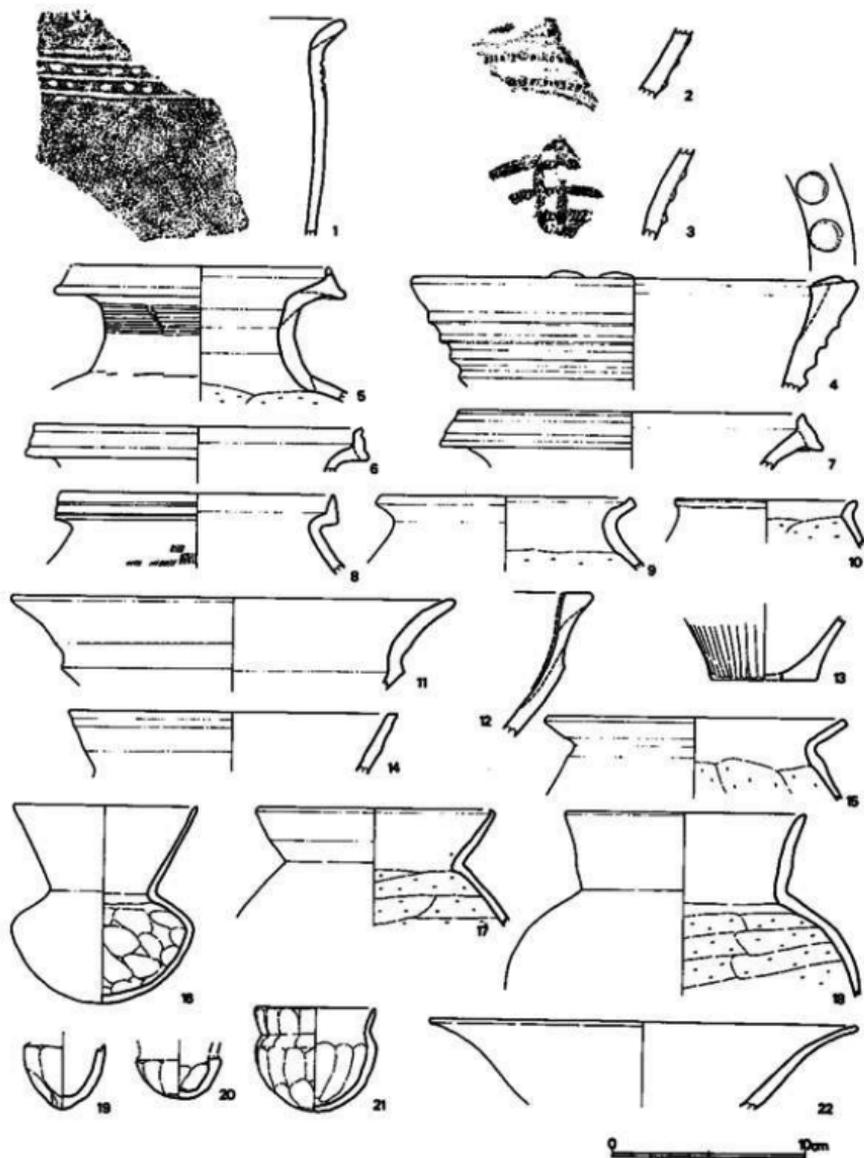
第23图 A地点SD 23·24, SK 25出土器物实测图(1:3)



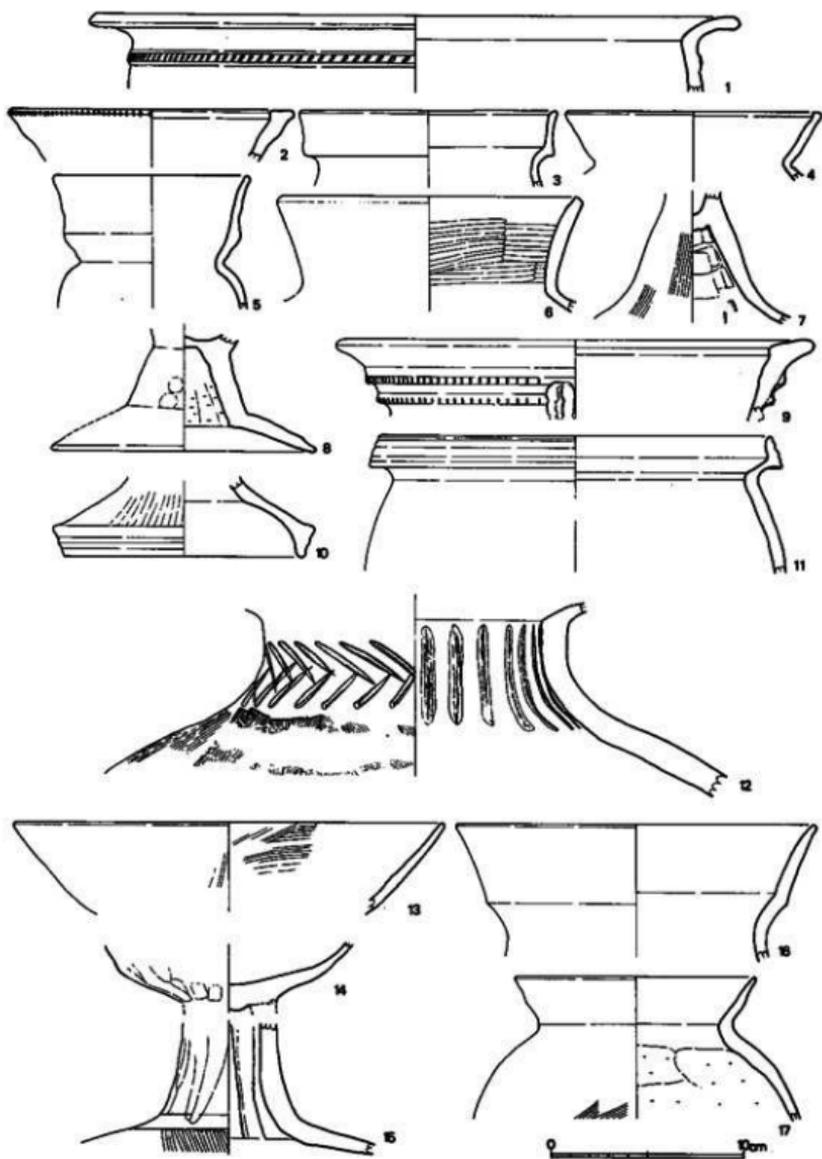
第24图 A地点SX 40·SK 41出土遗物实测图(1:3)



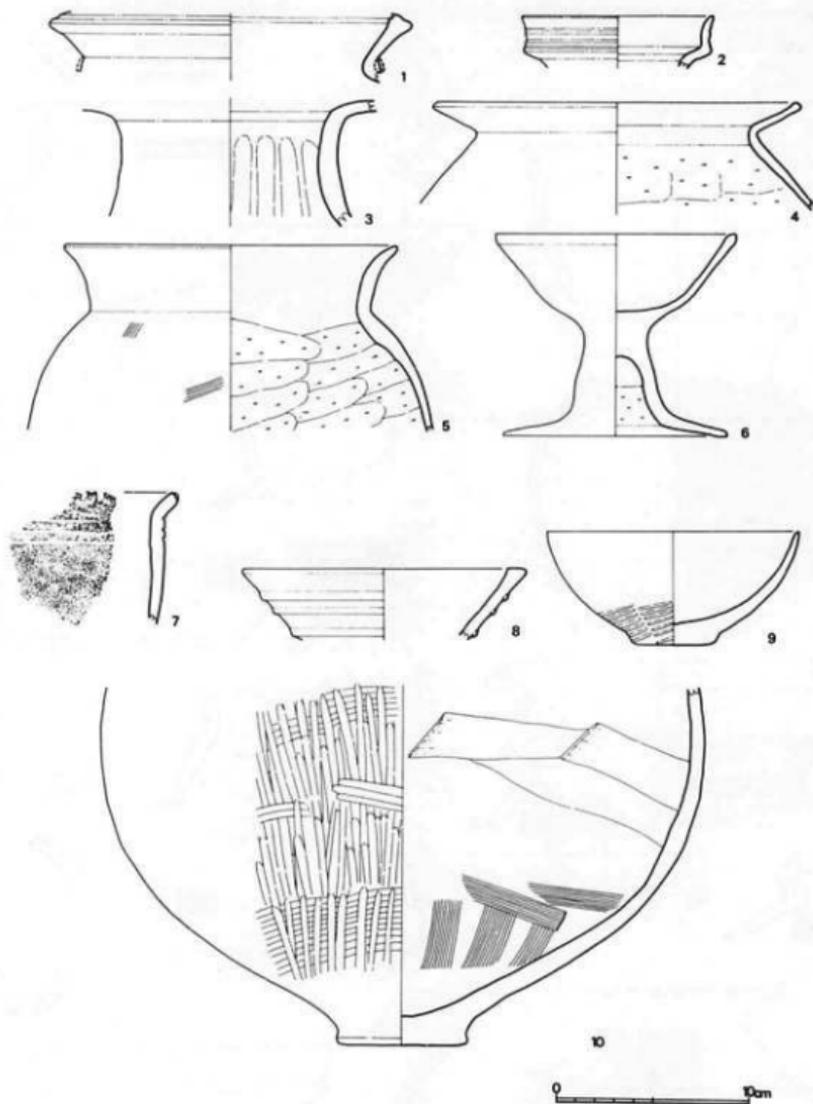
第25图 C地点S D 01·03·09·11·12出土遗物实测图(1:3)



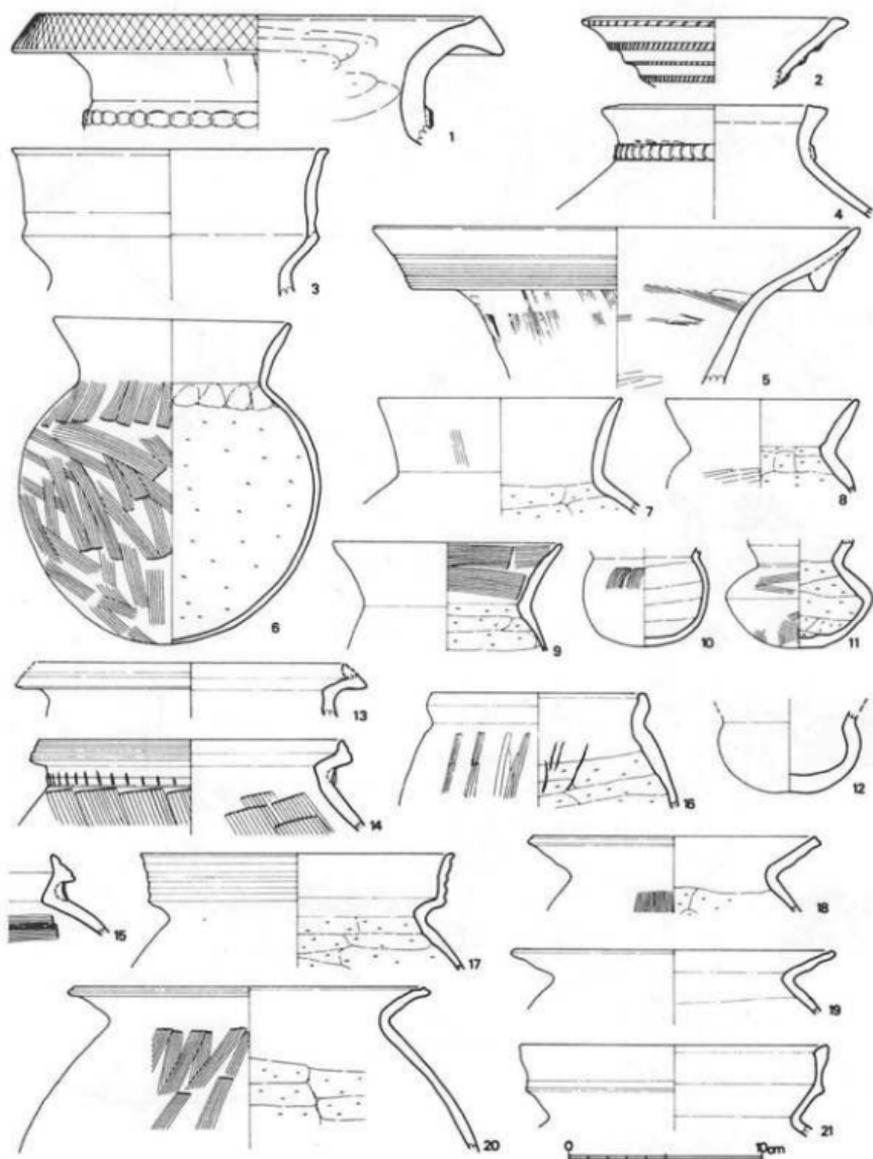
第26图 E地点S D 02出土遗物实测图(1:3)



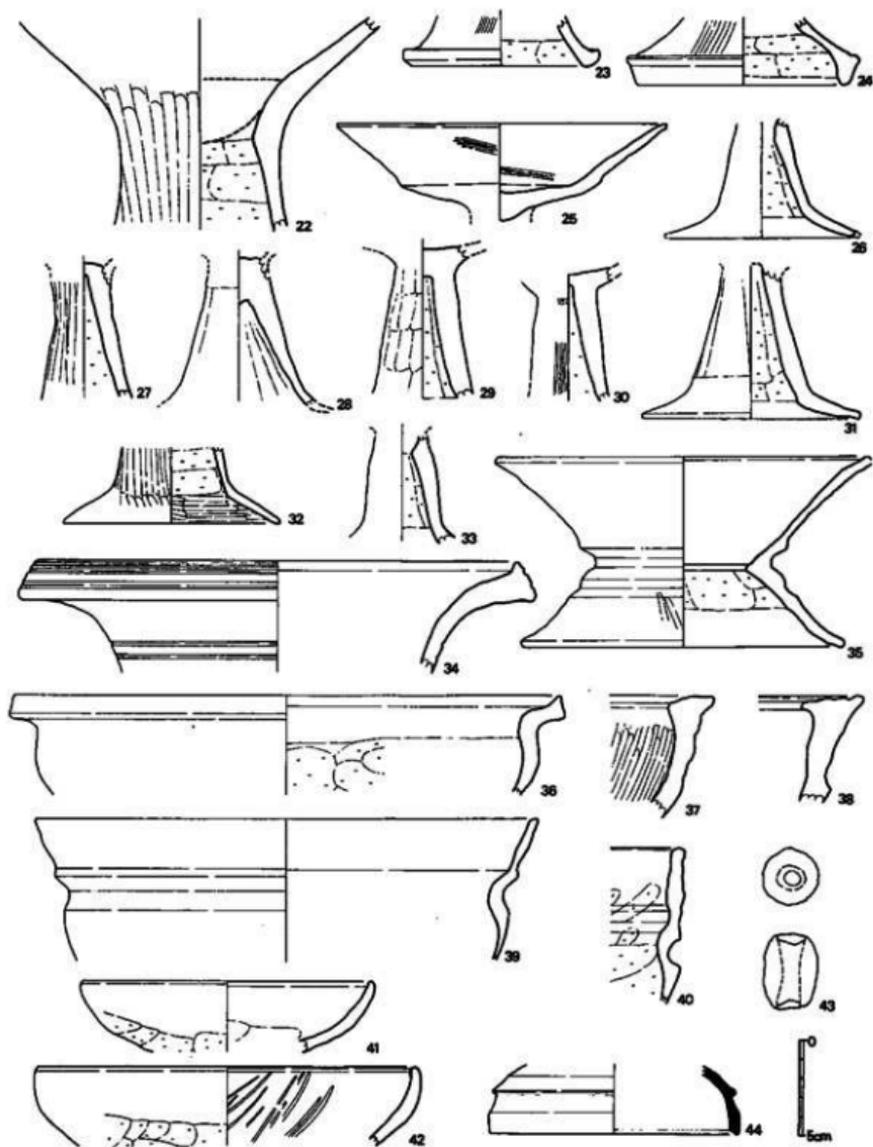
第 27 图 E 地点 S D 04 · 05 出土遗物实测图 (1:3)



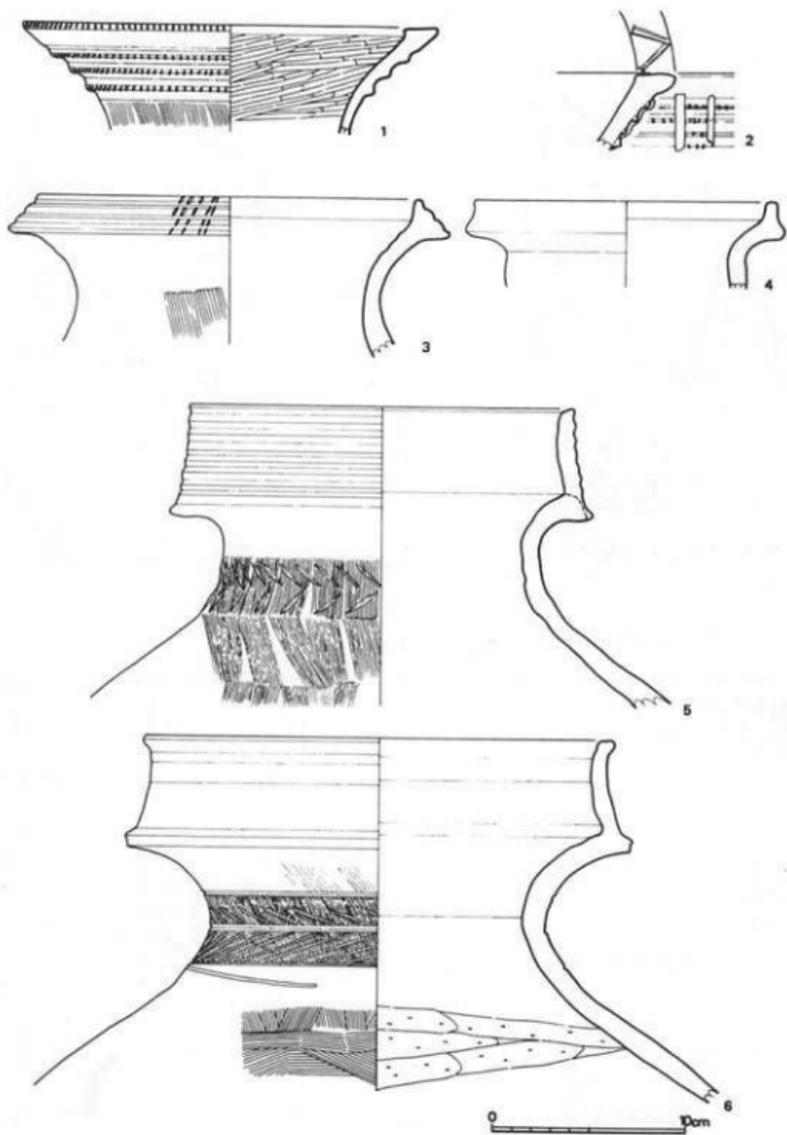
第 28 图 E 地点 S D 06 · 07 出土遗物实测图 (1:3)



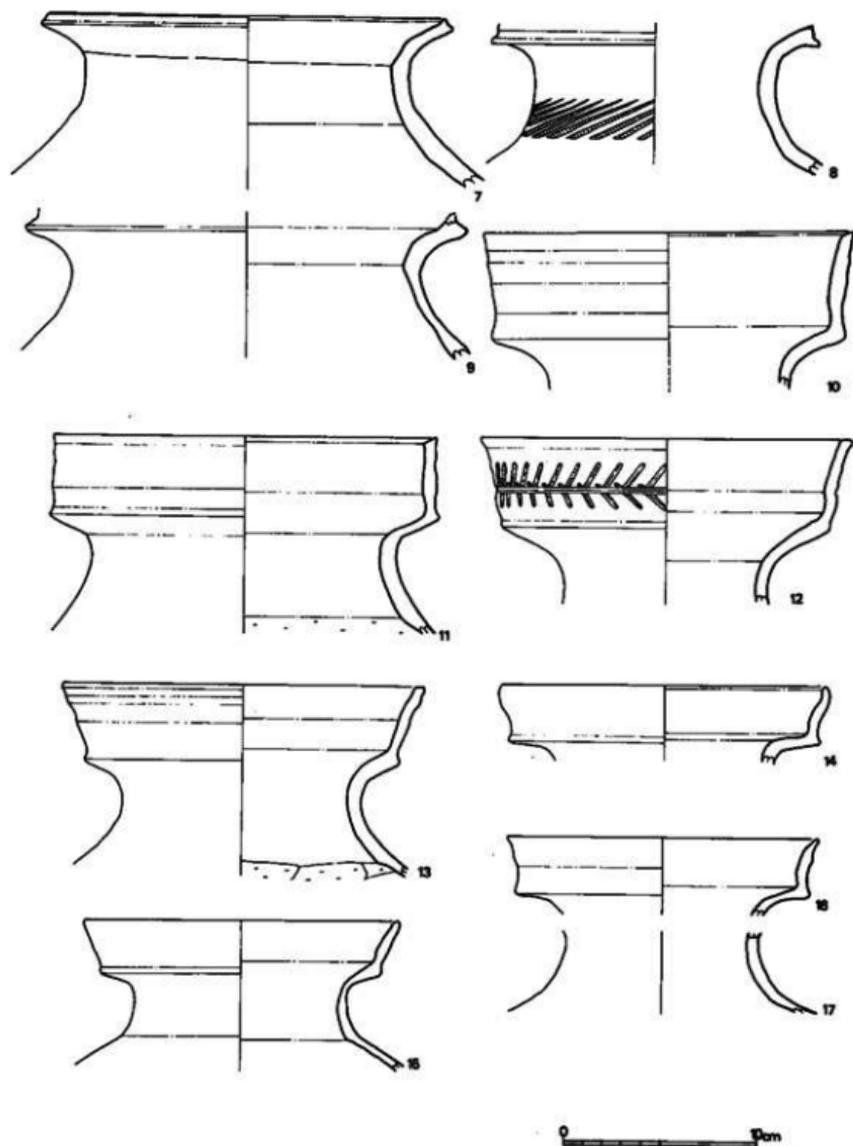
第29图 E地点S D 08出土遗物实测图(1) (1:3)



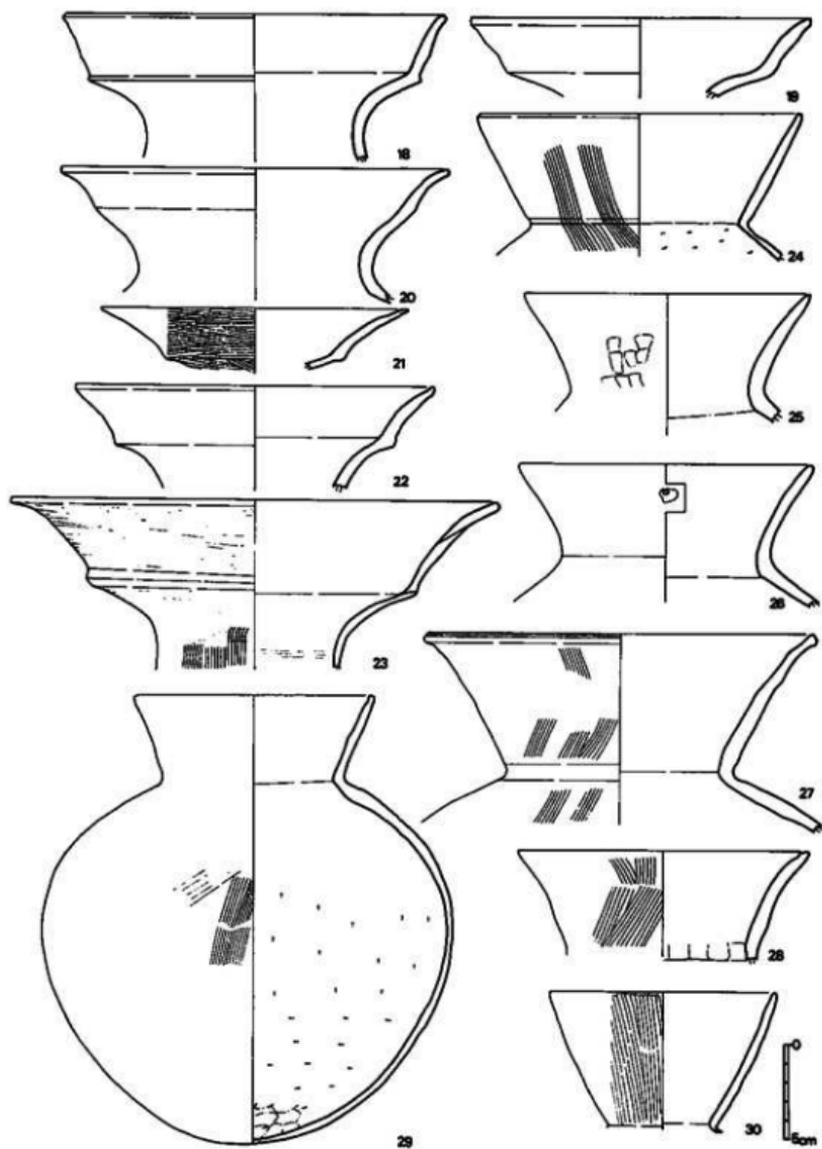
第30圖 E地点S D 08出土遺物實測圖(Ⅱ)(1:3)



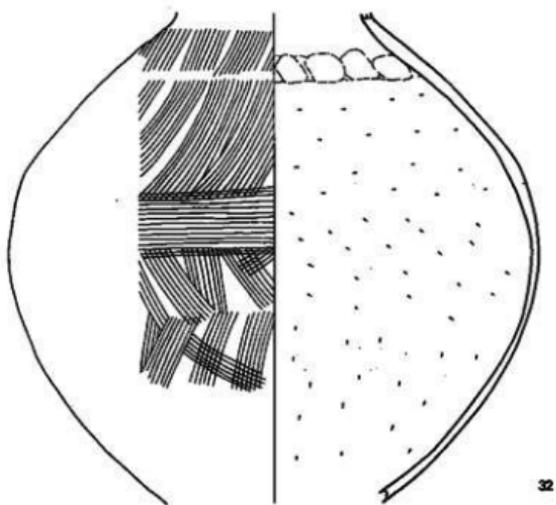
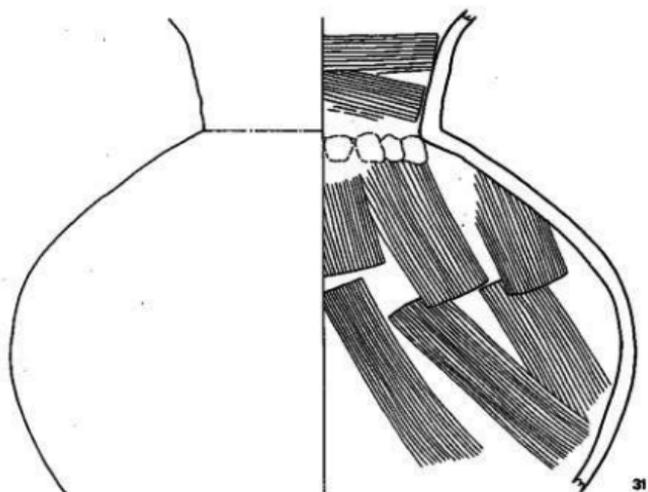
第 31 圖 E 地点 S D 09 出土遺物實測圖 (I) (1:3)



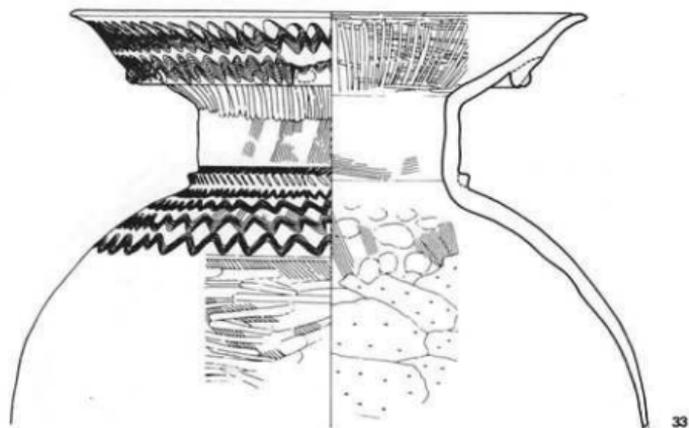
第32图 E地点S D 09出土遗物实测图(II) (1:3)



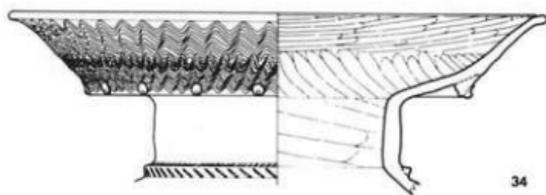
第33圖 E地点S D 09出土遺物実測図(Ⅱ)(1:3)



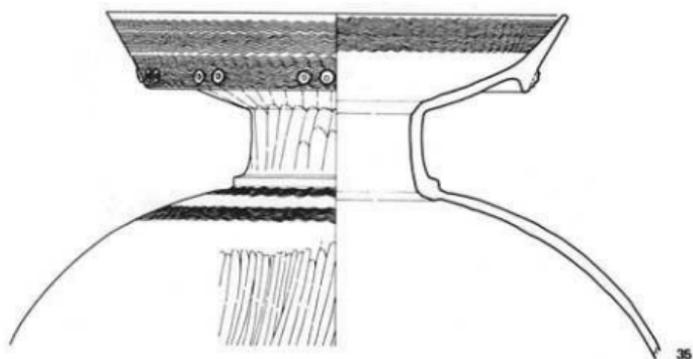
第34圖 E地点S D 09出土遺物實測圖(IV) (1:3)



33



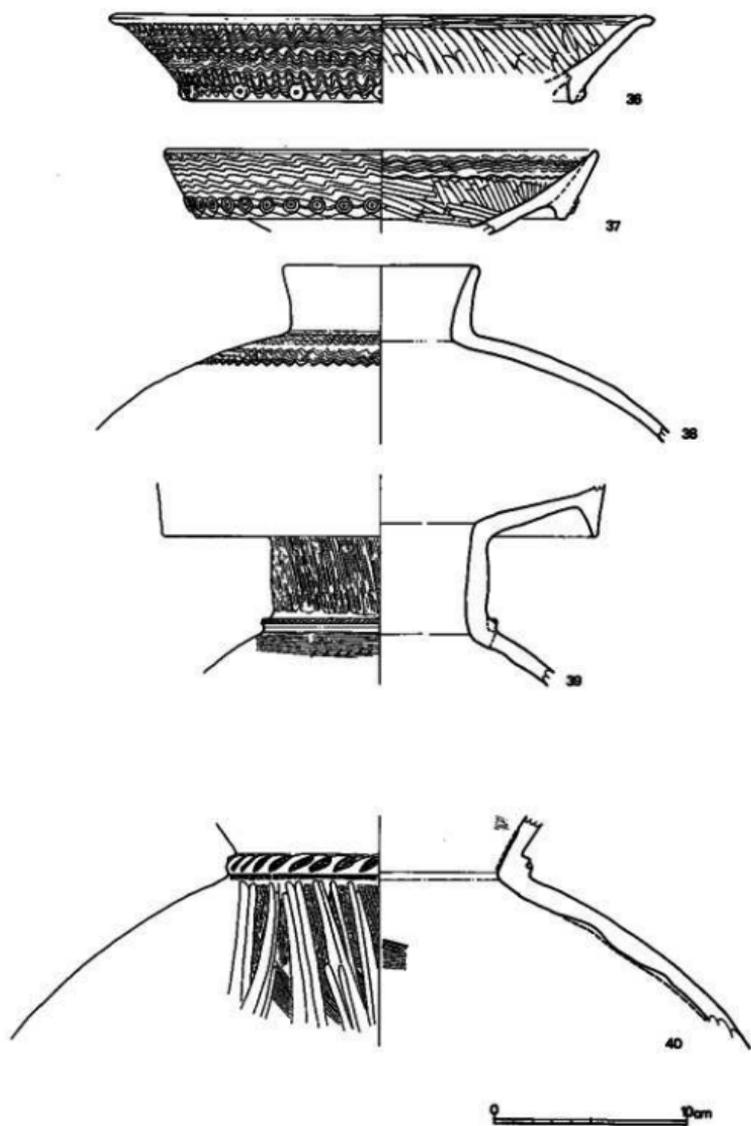
34



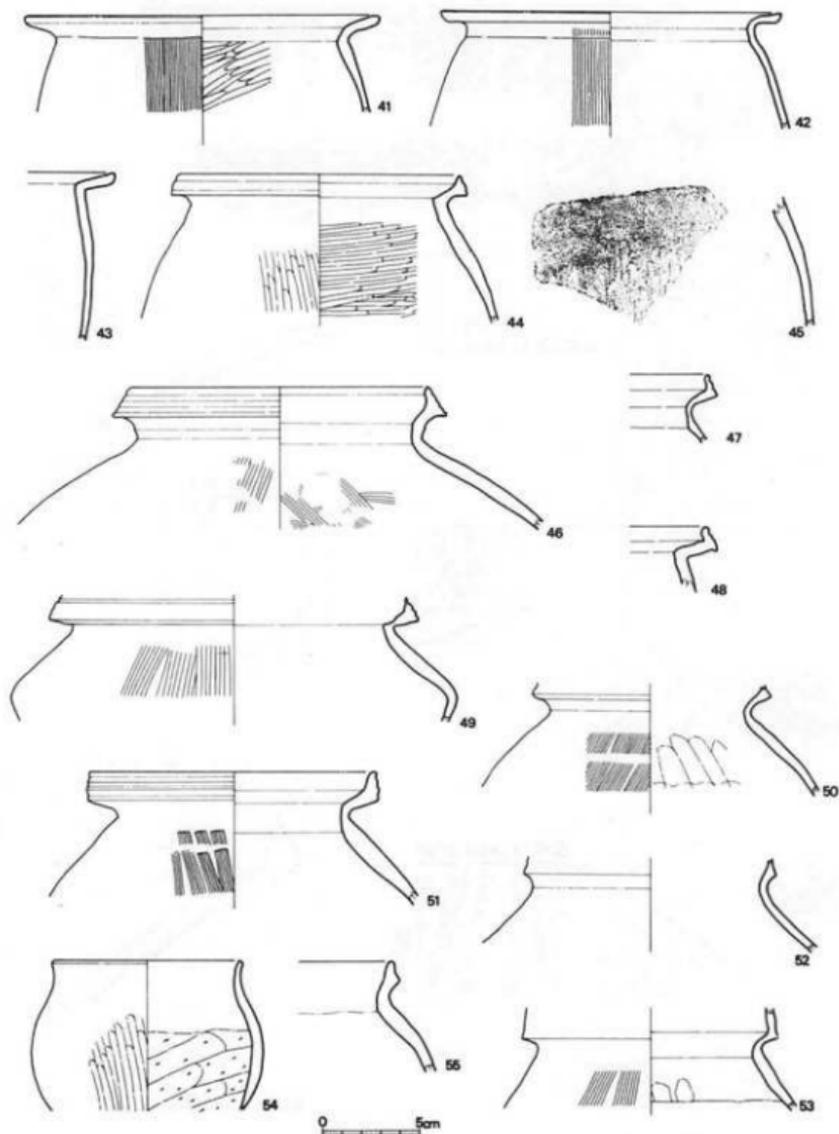
35



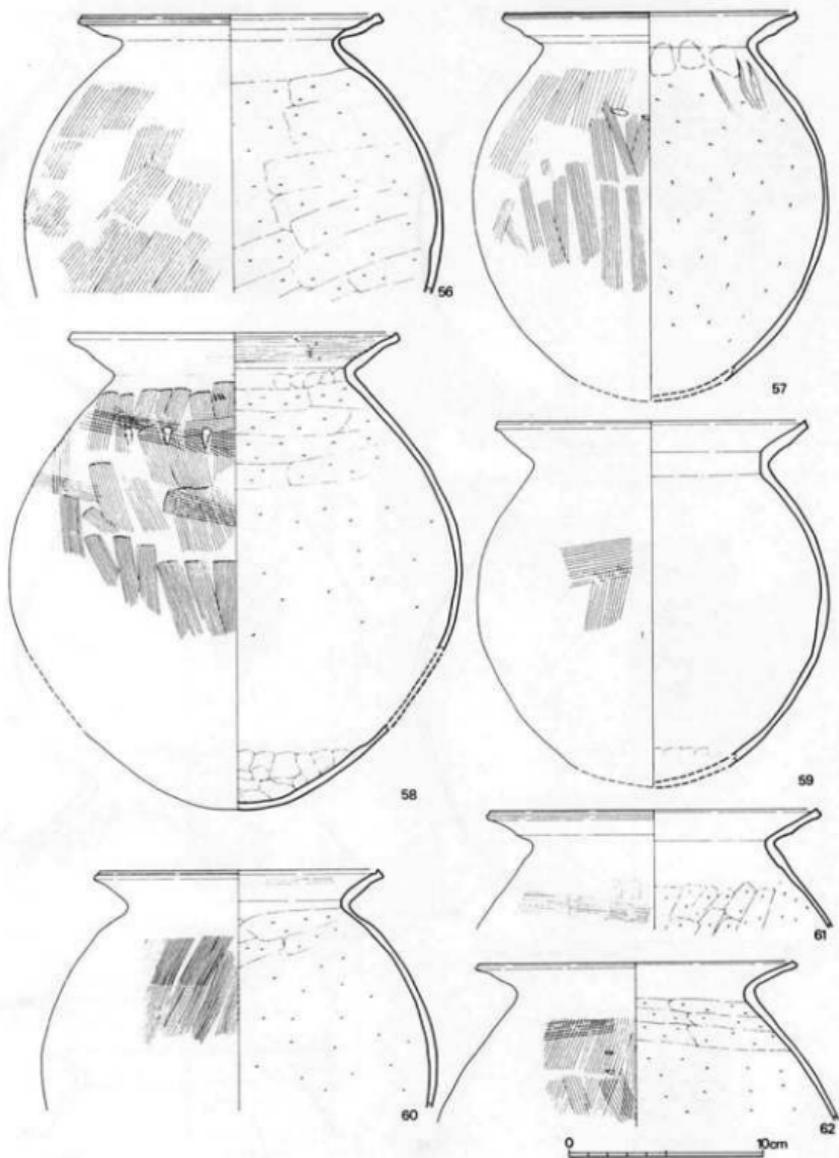
第 35 图 E 地点 S D 09 出土遗物实测图 (V) (1:3)



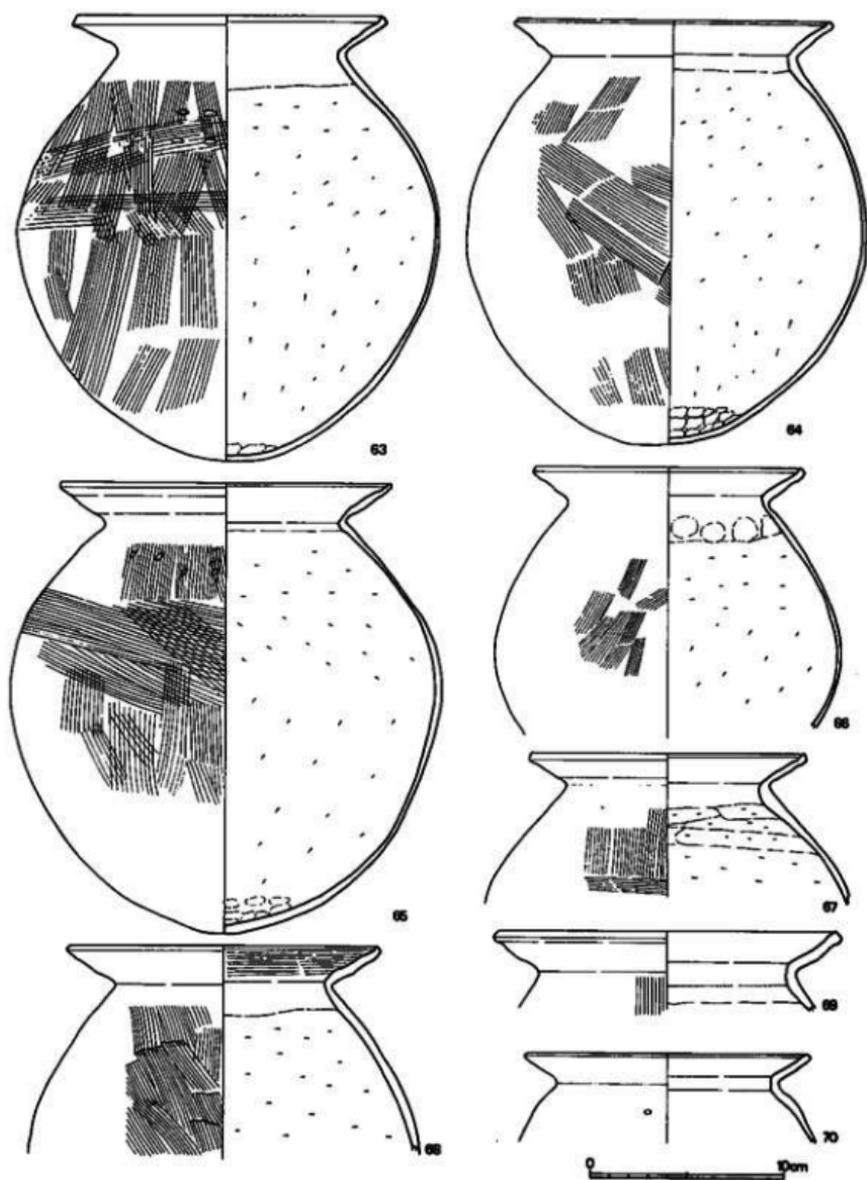
第36图 E地点S D 09出土遗物实测图(VI)(1:3)



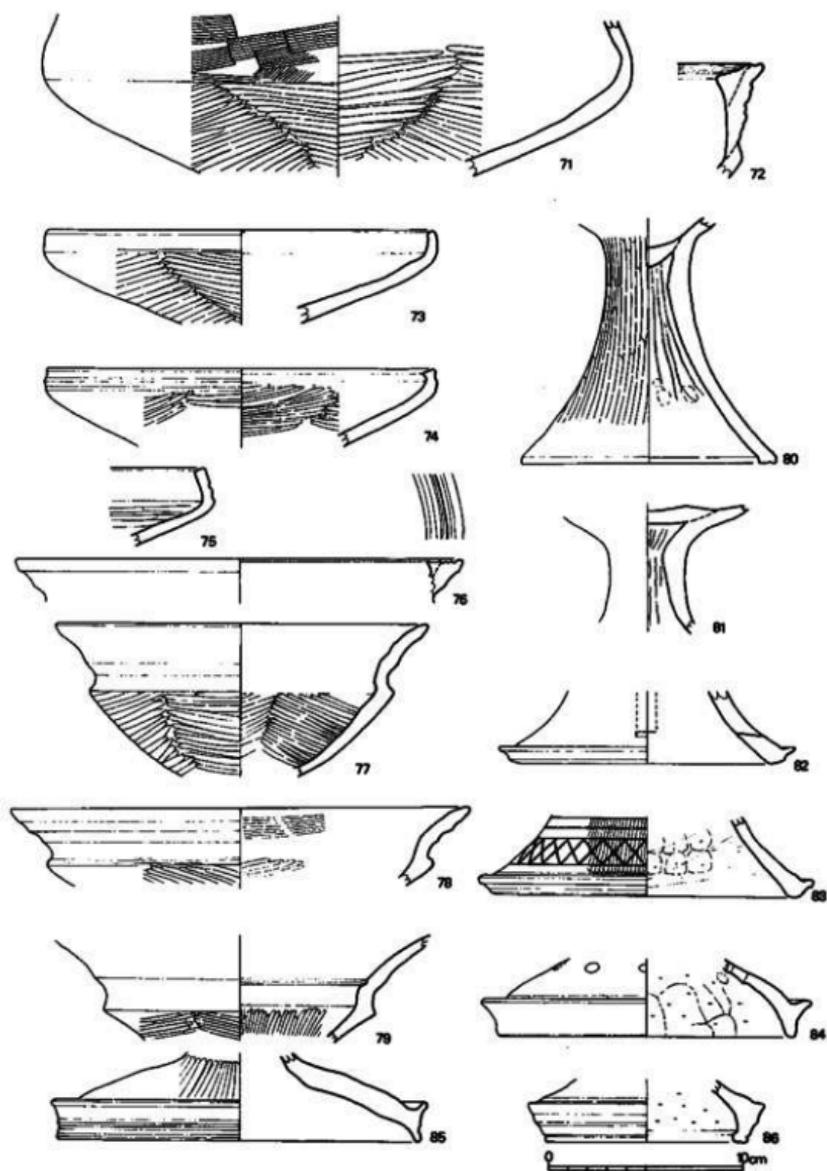
第37图 E地点S D 09出土遗物实测图(Ⅳ)(1:3)



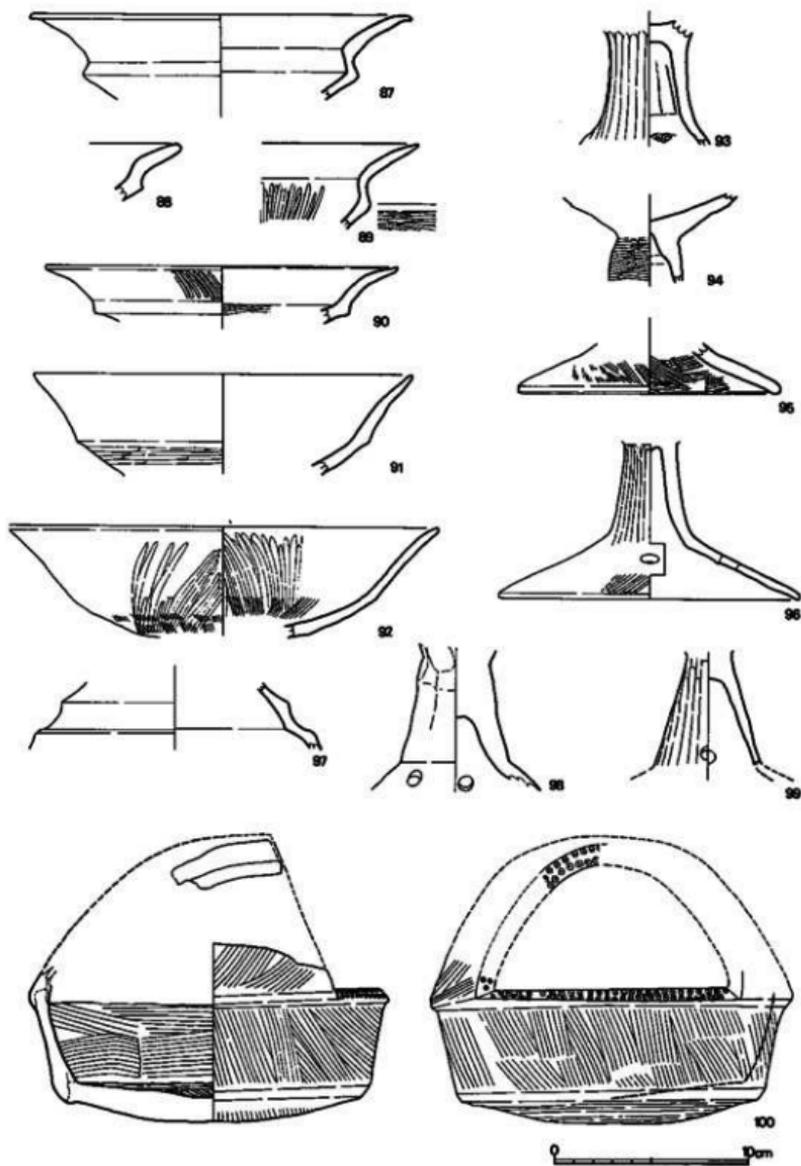
第38圖 E地点S D 09出土遺物実測図(Ⅷ)(1:3)



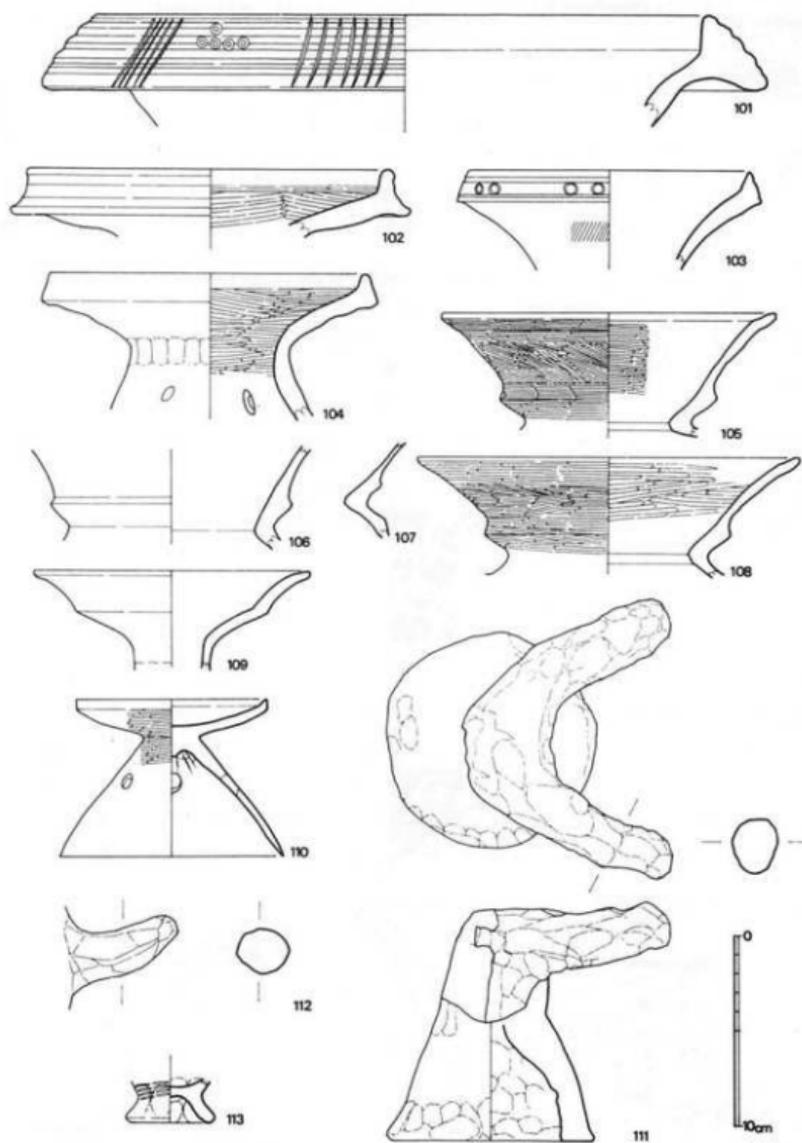
第39圖 E地点S D 09出土遺物実測図(X) (1:3)



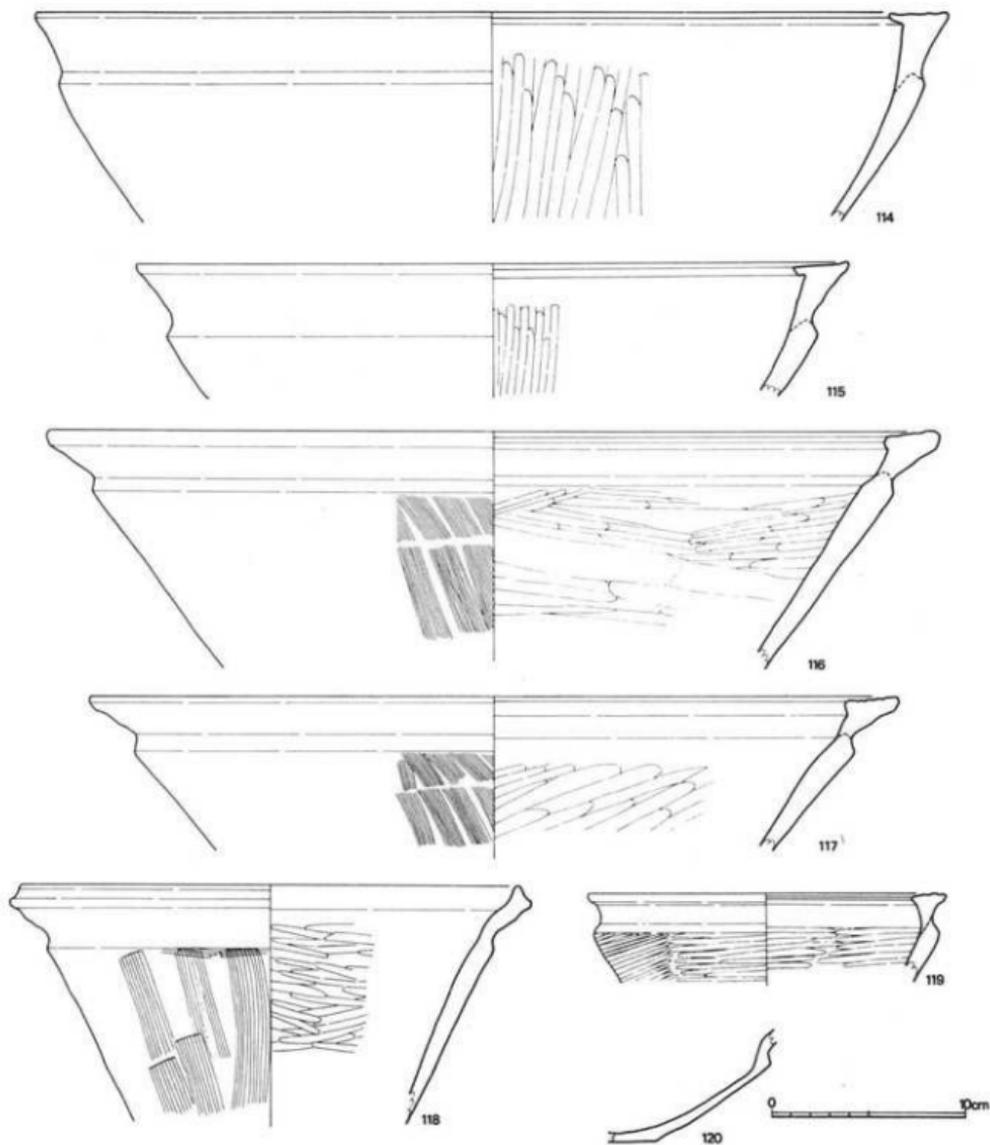
第40圖 E 地点 S D 09 出土遺物実測図 (X) (1:3)



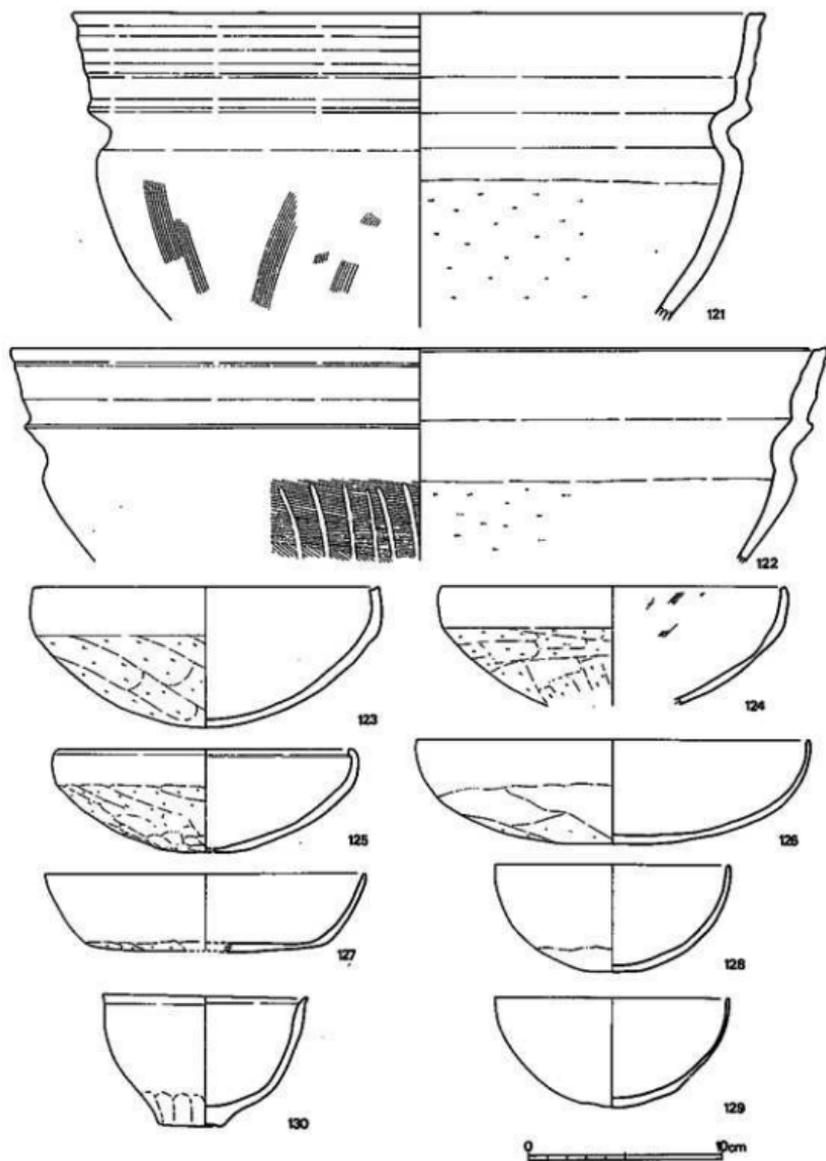
第41圖 E地点S D 09出土遺物実測図(XI)(1:3)



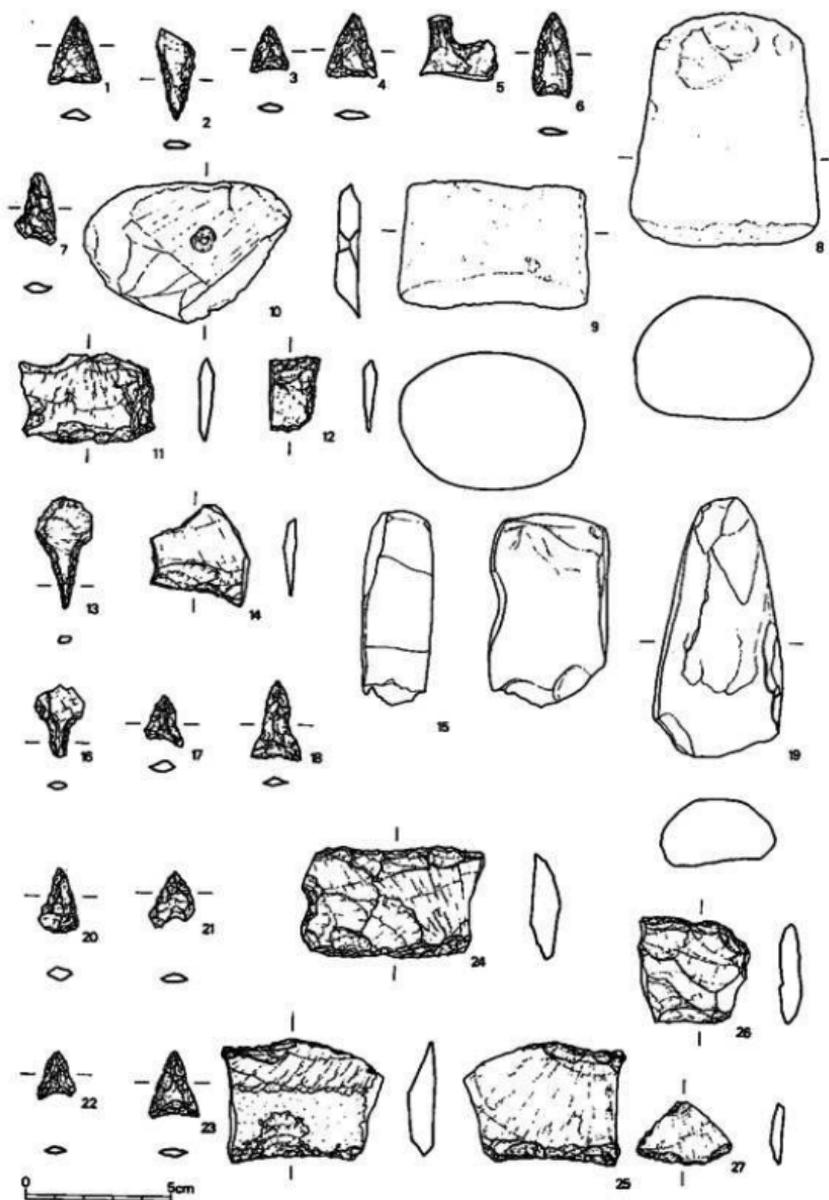
第42图 E地点S D 09出土遗物实测图(M)(1:3)



第 43 图 E 地点 S D 09 出土遗物实测图 (Ⅷ) (1:3)



第44图 E地点S D 09出土遗物实测图 (XIV) (1:3)



第45圖 井原線出土石器実測図(1:2)



遺跡遠景（南より）



遺跡遠景（南より）



A地点S K01~05全景(西より)



A地点S K01(西より)



A地点S K02(西より)



A地点S K03(西より)



A地点S K 03遺物出土状態



A地点S K 04(東より)



A地点S K05(西より)



A地点S D06(北より)



A地点SB07(東より)



A地点SK11(南より)



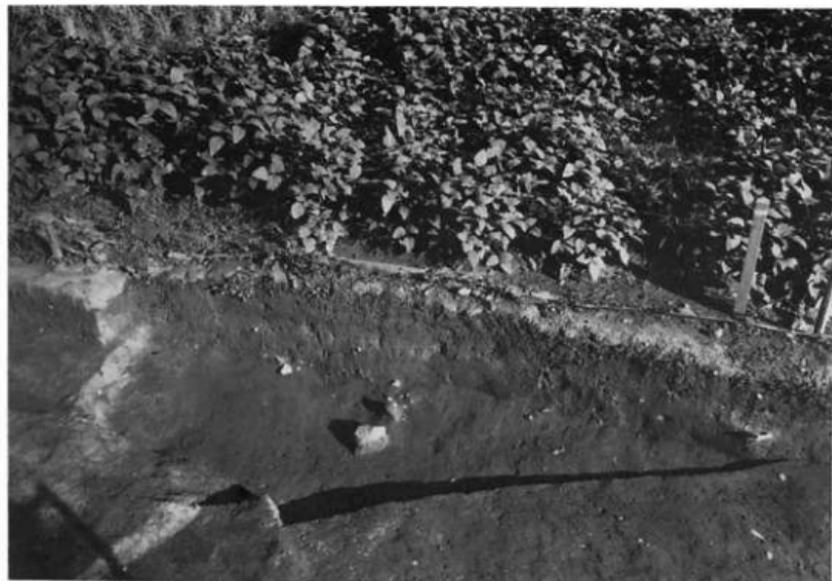
A地点SK12(東より)



同上 遺物出土状態



A地点SB13(東より)



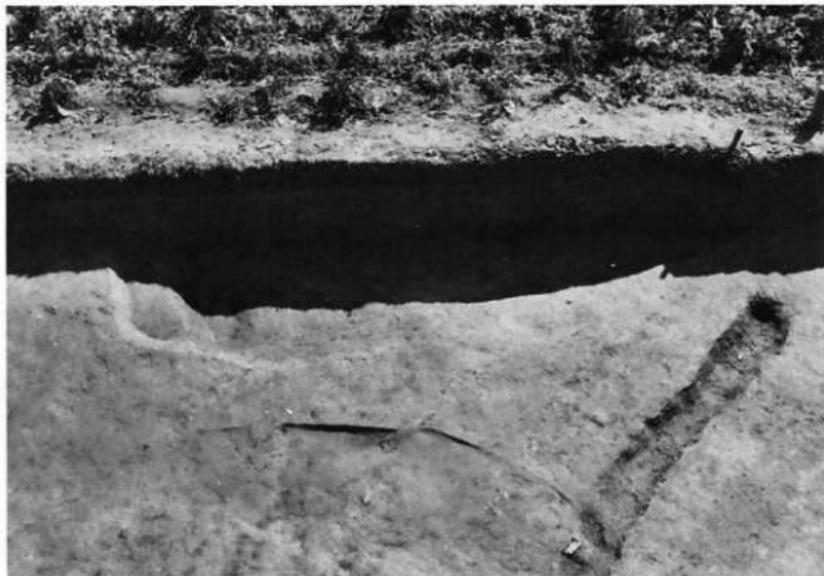
A地点SK14・15(北より)



A地点S D 16(西より)



A地点S B 17(南より)



A地点SB18(北より)



A地点SD20(西より)



A地点SD21(西より)



同上 遺物出土状態



A地点S D21遺物出土状態



同上



A地点SB22(東より)



A地点SK25(北より)



A地点S D 26・27(北より)



A地点S D 28(南より)



A地点S D29(北より)



A地点36G遺構全景(西より)



A地点S K 30~38(東より)



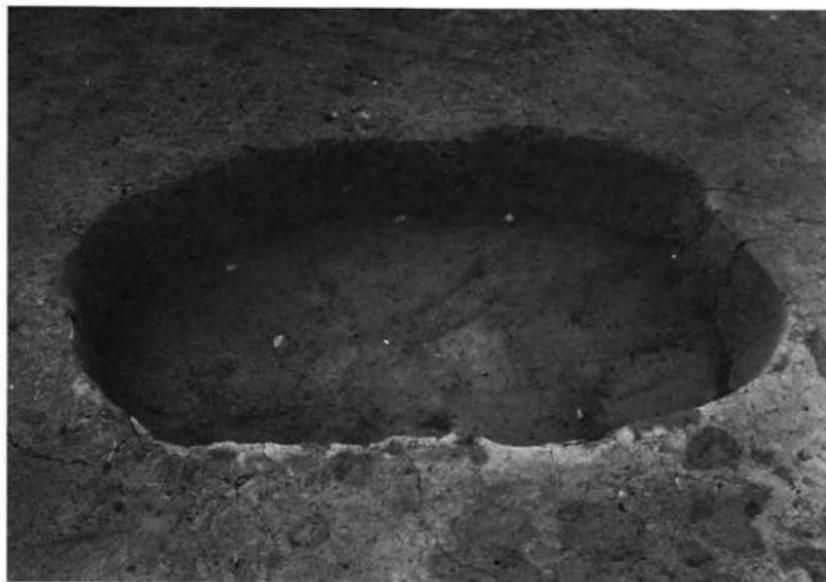
A地点S K 30(西より)



A地点S K31(北より)



A地点S K32(南より)



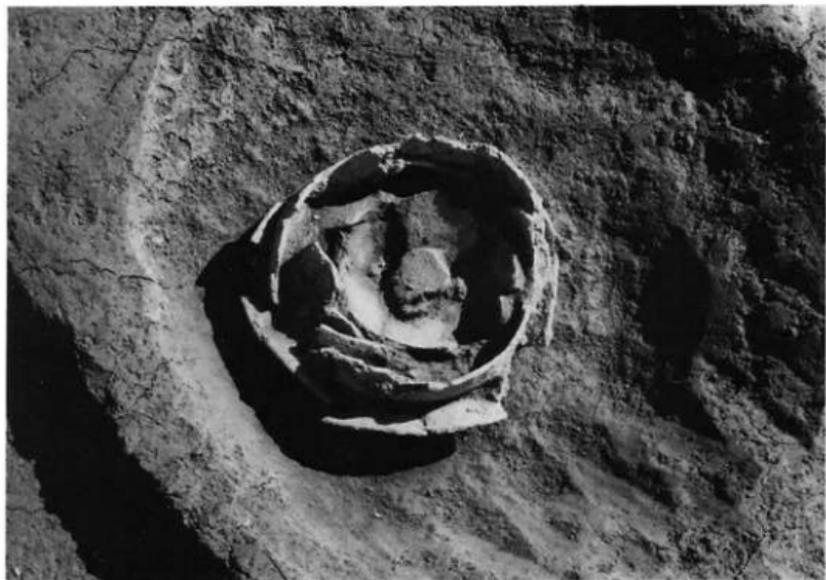
A地点SK33(東より)



A地点SD34(西より)



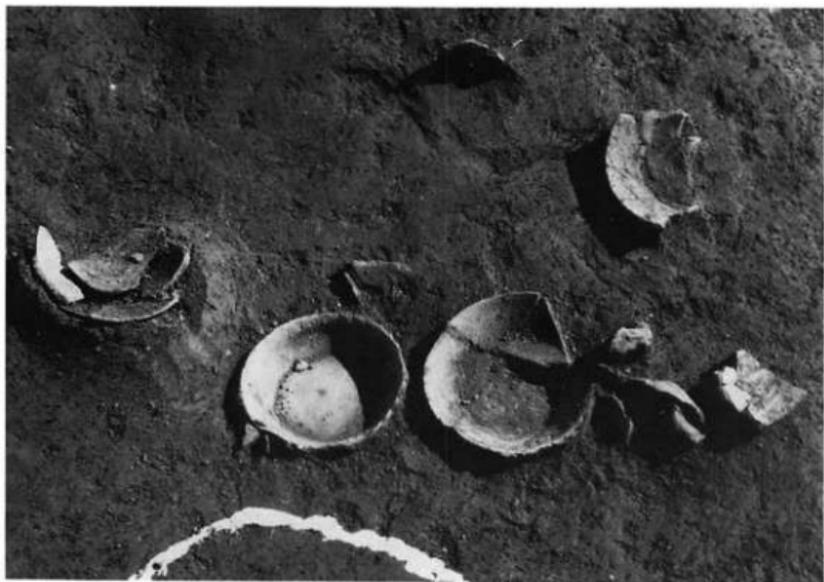
A 地点 S X 35



A 地点 S X 36



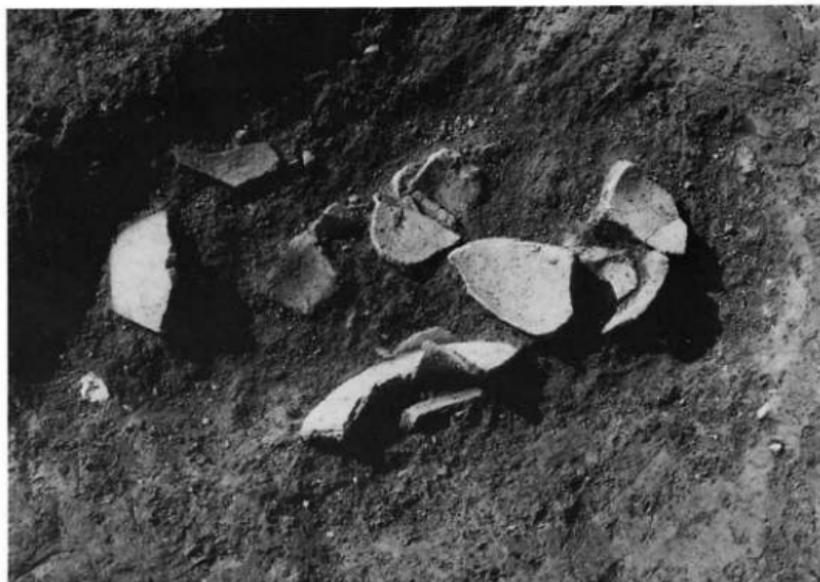
A地点S K 38(東より)



A地点S X 39



A 地点 S X 40



A 地点 SK 41 (西より)



B地点遺構全景(東より)



B地点SB01(東より)



B地点S D02(北より)



B地点S D03(北より)



C地点SD01(北より)



C地点SD02(北より)



C地点S D03(北より)



C地点S D04~06(北より)



C地点SK07(南より)



C地点SD08(北より)



C地点SD09(北より)



C地点SD10(西より)



C地点SD11(南より)



C地点SD12(北より)



C地点SD15(東より)



C地点SD16(西より)



D地点S D01(東より)



D地点S D02(南より)



D地点S D03(南より)



D地点S K04(東より)



E地点S D02(南より)



E地点S D03(東より)



E 地点 S D 04~07 (東より)



E 地点 S D 05 遺物出土状態



E地点SD08(西より)



同上 遺物出土状態



E地点S D 09遺物出土狀態



同上



E地点S D 09遺物出土状態



E地点S D 10(南より)



E地点S X 11(東より)



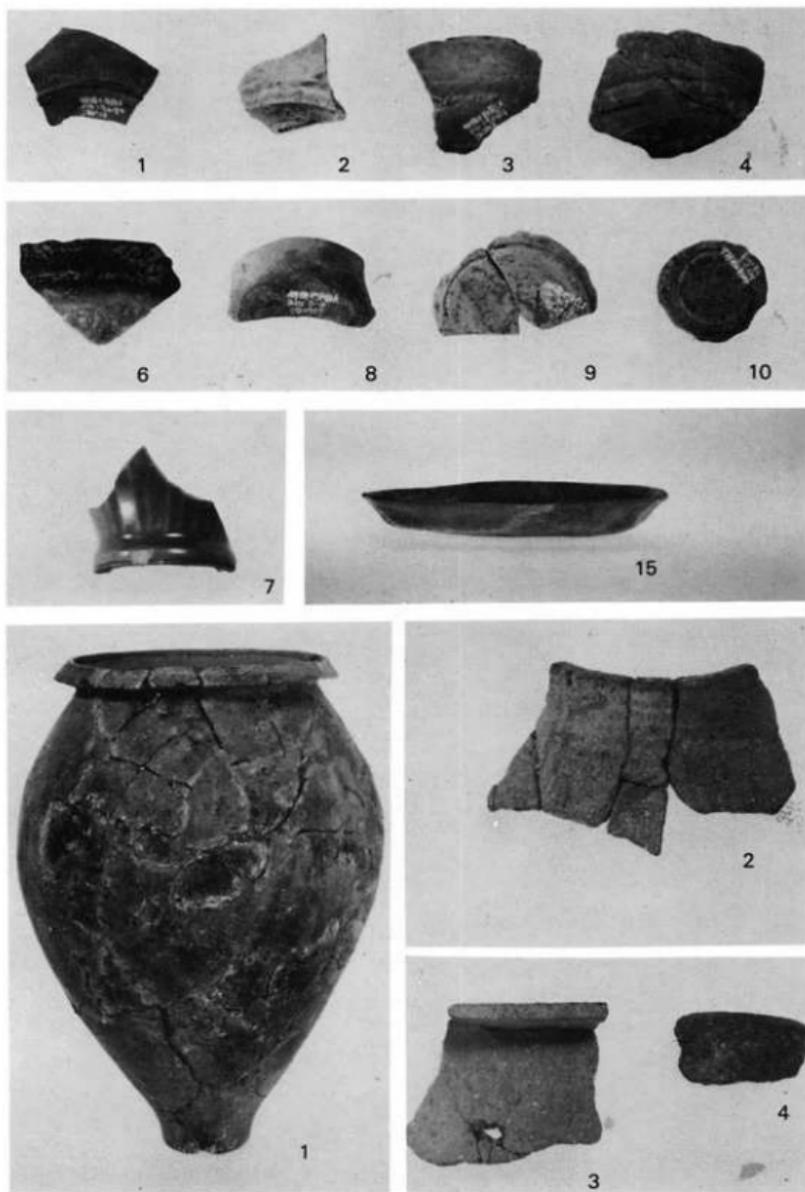
E地点S X 12(東より)



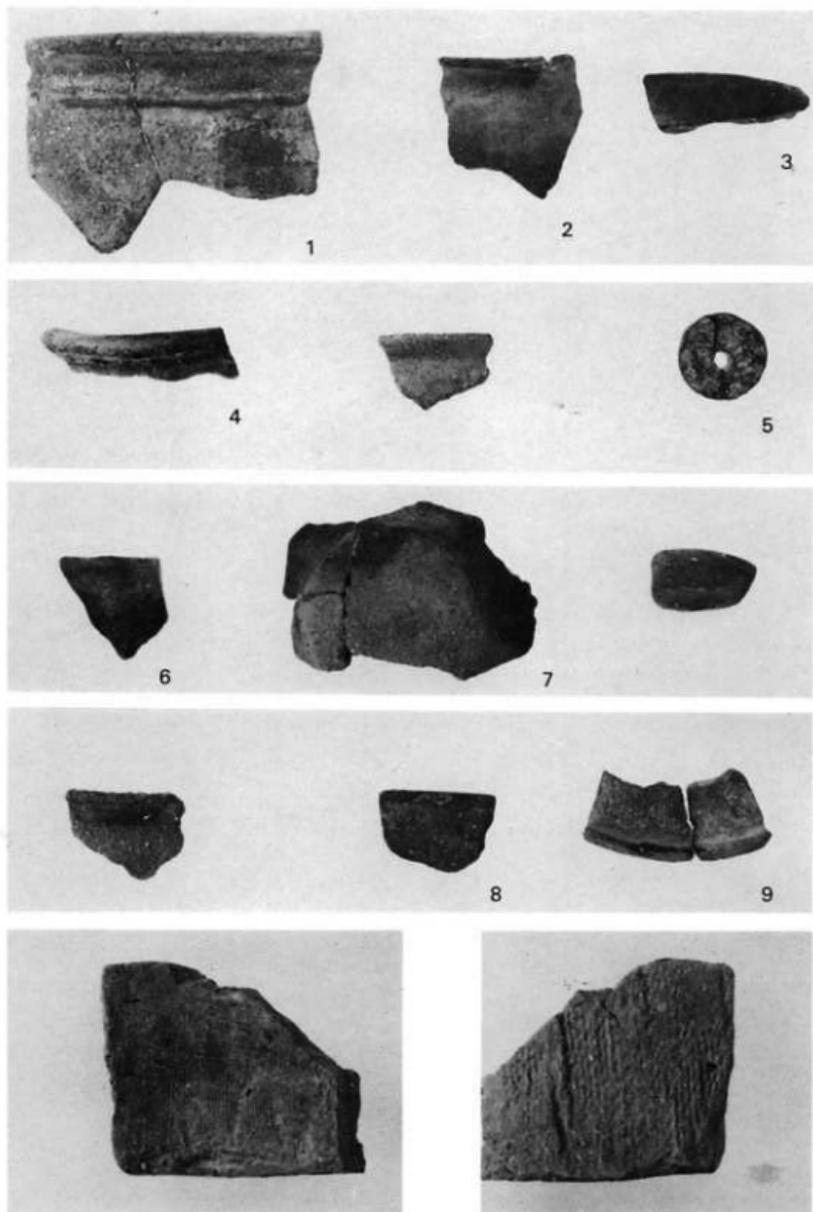
F地点1 Tr 全景(西より)



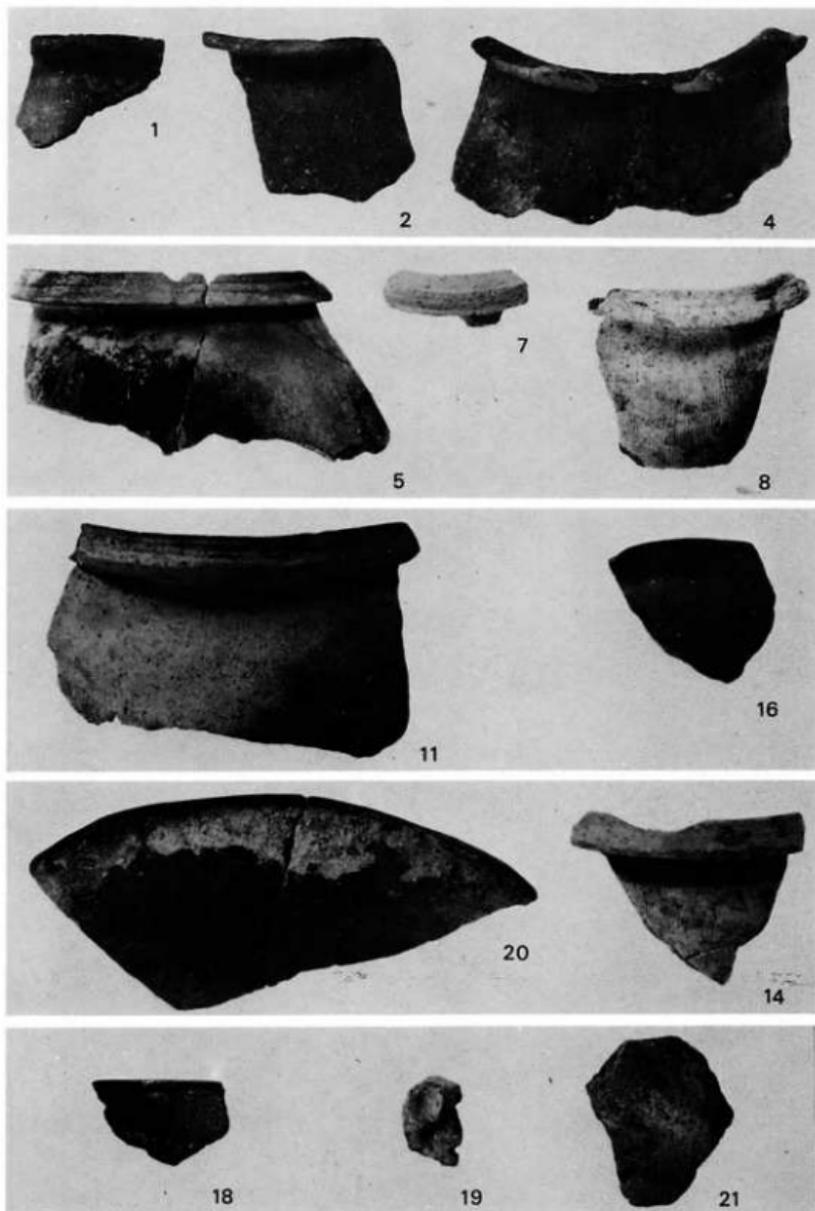
F地点2 T 全景(東より)



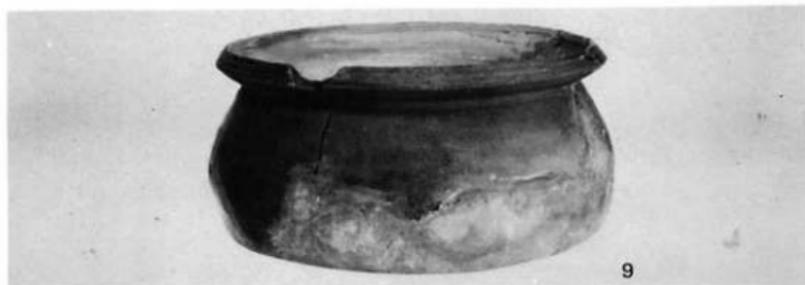
A地点S K 01~05, S B 07出土遺物



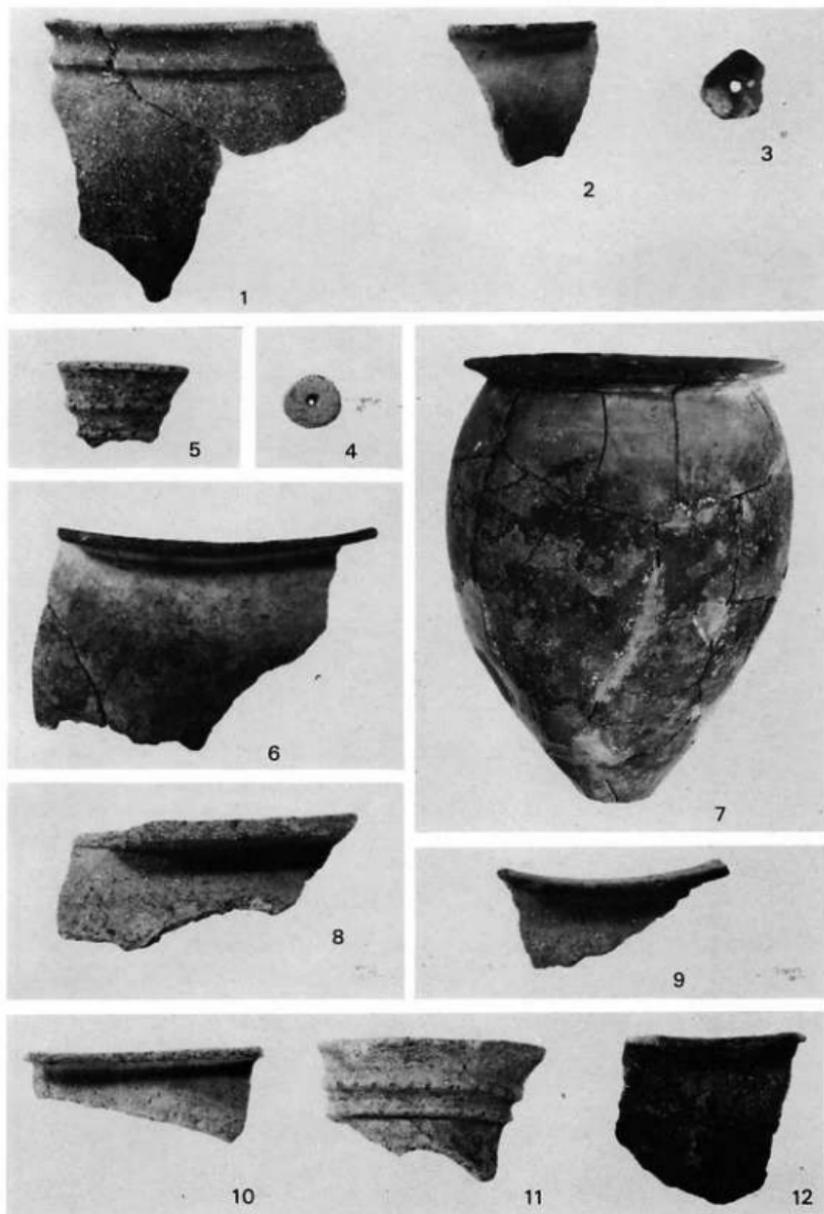
A地点SD16, SB17·19, SD20出土遺物



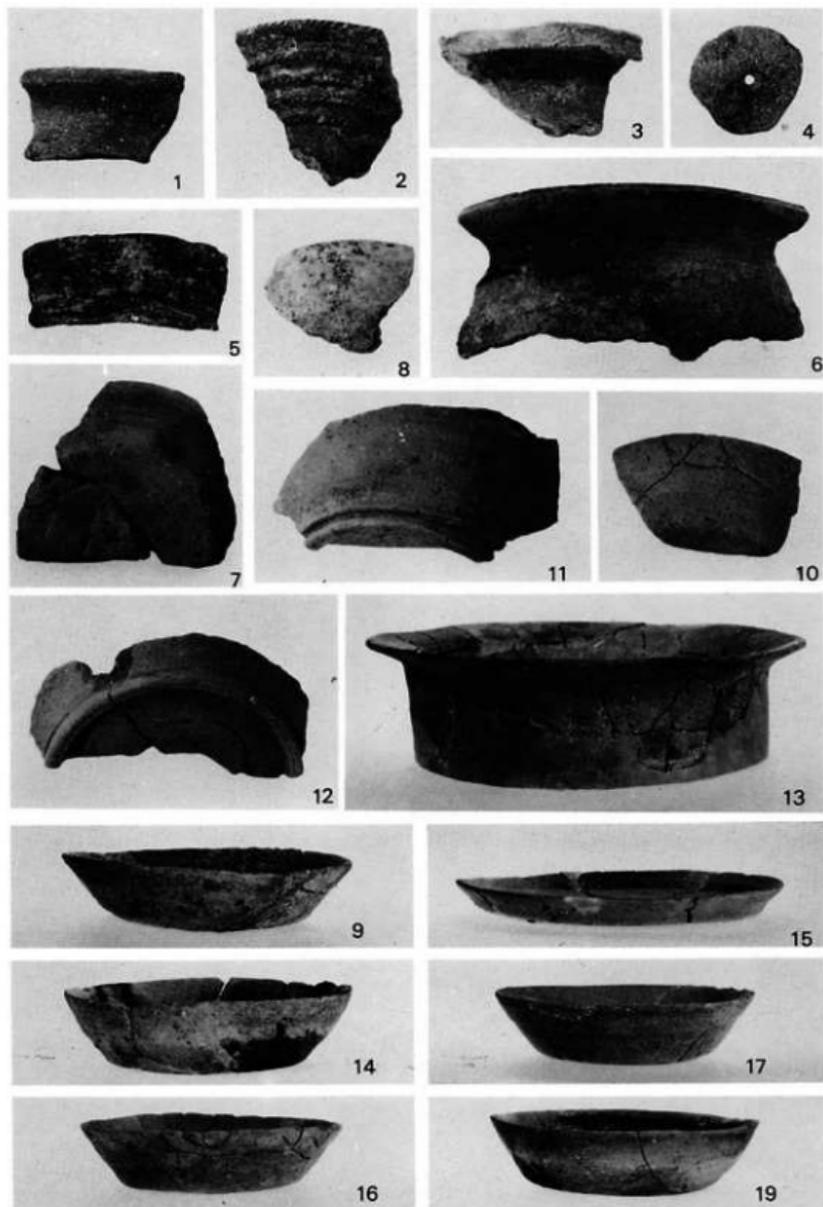
A 地点 S D 21 出土遗物



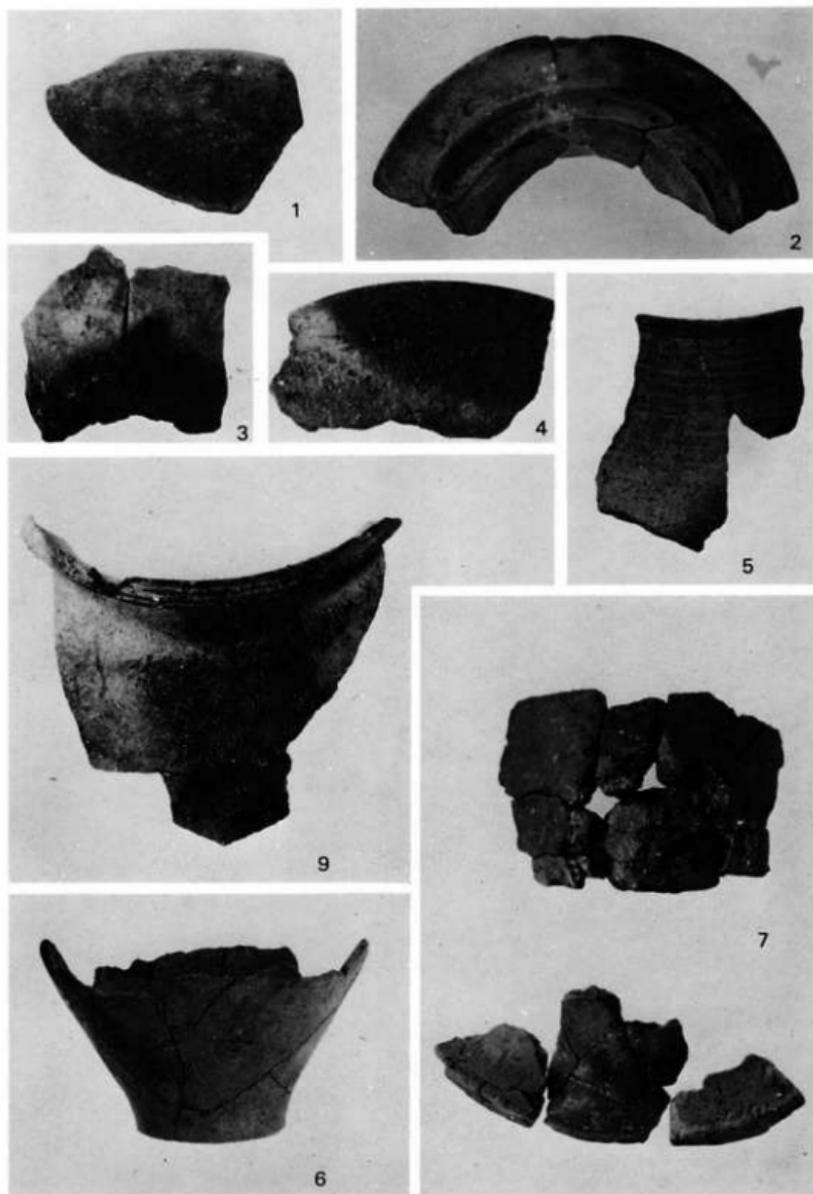
A 地点 S D 21 出土 遗物



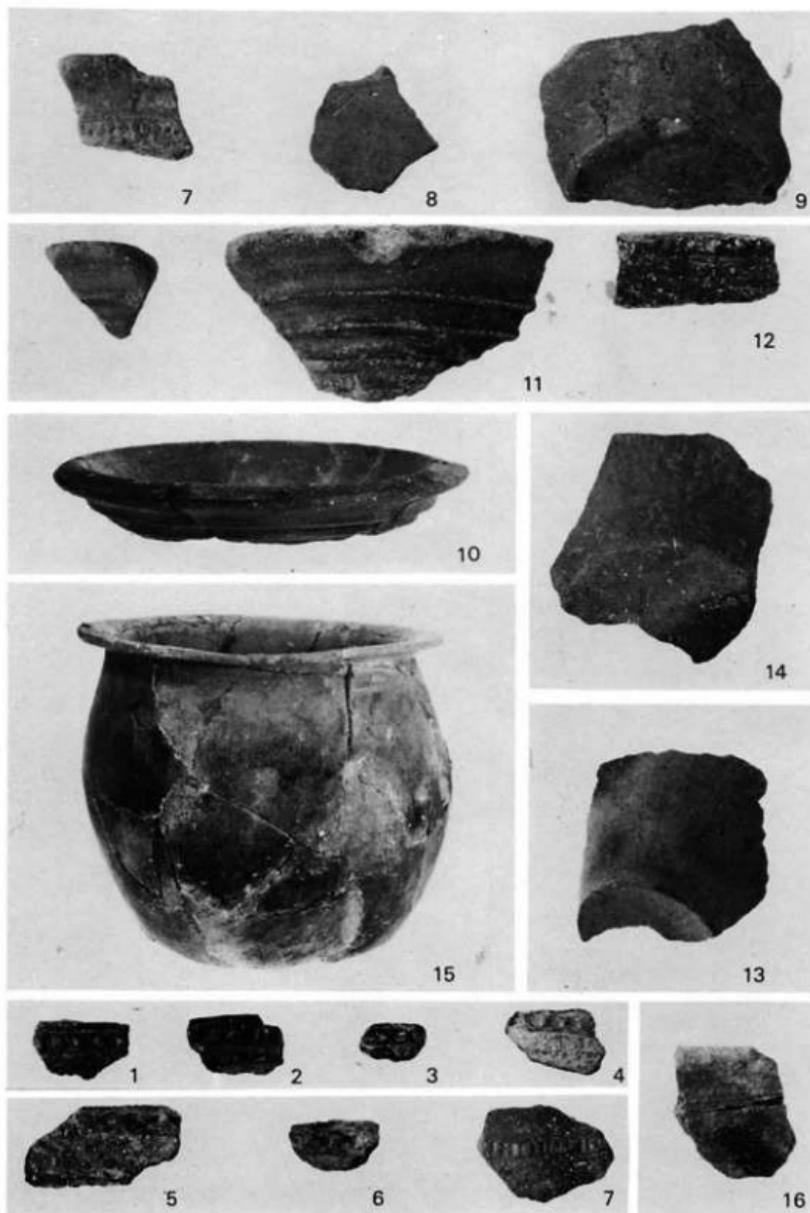
A地点S D23·24, S K25出土遺物



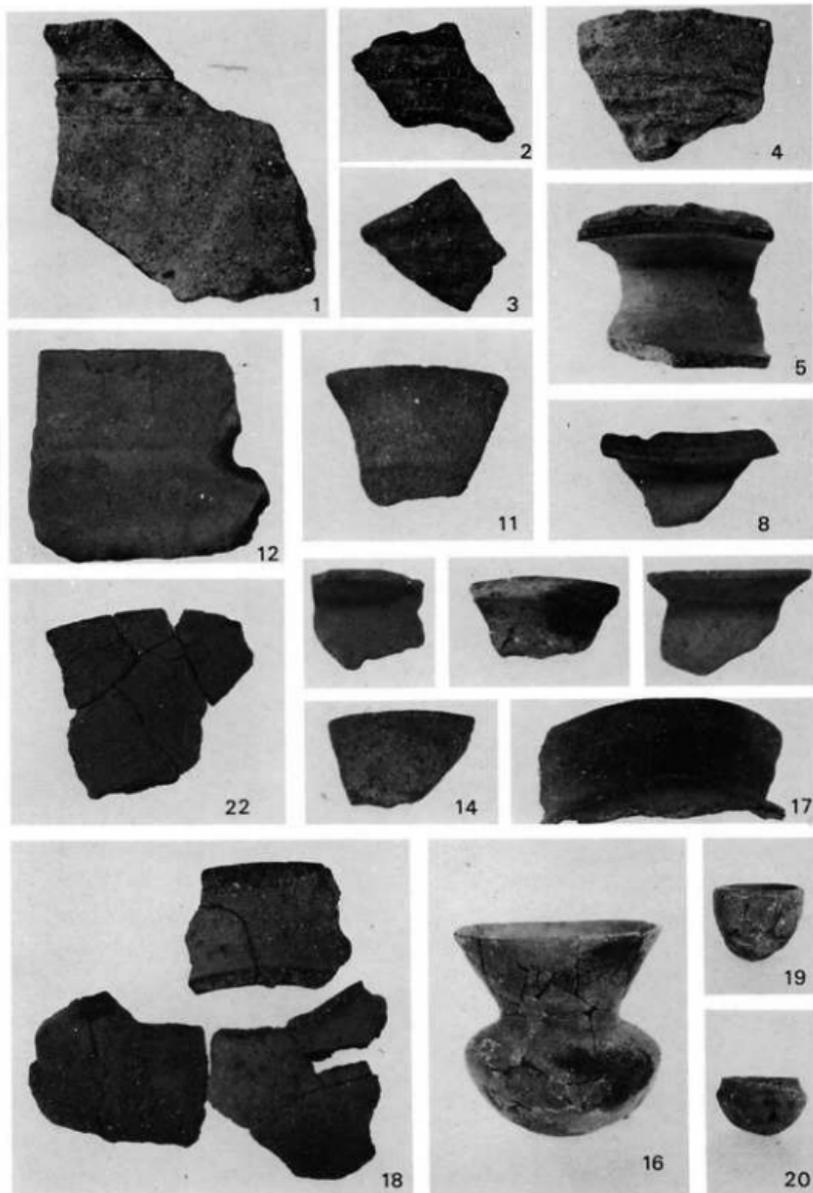
A 地点 S K 30 ~ S X 39 出土遺物



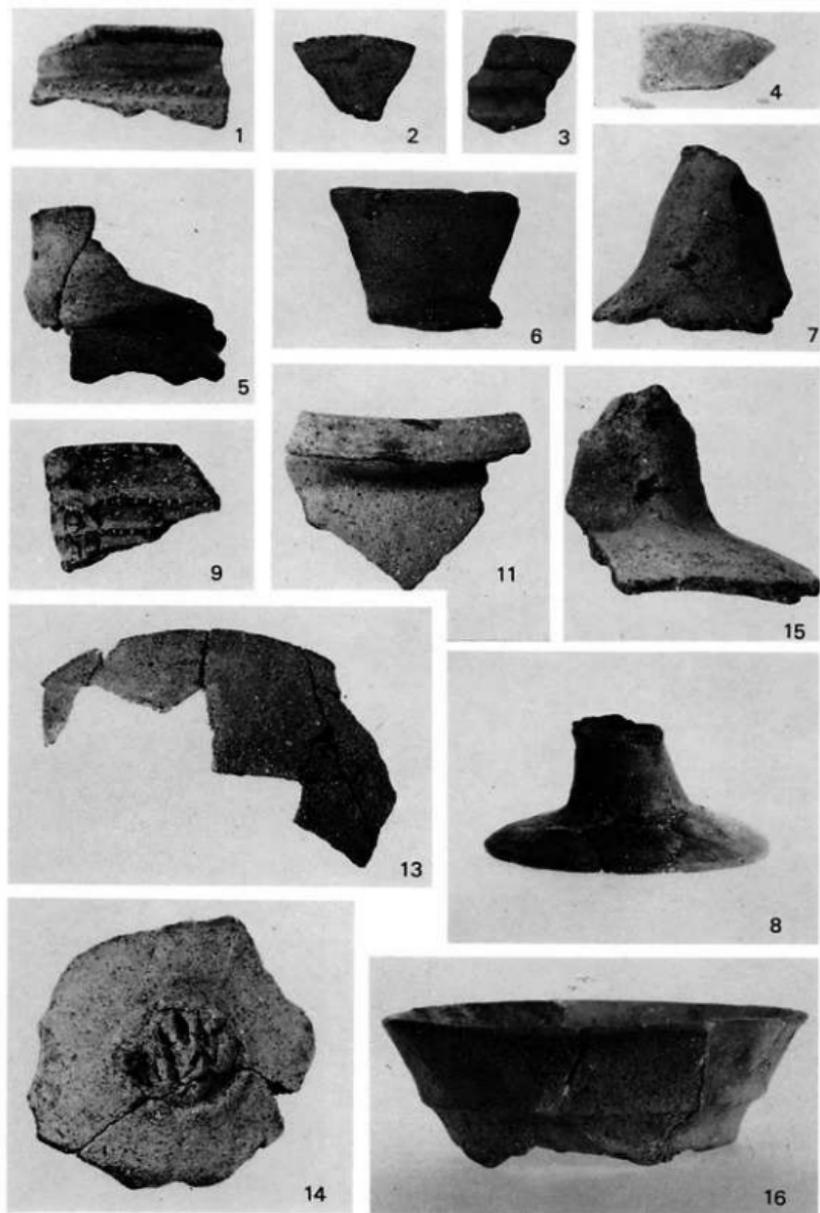
A 地点 S X 40, S K 41 出土遗物



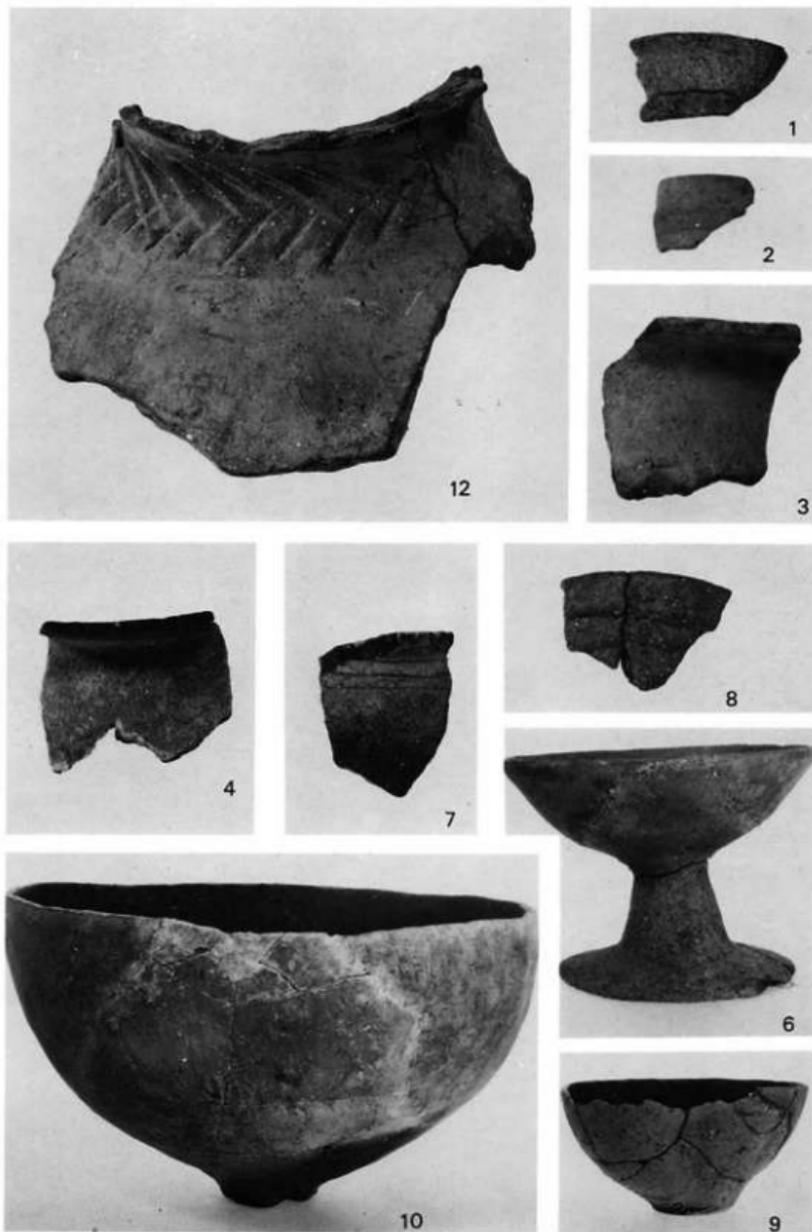
C地点S D 09 · 11 · 12 · 15 · 16出土遺物



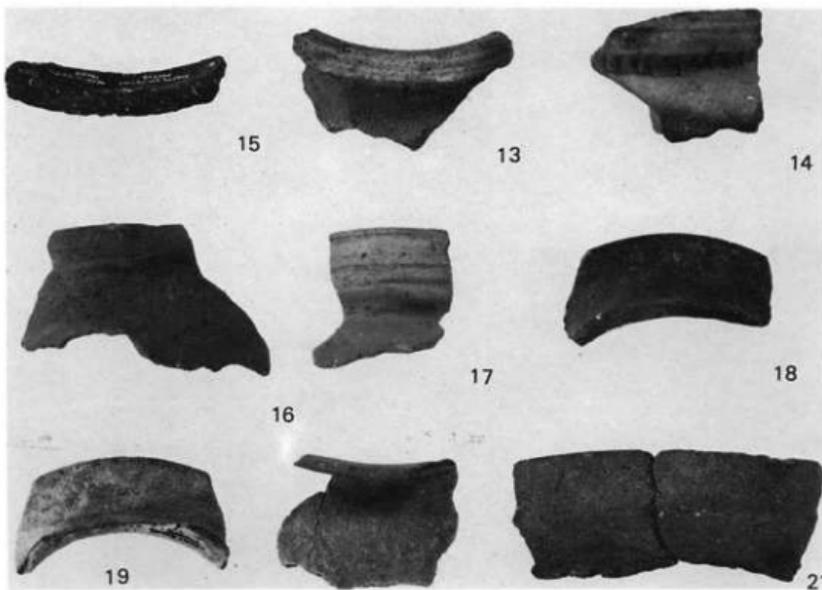
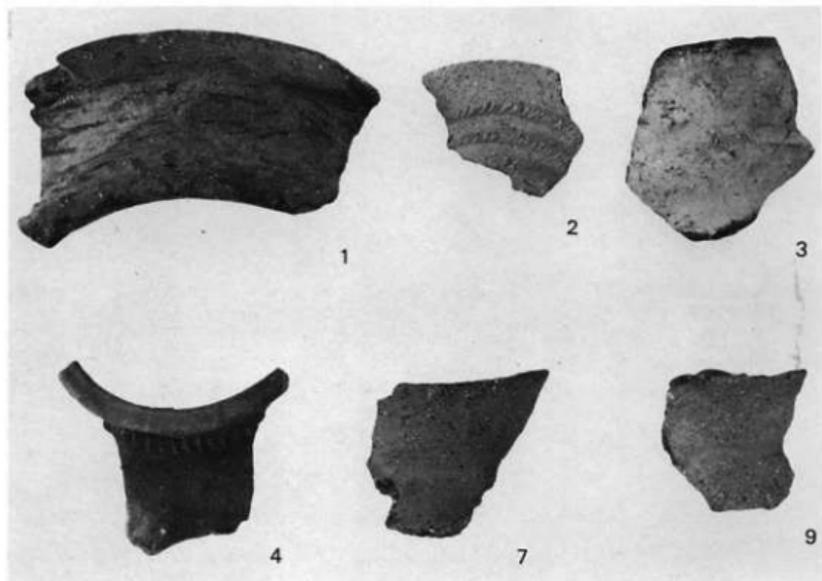
E 地点 S D 02 出土 遗物



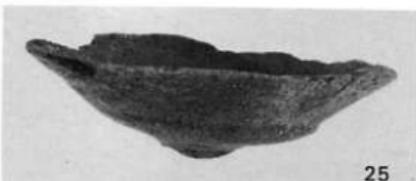
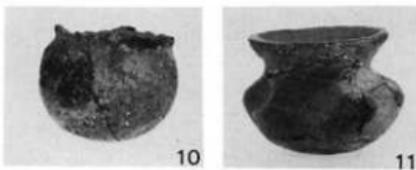
E 地点 S D 04 · 05 出土遗物



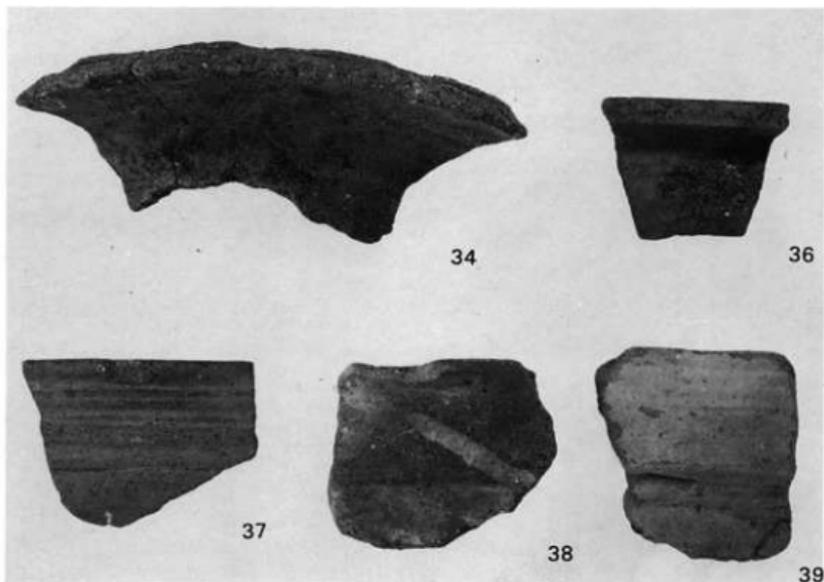
E 地点 S D 05. 06 · 07 出土遗物



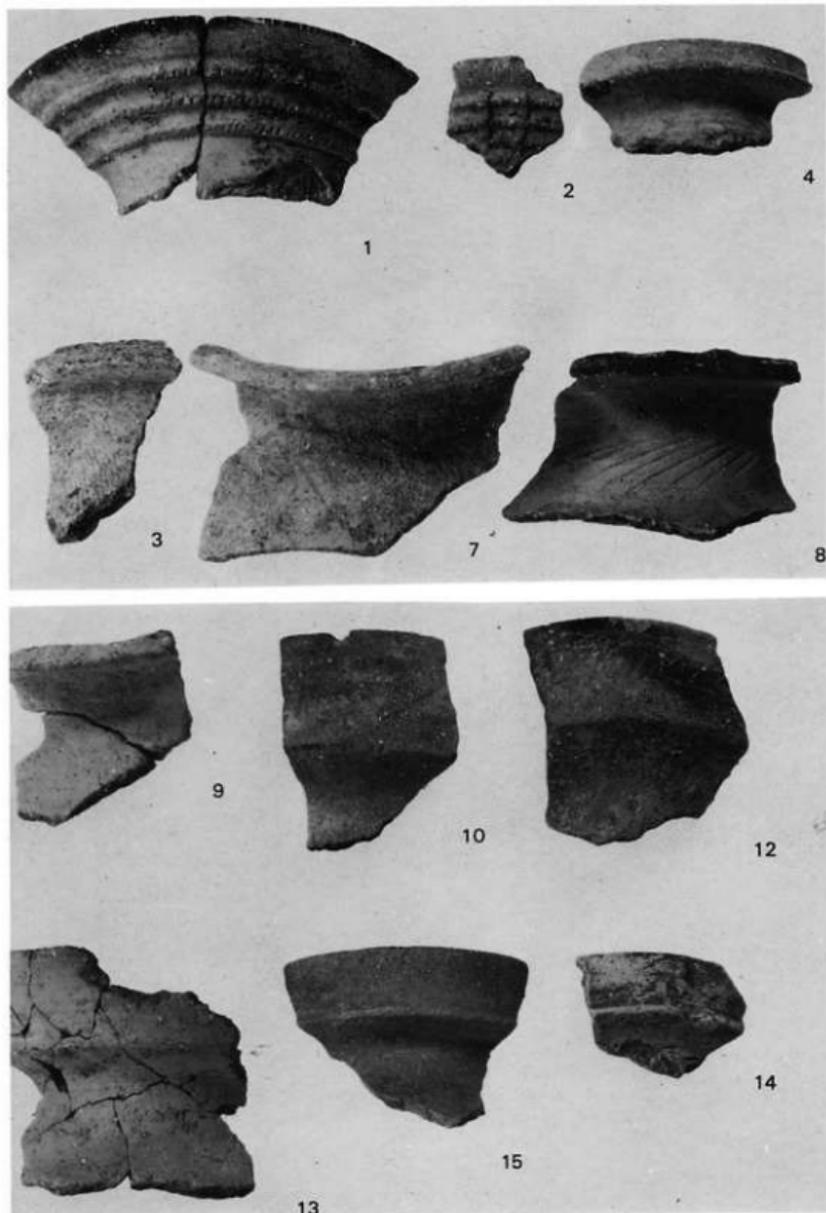
E 地点 S D 08 出土遗物



E 地点 S D 08 出土遺物



E 地点 S D 08 出土 遗物



E 地点 S D 09 出土 遗物



E 地点 S D 09 出土遺物



E 地点 S D 09 出土 遗物



33

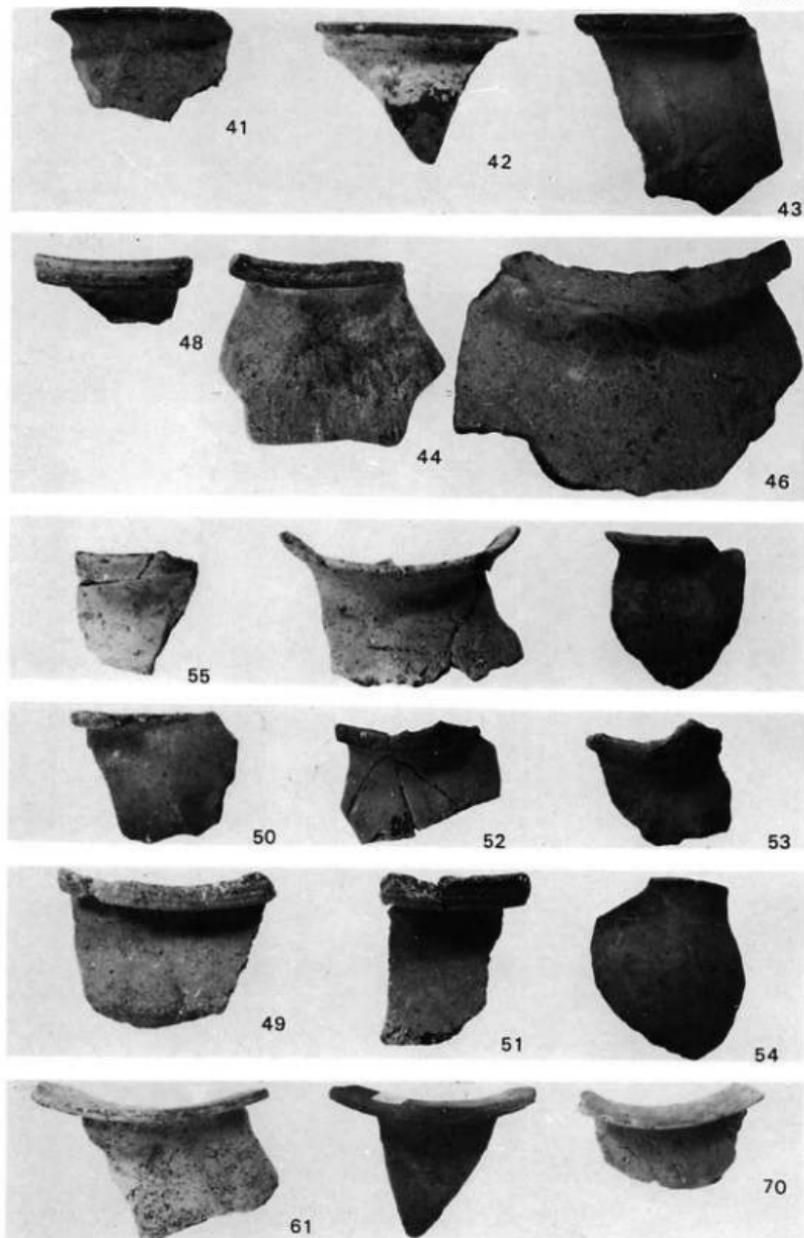


35

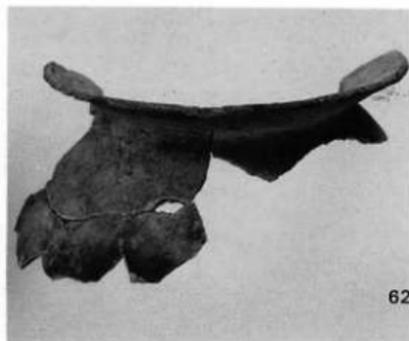
E 地点 S D 09 出土遺物



E 地点 S D 09 出土遗物



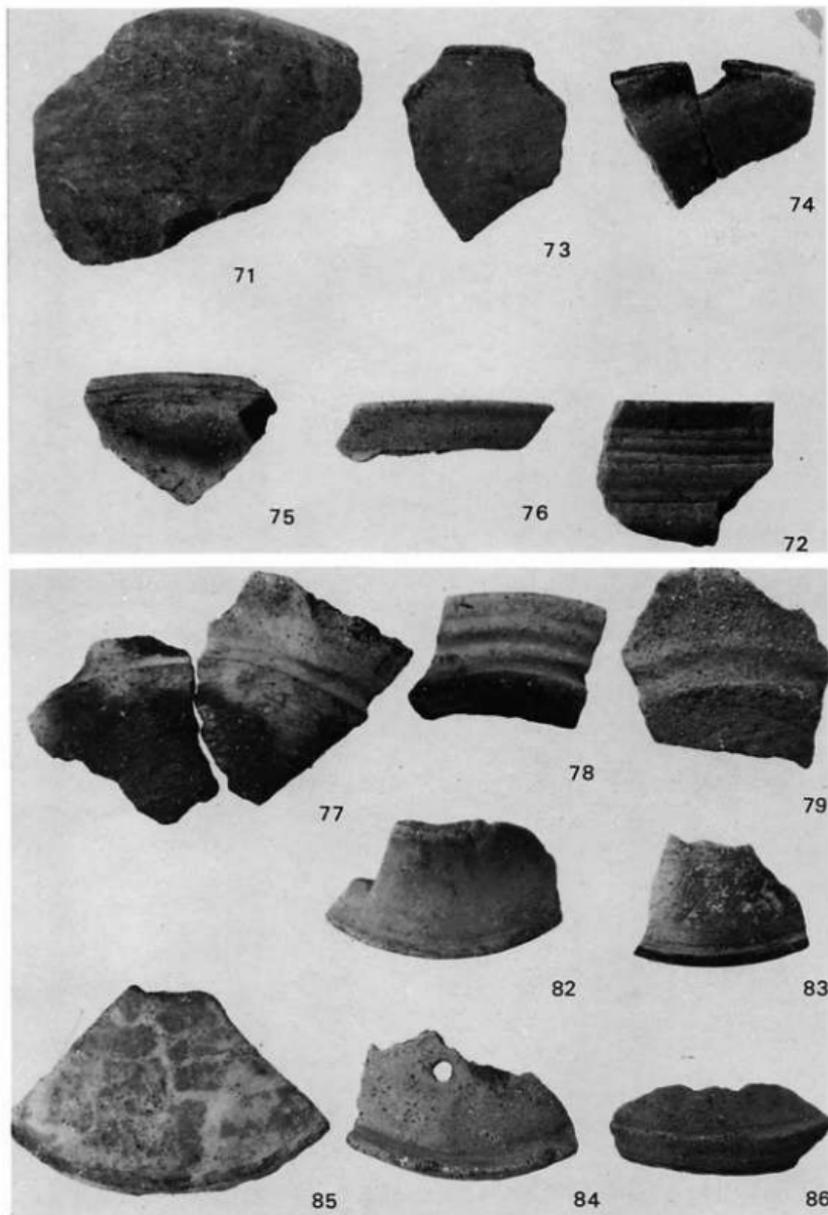
E 地点 S D 09 出土遗物



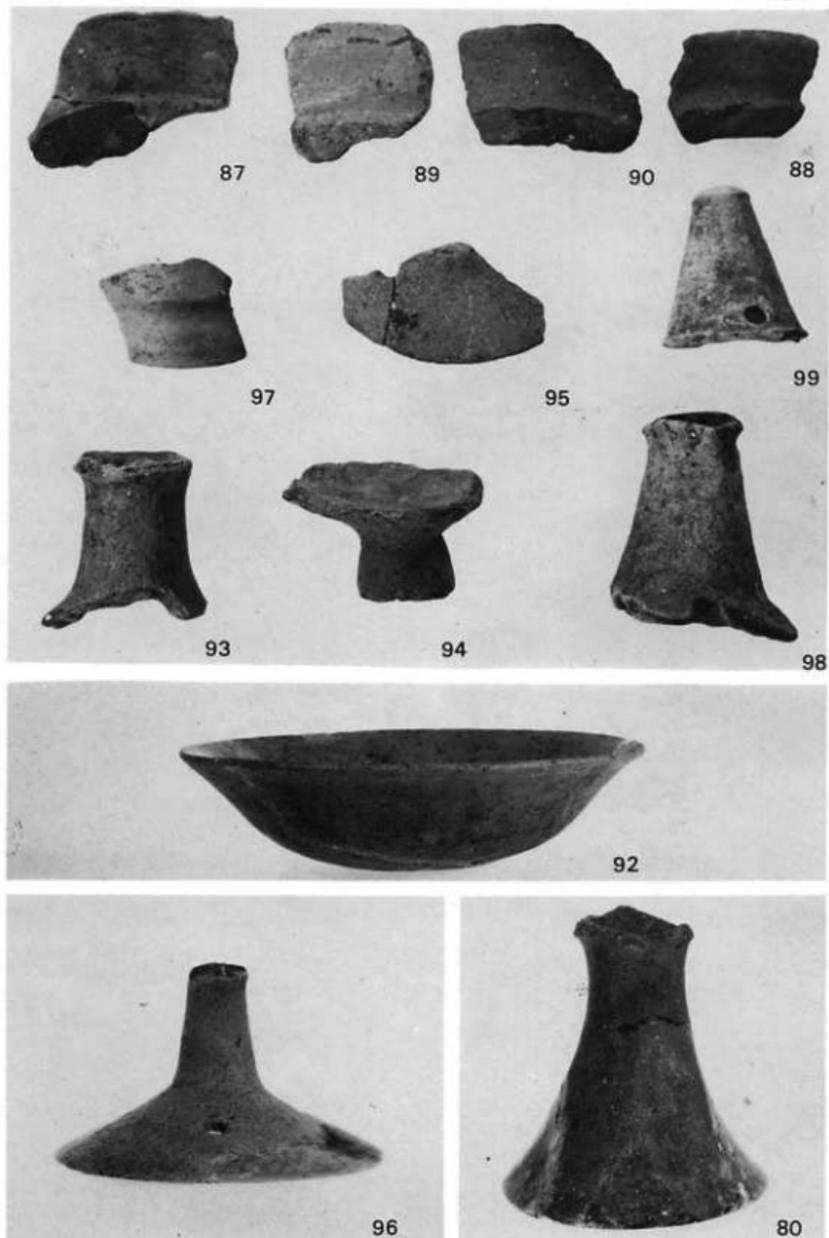
E 地点 S D 09 出土遺物



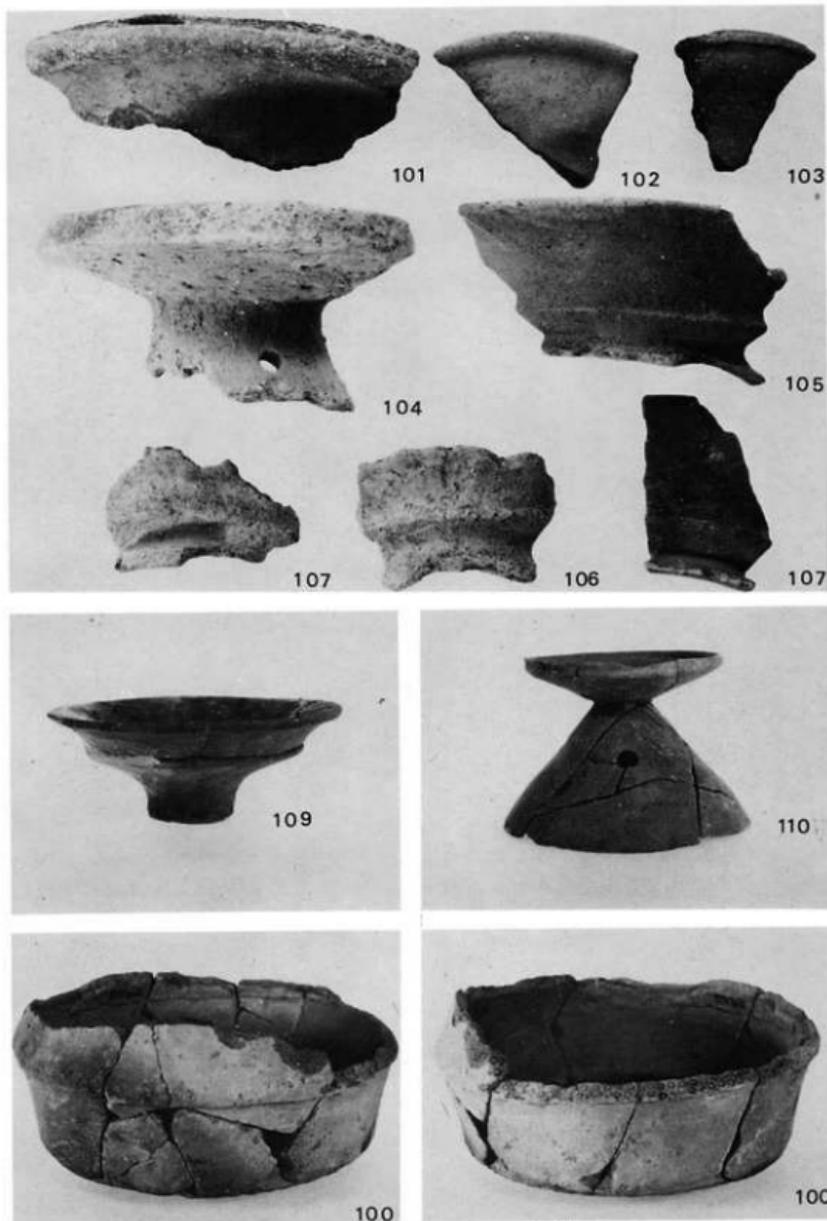
E地点S D 09出土遗物



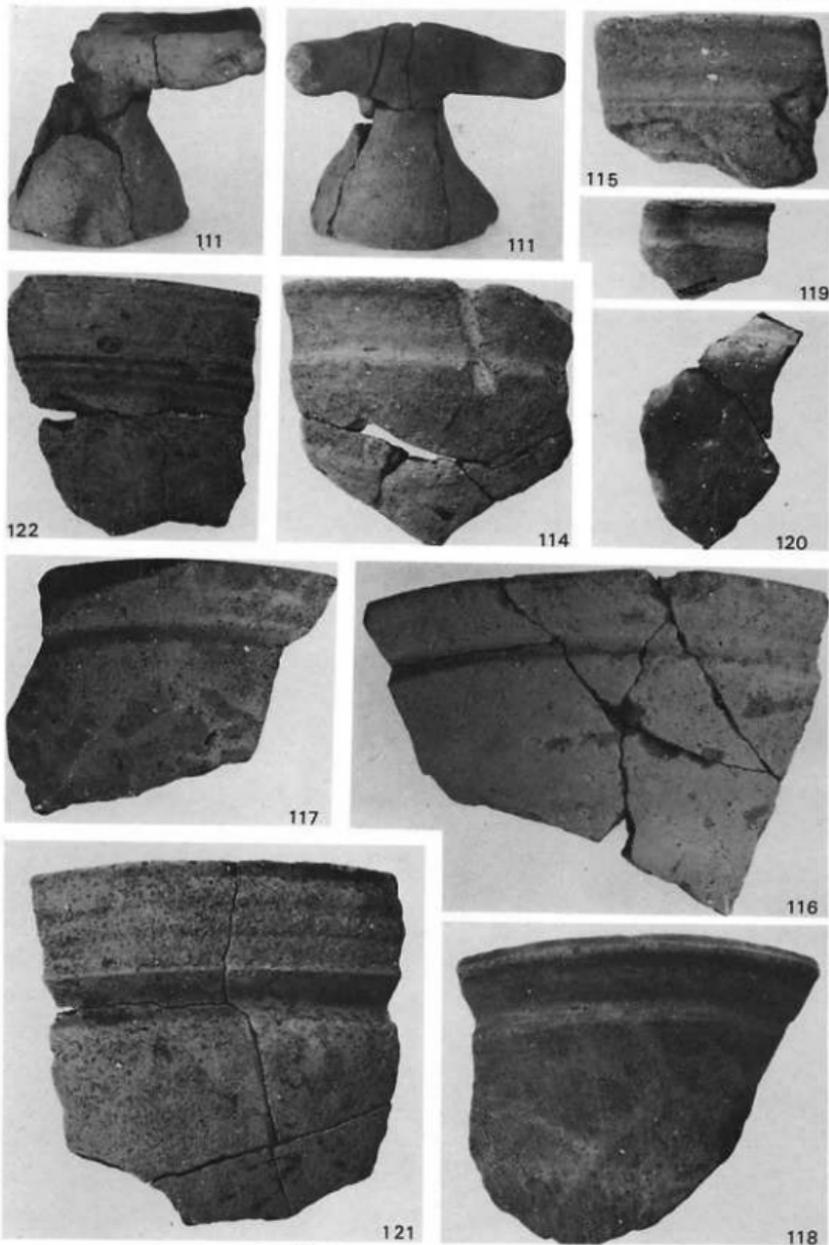
E 地点 S D 09 出土遗物



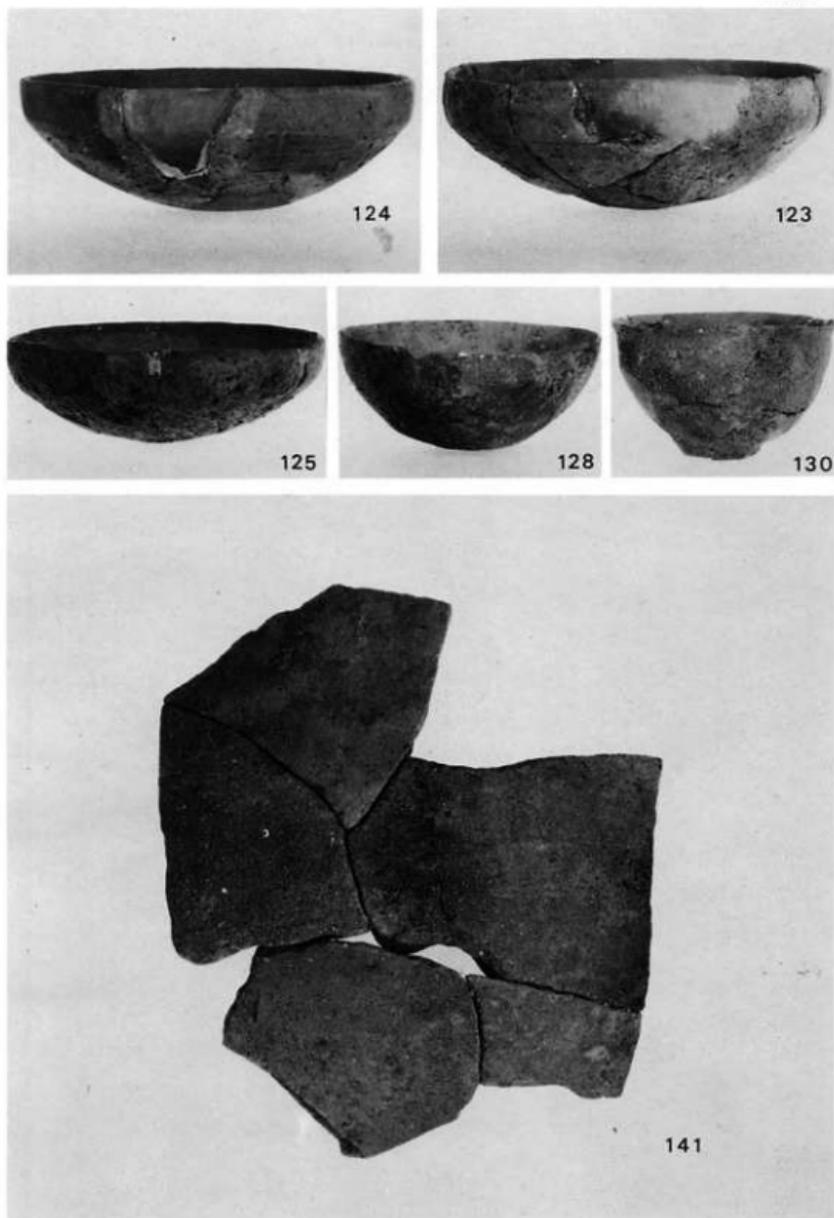
E 地点 S D 09 出土遗物



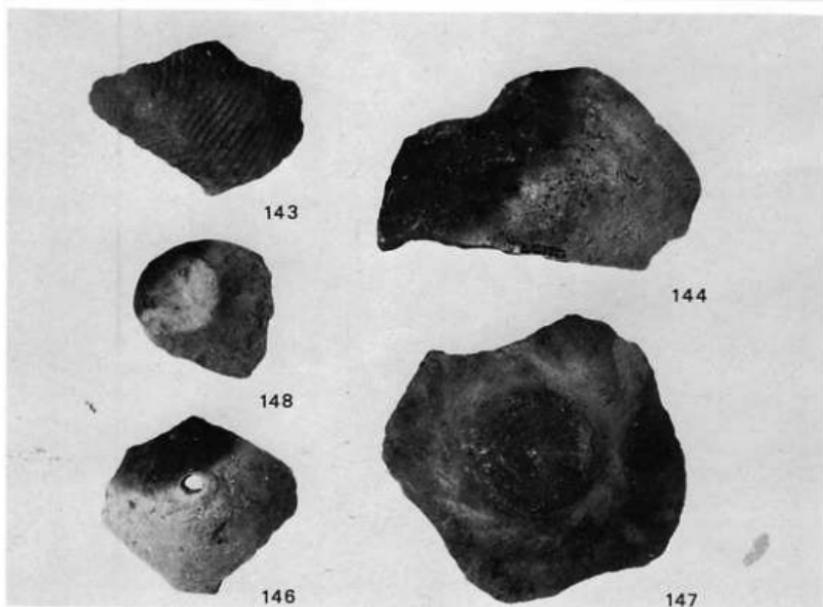
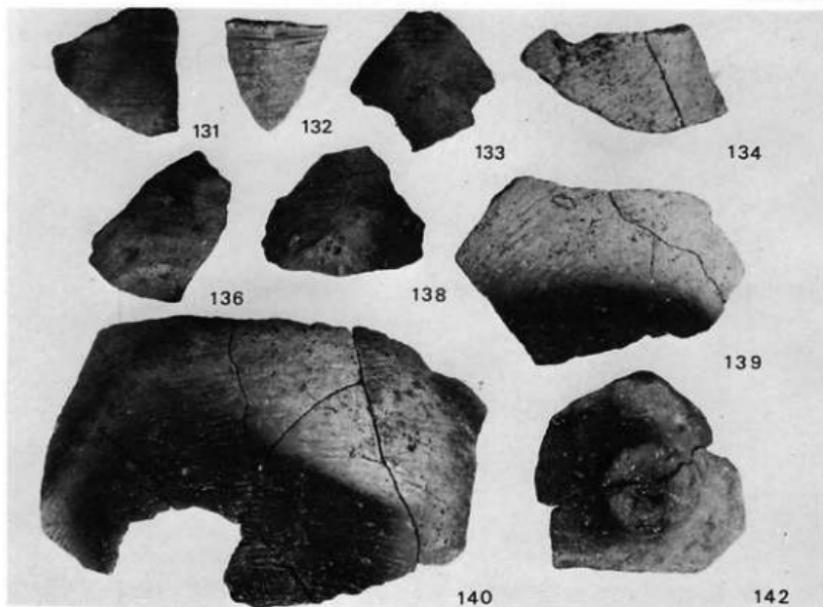
E 地点 S D 09 出土 遗物



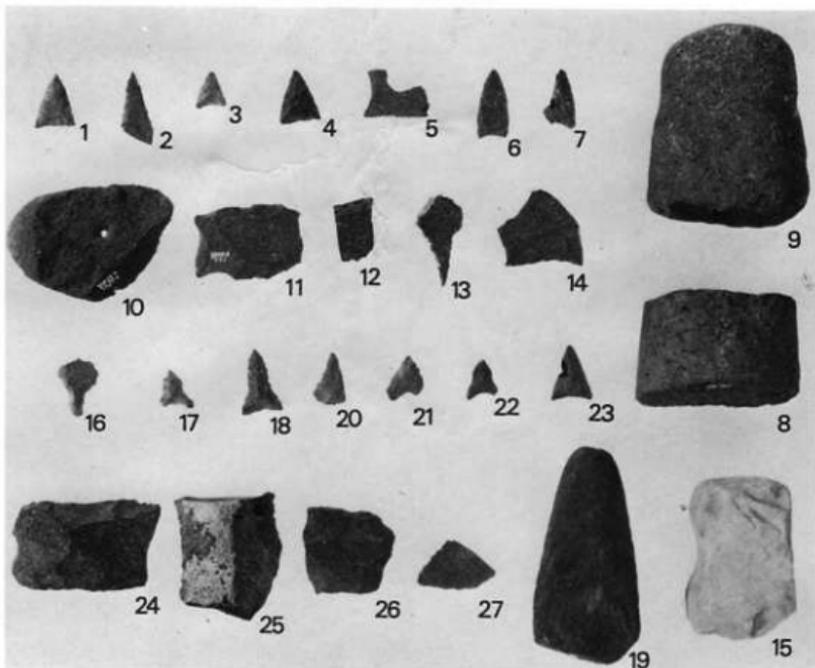
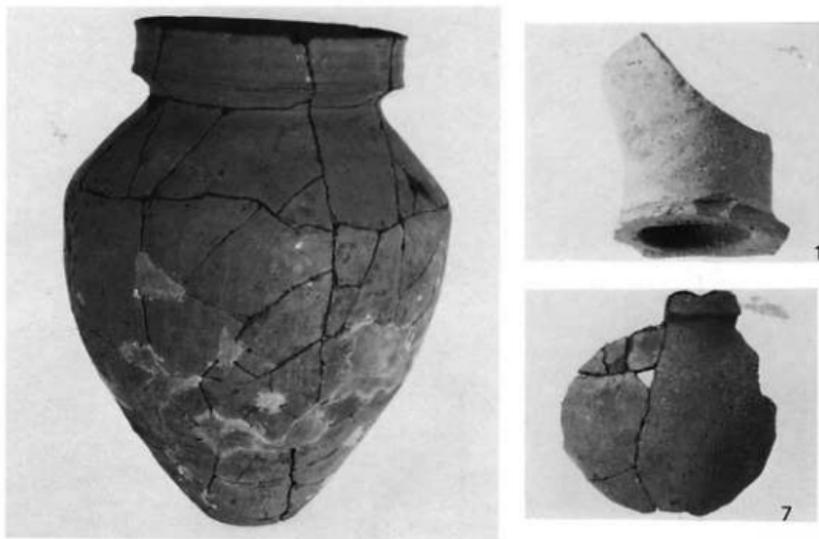
E 地点 S D 09 出土遗物



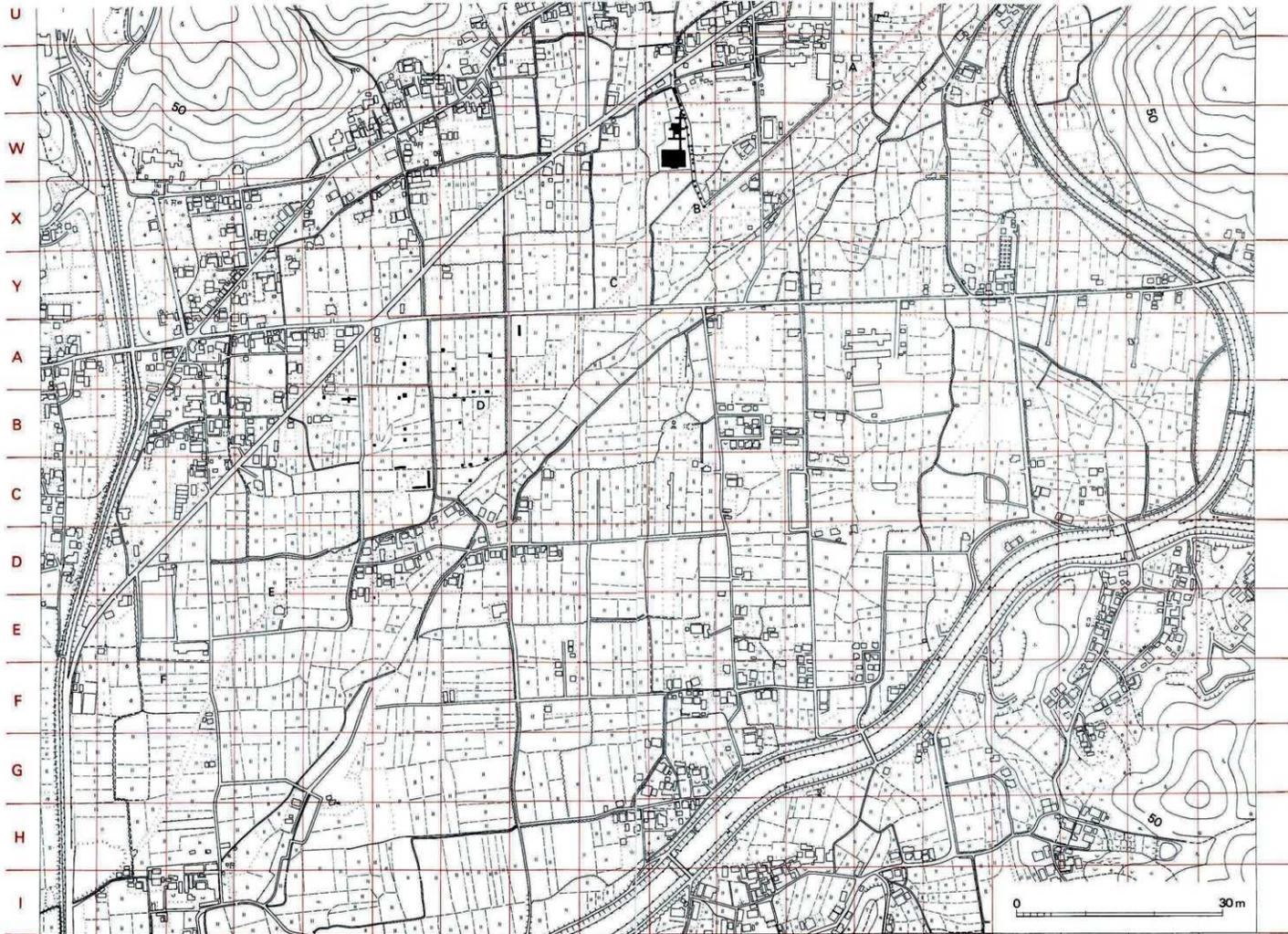
E 地点 S D 09 出土遗物



E 地点 S D 09 出土 遗物



E 地点 S D 10, S X II 出土遺物
井原線出土石器



御領遺跡周辺地形図 (1:5,000)

神 辺 御 領 遺 跡

— 国鉄井原線建設に係る発掘調査報告 —

1981. 3

編集・発行 広島県教育委員会

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

印刷 株式会社 柳 盛 社 印刷 所